大阪府教育庁文化財調査事務所年報

26

２０２３年2月

大 阪 府 教 育 委 員 会

はじめに

大阪府教育庁文化財調査事務所は、大阪府における埋蔵文化財発掘調査の拠点として平成９年に開設され、この間、府内における発掘調査やそれに伴う整理作業、報告書作成及び埋蔵文化財を活かした普及啓発・公開活用事業を主な業務として実施しています。

令和３年度においては、60 件の調査を実施し、調査面積は約 8,546㎡でした。そのうち発掘調査は９件実施しました。

主なものとして、八尾市久宝寺遺跡では、弥生時代後期～古墳時代の土器が大量に出土しました。また、井戸が発見され、その井戸枠は、古墳時代の準構造船を再利用したものであることが分かりました。

羽曳野市・藤井寺市陵東遺跡では、古墳時代前期の溝、井戸、古墳時代後期の掘立柱建物等が見つかり、さらに古墳時代後期の水田と畦畔が発見されました。

そして藤井寺市津堂遺跡では、古墳時代前期末から中期初頭にかけての総柱構造の掘立柱建物が複数棟連なって発見されました。倉庫の機能を持った建物の可能性が高く、古市古墳群周辺の古墳造営と深く関わる貴重な発見となりました。

一方、普及･啓発･公開事業については、新型コロナウィルス感染症拡大のため、中止や自粛をせざるをえない状況が続きました。そのなか感染対策を行った上で、府内出土の資料を利用した展示会の開催、府立博物館との連携事業など５件の事業を実施しました。文化財普及動画の作成にも取り組みました。

令和３年度の調査成果や普及・啓発・公開事業などといった調査事務所の実施した事業が、教育面や学術面などで皆様の役立つことを願っています。最後にこの場をお借りしまして、事業実施にご協力いただきました関係の皆様にお礼申し上げます。

令和５年３月 31 日

大阪府教育庁文化財保護課長
稲田　信彦

例　　言

１．本書は大阪府教育庁文化財調査事務所年報の第 26 冊である。

２．本書には令和３年度に大阪府教育庁文化財調査事務所が実施した埋蔵文化財調査報告及び公開活動等の記録を記載している。

３．埋蔵文化財調査概要報告 (本書８～ 15 頁) の表題には以下の内容を示す。

遺跡名（令和３年度調査番号）

（１）　所在地

（２）　調査の原因となった事業

（３）　調査担当者

なお、概要報告表題の調査番号は表３　令和３年度調査箇所一覧の調査番号に一致する。

４．本書の執筆は各担当が行い、文末に氏名を記した。編集は調査管理グループ河原秋桜が、同グループ中西裕見子、原田昌浩、竹原伸次の監修のもとで行った。

５．図、表、写真は各項ごとに番号付けしている。

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次

令和３年度における埋蔵文化財調査の概況 …… 1
令和３年度文化財保護課・文化財調査事務所組織図 …… 4

【試掘確認調査の概要報告】
名越遺跡　（２１０２３）…… 6
豊能町牧地区　（２１０４１）…… 7

【主要発掘調査の概要報告】
久宝寺遺跡　（２１００８）…… 8
陵東遺跡　（２１００９）…… 9
津堂遺跡　（２１０１７）…… 10
府中遺跡　（２１００２・２１０２６）…… 14
宮園遺跡　（２１０３０）…… 15

【新指定　大阪府指定文化財の紹介】
日本基督教団大阪教会本館 …… 16
金剛寺一切経 …… 20

【資料紹介】
大坂城跡発掘調査報告（ドーンセンター第２次発掘調査報告）…… 23
牛石９号墳の発掘調査 …… 62
令和３年度弥生プラザ展示『水差形土器の世界』展示資料について …… 70

【事業報告】
文化財調査事務所での普及・啓発・公開事業 …… 74
令和３年度収蔵資料 …… 77
令和３年度調査・研究等の検討会 …… 77
令和３年度大阪府教育庁文化財保護課刊行物一覧 …… 77
令和３年度資料貸出・掲載・閲覧事業一覧 …… 78
令和４年度文化財保護課・文化財調査事務所組織図 …… 84

奥付

令和３年度における埋蔵文化財調査の概況

【調査件数と調査面積】

大阪府教育委員会が令和３年度に実施した調査件数は、**発掘調査が９件**、**試掘調査が５件**、**確認調査が２件**、**試掘・確認調査が２件**、**立会調査が42件**の**合計60件**であった（表3）。

また、調査面積は、算出が困難な立会調査を除き、**8,546㎡**である。前年度と比して調査面積はやや減少（令和２年度は8,848㎡）したものの、調査件数は２倍近い件数（令和２年度は33件）となっている。

調査原因別で推移をみると（表１）、道路事業については令和２年度以上に件数、面積とも増加している。このことは、昨年度の傾向と同様、一般府道八尾富田林線（藤井寺工区）に伴う発掘調査の実施によるところが大きい。住宅事業については、ここ数年増加していたが、令和３年度は前年度に比して半減している。これは、大規模な府営堺宮園住宅の建て替え事業が一段落してきたことに起因する。学校事業については、前年度に比して調査面積は大きく減少しているものの、調査件数は増加している。これは、とくに立会調査の実施件数が多いことによる。農林事業については、前年度よりも件数、面積が増加している。これは、令和元年度より南河内において府営農村総合整備事業に伴う確認調査や発掘調査が行われていることに加え、令和３年度からは府北部において同事業に伴う試掘調査が始まったことによる。

地域別でみると、泉北地域では面積は半減しているものの、件数は増加している。また、泉南地域では件数、面積とも前年度より増加している。これは、都市計画道路泉州山手線の建設に先立ち、試掘・確認調査を開始したことによる。南河内地域は、他地域と比較して、令和元年度より件数、面積とも多い地域である。これは、前述の都市計画道路八尾富田林線に伴う調査を令和元年度より開始したことによるところが大きい。今後もしばらく道路計画用地における試掘・確認調査やその結果に基づく発掘調査を実施していくことになるであろう。令和元年、２年と事業がなかった豊能地域で件数や面積が増加している。これは、前述の農林事業である、豊能町牧地区における府営農村総合整備事業計画に伴い、広範囲に試掘調査を実施したためである。

過去10年間における調査件数と面積を概観すると、調査面積は平成24年度当時よりは減少しているものの、平成25年度以降の調査件数は大局的にみれば40件台から60件台の範囲内で推移しており、大幅な減少はみられない。調査面積も、やや減少傾向であるが、平成29年度以降も常に7,000㎡以上の調査実績であり、大きな変動はみられない。これは近年、泉北地域における府営住宅建替に伴う**宮園遺跡**の調査や都市計画道路大阪岸和田南海線建設に伴う**府中遺跡**の調査、南河内地域における都市計画道路八尾富田林線建設に伴う**太田遺跡**、**津堂遺跡**、**陵東遺跡**の調査が継続的に実施されてきたところが大きい。

【主な調査成果】

令和３年度の調査成果の概要については６頁以降に主要なものを掲載している。ここではこれらについておもな時代ごとに概観しておく。

弥生～古墳時代

和泉市**府中遺跡**では、弥生時代末から古墳時代初頭の土坑、落ち込み、竪穴住居２棟などが見つかっており、当該期の集落が広がる様相が認められた。

表1　原因別調査面積・件数一覧（面積：㎡）

	H24		25		26		27		28		29		30		R1		2		3	
	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数
住宅	124	9	727	10	1,800	5	108	8	4,616	7	745	5	175	5	1,470	5	3,179	7	1,563	9
農林	1,741	3	1,995	4	959	4	264	2	20	2	224	5	2	2	130	1	290	2	328	3
道路	6,404	25	6,988	22	2,138	8	3,778	17	5,239	11	6,255	19	1,998	18	293	7	4,643	11	5,250	13
下水	16	1	8	1	0	1	118	2	0	2	0	0	0	0	30	1	0	1	0	6
河川	48	1	0	0	0	2	0	2	0	2	0	0	3,690	4	10	1	0	0	0	1
学校	78	3	760	4	10	2	50	1	0	6	46	3	1	4	1,292	14	736	9	100	15
その他	2,120	43	4,155	23	4,535	23	597	13	635	22	728	19	1,042	29	5,367	14	0	3	1,305	13
合計	10,531	85	14,633	64	9,442	45	4,915	45	10,510	52	7,998	51	6,908	62	8,592	43	8,848	33	8,546	60

表2　地域別調査面積・件数一覧（面積：㎡）

	H24		25		26		27		28		29		30		R1		2		3	
	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数
大阪市	98	3	414	5	2,621	3	22	3	150	7	173	6	59	5	1,606	7	0	3	29	2
泉南	81	8	865	4	0	4	240	2	361	4	212	4	3,969	9	1,282	5	33	3	536	7
泉北	1,166	6	1,139	5	0	2	2,757	6	9,181	11	5,782	8	146	7	1,550	7	4,903	12	2,628	17
南河内	3,985	14	7,367	11	1,742	9	653	11	619	8	598	5	123	7	3,784	9	3,838	8	3,790	11
中河内	1,091	21	686	18	317	9	141	10	135	9	0	1	766	13	194	6	0	3	1,259	14
北河内	1,391	9	116	5	559	5	800	3	0	4	94	12	1,063	11	99	3	74	4	32	3
三島	2,673	22	712	15	867	10	254	5	60	7	91	6	332	9	77	6	0	0	37	2
豊能	46	2	3,334	1	3,336	3	48	5	4	2	1,048	9	450	1	0	0	0	0	235	4
合計	10,531	85	14,633	64	9,442	45	4,915	45	10,510	52	7,998	51	6,908	62	8,592	43	8,852	33	8,546	60

八尾市**久宝寺遺跡**では、弥生時代後期後半から庄内式期の土器が大量に出土しており、当該期の集落が周辺に存在することが想定される。古墳時代中期から後期にかけての遺構面も確認されている。なかでも井戸176の井戸枠は、準構造船の船首あるいは船尾を切断して再利用したものであり、埋土からは土師器、須恵器、製塩土器、韓式系土器等が出土した。近年、中北河内の調査では古墳時代の準構造船材を井戸に転用した事例が増加しており、河内湖周辺の渡来系の様相を端的に示している。

羽曳野市・藤井寺市**陵東遺跡**の調査は、盾持人、力士、男子などの人物埴輪が出土した古墳時代後期初頭ごろの溝が見つかった調査区の隣接地である。同じ段丘面には古墳時代前期の溝、井戸や古墳時代後期の掘立柱建物、溝が、開析谷では古墳時代後期の水田と畦畔が発見された。自然科学分析によっても水田耕作が傍証され、古市古墳群造営時期に当遺跡など周辺では水田開発が行われていた様相が判明してきた。

藤井寺市**津堂遺跡**では、古墳時代前期末から中期初頭遺構にかけての遺構が多数確認された。掘立柱建物7棟、敷地北端を区画する柵（塀）、土坑、井戸などであり、少なくとも3時期の建て替えが現段階で想定されている。とくに束柱をもつ総柱構造の掘立柱建物が複数棟連なっており、倉庫の機能をもった建物である可能性が高い。当遺跡の性格はその立地と相まって、古市古墳群で最も早く築造されたと考えられる大型前方後円墳の津堂城山古墳築造と連動して営まれた集落として考えることが可能であり、古市古墳群造営の歴史的背景を探求するうえでも重要である。

古代

和泉市**府中遺跡**では、これまでの調査と同様、奈良、平安時代の遺構や遺物が散見され、集落は弥生時代から古墳時代、古代にかけて連綿と営まれていることがわかる。

堺市**宮園遺跡**では、8世紀以降の須恵器、土師器、土馬、緑釉陶器、三彩のほか、10世紀ごろの黒色土器が大量に出土した。同時期の建物は今回発見されなかったが、古代において集落が営まれていたことが想定されている。なお、今回の宮園遺跡の調査では、古代の粘土採掘土坑は認められなかった。

中世

古代において集落が営まれていた**府中遺跡**や**宮園遺跡**では、中世の鋤溝、溝、ピット、土坑、中世耕作土などが確認されており、中世以降、水田開発が図られたことがわかる。

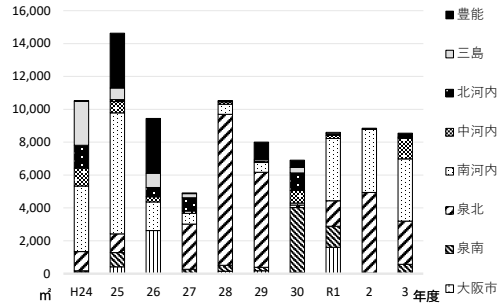
また、試掘・確認調査が行われた貝塚市**名越遺跡**や**豊能町牧地区**では、ともに中世の遺構が発見された。

名越遺跡では、これまで大規模な調査事例がなく内容がよくわかっていなかったが、今回の調査で中世の耕作層や鋤溝等が確認され、当該地が中世に開発されていたことが判明した。

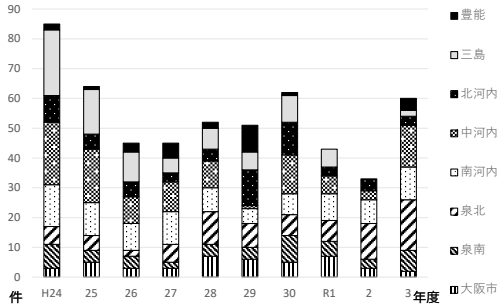
豊能町牧地区は、埋蔵文化財包蔵地の有無がこれまで確認されてこなかった地域だが、今回の広範囲に及ぶ試掘調査により、鎌倉時代を中心とした中世の井戸や遺物片が出土し、当地が鎌倉時代にはすでに開発が行われていたことが明らかとなった。

（小浜　成）

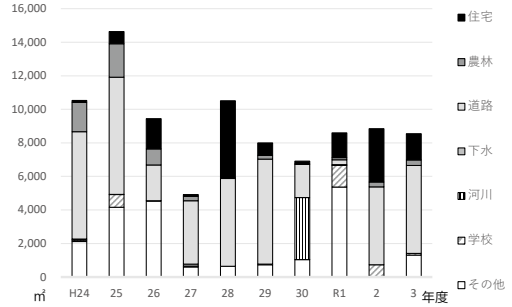
グラフ1　地域別調査面積



グラフ2　地域別調査件数



グラフ3　原因別調査面積



グラフ4　原因別調査件数

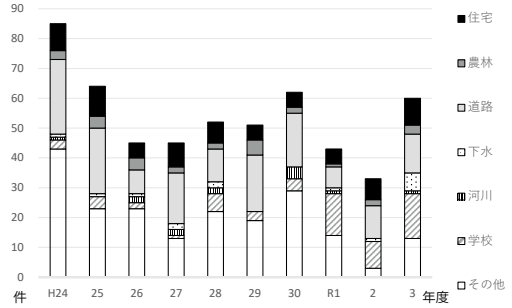


表3　令和3年度調査箇所一覧

網掛けのある行は本書6頁以降に概要報告を記載

調査番号	遺跡名	所在地	種別	調査開始日	調査終了日	調査面積（㎡）	担当者	事業課	事業名
21001	太田遺跡	藤井寺市津堂	発掘	令和2年度より継続	令和3年7月21日	1340.0	原田	都市整備部富田林土木事務所	一般府道大阪羽曳野線（藤井寺工区）道路改良事業
21002	府中遺跡	和泉市府中町	発掘	令和3年1月5日	令和3年7月30日	951.0	木村	都市整備部鳳土木事務所	都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業
21003	遺跡外	堺市北区 新金岡町	立会	令和3年4月2日	令和3年7月2日	-	西川	住宅まちづくり部	府営新金岡四丁五番第三期住宅撤去工事
21004	南花田遺跡	堺市北区 新金岡町	立会	令和3年4月13日	令和3年4月13日	-	三木 大澤	住宅まちづくり部	府営堺新金岡三丁八番住宅建替工事
21005	誉田白鳥遺跡	羽曳野市白鳥	立会	令和3年4月30日	令和4年3月31日	-	新尺 大澤 地村 原田 木村	都市整備部富田林土木事務所	国道170号線電線共同溝設置工事
21006	目俵遺跡 吹田操車場遺跡	吹田市目俵町	立会	令和3年5月18日	令和3年5月24日	27.0	山上	西日本旅客鉄道（株） 大阪工事事務所	吹田総合車両所近代化改良他工事
21007	山之内遺跡	岸和田市 多治米町	立会	令和3年5月10日	令和3年5月10日	-	三木 大澤	住宅まちづくり部	既存中層エレベーター設置事業（府営岸和田田治米住宅）
21008	久宝寺遺跡	八尾市西久宝寺	発掘	令和3年5月1日	令和3年11月30日	1240.0	西川 岡田	都市整備部八尾土木事務所	久宝寺緑地整備事業
21009	陵東遺跡	羽曳野市島泉・ 藤井寺市恵美坂	発掘	令和3年5月28日	令和4年1月31日	1117.0	新尺	都市整備部富田林土木事務所	一般府道大阪羽曳野線（藤井寺工区）道路改良事業
21010	遺跡外	豊中市新千里東	試掘	令和3年5月31日	令和3年8月25日	6.0	岡田	住宅まちづくり部	大阪府営豊中新千里東第3期高層住宅（建て替え）新築工事
21011	大町遺跡	岸和田市大町	発掘	令和3年6月1日	令和3年6月30日	210.0	三木 地村 大澤	住宅まちづくり部	府営岸和田大町住宅道路整備工事
21012	欠番	―	―	―	―	―	―	―	―
21013	陶邑窯跡群（栂地区）	堺市南区桃山台	立会	令和3年7月2日	令和3年7月2日	-	大澤	教育庁施設財務課	府立高校経年埋設内管改修工事（堺西高校）
21014	蔵重遺跡	松原市三宅東	立会	令和3年7月5日	令和3年8月16日	-	原田 地村	教育庁施設財務課	府立高校経年埋設内管改修工事（松原高校）
21015	七ノ坪遺跡	泉大津市 北豊中町	立会	令和3年7月6日	令和3年8月28日	-	木村	教育庁施設財務課	府立高校経年埋設内管改修工事（泉大津高校）
21016	立部遺跡	松原市西大塚町	立会	令和3年7月13日	令和3年7月30日	-	地村 木村	教育庁施設財務課	府立高校経年埋設内管改修工事（大塚高校）
21017	津堂遺跡	藤井寺市津堂	発掘	令和3年8月2日	令和4年度継続	416.0	原田	都市整備部富田林土木事務所	一般府道大阪羽曳野線（藤井寺工区）道路改良事業
21018	陶邑窯跡群（栂地区）	大阪府堺市南区 原山台	立会	令和3年7月21日	令和3年7月21日	-	岡田	教育庁施設財務課	府立泉北高等支援学校体育館空調設置工事
21019	遺跡外（銭塚古墳隣接地）	堺市堺区 東上野芝町	立会	令和3年7月26日	令和3年7月26日	-	原田	教育庁施設財務課	府立堺支援学校ガス管移設工事
21020	新金岡3丁遺跡	堺市北区新金岡	立会	令和3年8月5日	令和3年9月21日	-	岡田 木村 大澤	住宅まちづくり部	府営金岡東第3住宅第1期エレベーター棟増築工事
21021	島江遺跡	豊中市庄内栄町	確認	令和3年8月25日	令和3年8月25日	4.0	岡田	都市整備部池田土木事務所	都市計画道路三国塚口線街路築造事業
21022	宮園遺跡	堺市中区宮園町	立会	令和3年7月21日	令和3年7月21日	-	大澤	住宅まちづくり部	府営堺宮園第3期住宅（建て替え）中層耐火住宅撤去工事
21023	名越遺跡他	貝塚市清児地内	試掘・確認	令和3年8月16日	令和3年9月22日	240.0	地村	都市整備部岸和田土木事務所	都市計画道路泉州山手線（名越工区）道路改良事業
21024	遺跡外（大久保C遺跡隣接地）	熊取町大久保東	試掘	令和3年9月27日	令和3年10月14日	66.0	地村	都市整備部岸和田土木事務所	主要地方道大阪和泉泉南線道路改良事業
21025	美園遺跡	八尾市美園町	立会	令和3年8月17日	令和3年8月17日	-	岡田	大阪広域水道企業団 東部水道事業所	地下埋設物調査工事（東部水道事業所管内）
21026	府中遺跡	和泉市黒鳥町	発掘	令和3年9月1日	令和3年12月14日	300.0	木村	都市整備部鳳土木事務所	都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業
21027	遺跡外（宮野遺跡隣接地）	門真市上島町	試掘	令和3年9月15日	令和3年9月24日	32.0	木村	都市整備部枚方土木事務所	都市計画道路寝屋川大東線道路拡幅事業
21028	大竹西遺跡 東高野街道	八尾市大竹西	立会	令和3年9月3日	令和3年9月3日	-	岡田	都市整備部 東部流域下水道事務所	枚岡河内南幹線（二）（第4工区）下水管渠築造工事
21029	水越遺跡	八尾市服部	立会	令和3年9月6日	令和3年9月9日	-	木村	大阪広域水道企業団 東部水道事業所	管路弁室築造工事（4拡南部幹線・八尾市）
21030	宮園遺跡	堺市中区宮園町	発掘	令和3年10月1日	令和4年3月8日	1347.0	大澤	住宅まちづくり部 住宅経営室　住宅建築課	府営堺宮園第3期住宅（建て替え）新築工事
21031	太井遺跡	堺市美原区 北余部	立会	令和3年9月13日 令和3年11月15日 令和4年1月19日	令和3年9月13日 令和3年11月16日 令和4年1月20日	-	大澤 西川	教育庁施設財務課	府立農芸高等学校水禽舎新築その他工事
21032	遺跡外（西福井遺跡隣接地）	茨木市西福井	立会	令和3年9月21日	令和3年9月21日	-	岡田	教育庁施設財務課	府立茨木支援学校管理棟他1棟便所改修工事
21033	陵東遺跡	羽曳野市島泉・ 藤井寺市恵美坂	確認	令和3年3月21日	令和3年9月21日	6.0	新尺	都市整備部富田林土木事務所	一般府道大阪羽曳野線（藤井寺工区）道路改良事業
21034	宮園遺跡	堺市中区宮園町	立会	令和3年10月8日	令和3年10月15日	-	岡田 大澤	住宅まちづくり部	府営八田荘住宅敷地内給水管修繕工事
21035	東郷遺跡	八尾市荘内町	立会	令和3年10月18日	令和3年10月18日	-	地村 岡田	都市整備部八尾土木事務所	大阪府中河内府民センタービル改修 工事
21036	瓜生堂遺跡	東大阪市 若江西新町	立会	令和3年10月19日	令和3年10月19日	-	岡田	大阪広域水道企業団 東部水道事業所	地下埋設物調査工事（東部水道事業所管内）
21037	巨摩廃寺遺跡	東大阪市 若江西新町	立会	令和3年10月19日	令和3年10月19日	-	岡田	大阪広域水道企業団 東部水道事業所	地下埋設物調査工事（東部水道事業所管内）
21038	八尾寺内町	八尾市本町	立会	令和3年11月25日	令和3年12月13日	-	岡田	都市整備部八尾土木事務所	主要地方道大阪港八尾線電線共同溝詳細設計委託試験掘

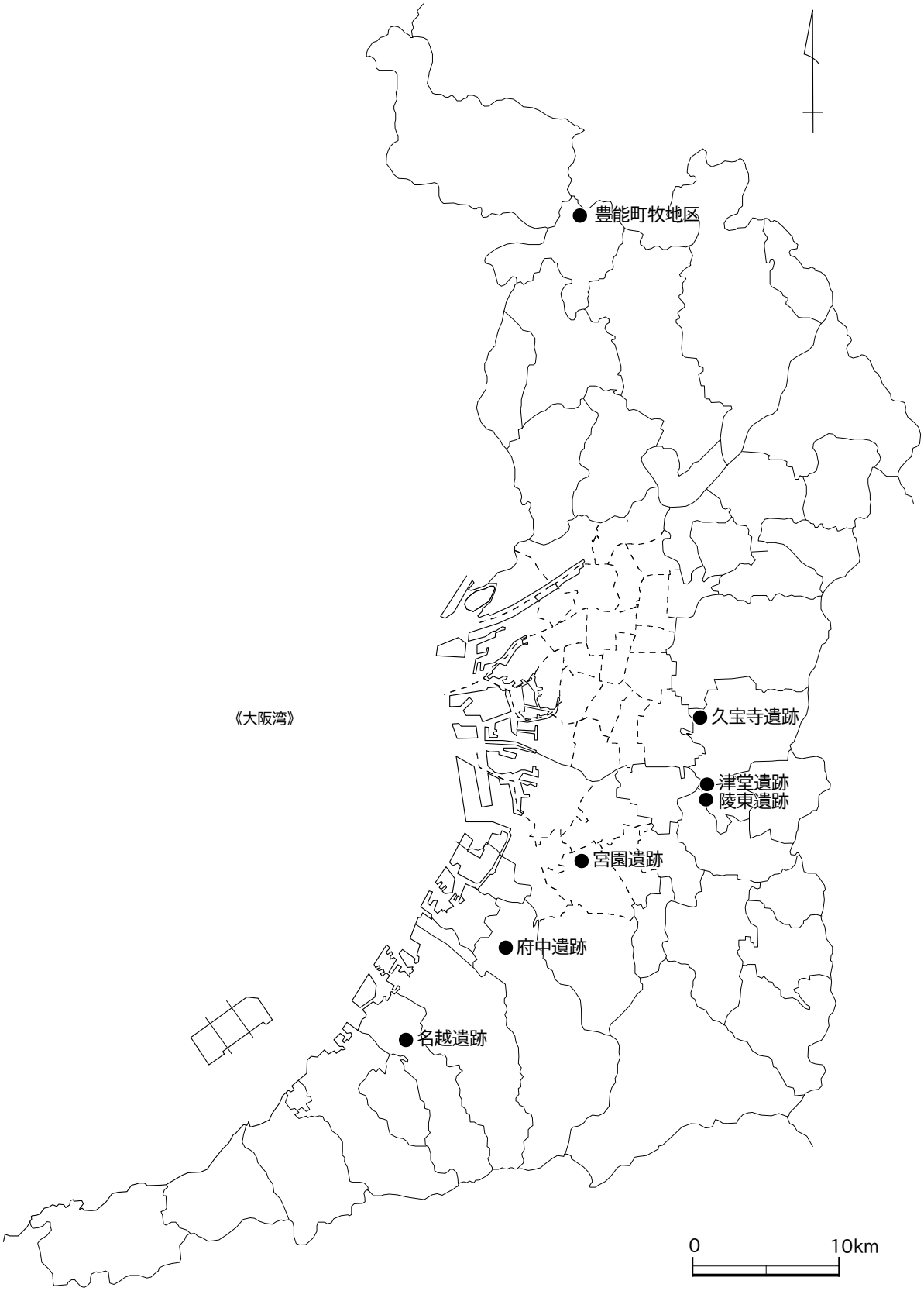
調査番号	遺跡名	所在地	種別	調査開始日	調査終了日	調査面積	担当者	事業課	事業名
21039	成法寺遺跡	八尾市光南町	立会	令和３年 11 月 25 日	令和３年 12 月 13 日	-	岡田	都市整備部八尾土木事務所	主要地方道大阪港八尾線電線共同溝詳細設計委託試験掘
21040	西野々古墳群	富田林市伏見堂	試掘・確認	令和３年 11 月１日	令和３年 12 月 27 日	128.0	西川	南河内農と緑総合事務所	府営農村総合整備事業「伏見堂地区」
21041	豊能町牧地区	豊能町牧	試掘	令和３年 11 月１日	令和３年 11 月 30 日	200.0	地村	北部農と緑の総合事務所	府営農村総合整備事業「牧地区」
21042	久宝寺遺跡	八尾市西久宝寺	立会	令和３年 11 月 24 日	令和４年１月 14 日	-	岡田	都市整備部八尾土木事務所	久宝寺緑地東地区１工区電気設備工事
21043	中之島蔵屋敷跡	大阪市中央区中之島	試掘	令和３年 11 月 18 日	令和３年 11 月 18 日	9.0	岡田 大阪市	府立中之島図書館	大阪府立中之島図書館食堂棟耐震改修その他工事
21044	加治・神前・畠中遺跡	貝塚市畠中	立会	令和４年１月 10 日	令和４年１月 10 日		岡田	教育庁施設財務課	府立貝塚高校体育館空調設置工事
21045	太井遺跡	堺市美原区北余部	立会	令和３年 12 月８日	令和３年 12 月８日	-	新尺	教育庁施設財務課	府立農芸高等学校水禽舎新築その他工事
21046	陶邑窯跡群陶器山地区	堺市中区上之	立会	令和３年 12 月 16 日	令和３年 12 月 16 日	-	地村	泉州農と緑の総合事務所	陶邑窯跡群陶器山地区中津池改修（３）工事
21047	久宝寺遺跡	八尾市西久宝寺	立会	令和３年 12 月 22 日	令和３年 12 月 23 日	-	木村	八尾土木事務所　都市みどり課	久宝寺緑地東地区２工区雨水貯留施設整備工事
21048	茨田安田遺跡	大阪市鶴見区安田	立会	令和３年 12 月 23 日	令和３年 12 月 23 日	20.0	西川	教育庁施設財務課	府立茨田高校体育館空調設置工事
21049	金岡遺跡	堺市北区金岡町	立会	令和４年１月６日	令和４年１月７日	30.0	西川	教育庁施設財務課	府立金岡高校体育館空調設置工事
21050	津堂遺跡	藤井寺市御舟町	立会	令和４年１月 29 日	令和４年１月 29 日	25.0	西川	教育庁施設財務課	府立藤井寺高校体育館空調設置工事
21051	桜井御所跡	島本町桜井谷	立会	令和４年１月 22 日	令和４年１月 22 日	25.0	西川	教育庁施設財務課	府立島本高校体育館空調設置工事
21052	太井遺跡	堺市美原区北余部	立会	令和４年１月 11 日	令和４年１月 11 日	-	新尺	教育庁施設財務課	府立農芸高等学校水禽舎新築その他工事
21053	遺跡外（荒坂山砦跡隣接地）	枚方市長尾家具町	立会	令和４年１月 18 日	令和４年１月 18 日	-	新尺	都市整備部　枚方土木事務所	一般府道長尾八幡線道路拡幅工事
21054	遺跡外（駒ヶ谷遺跡隣接地）	羽曳野市飛鳥地内	立会	令和４年２月３日	令和４年２月 10 日	-	新尺 木村	都市整備部　富田林土木事務所	一級河川飛鳥川改修工事（八丁橋上流 R3）
21055	田山遺跡	阪南市箱作地内	立会	令和４年２月 14 日	令和４年２月 14 日	-	岡田	大阪広域水道企業団南部水道事業所	送水管布設工事（阪南岬送水管・阪南市ほか）２工区
21056	目俵遺跡	吹田市目俵町	立会	令和４年３月８日	令和４年３月８日	10.0	山上	西日本旅客鉄道（株）大阪工事事務所	吹田総合車両所近代化改良他工事
21057	東郷遺跡	八尾市荘内町	立会	令和４年３月７日	令和４年３月７日	6.0	西川	住宅建築局一般建築課	中河内府民センタービル改修工事
21058	高井田遺跡	東大阪市高井田西	立会	令和４年３月９日	令和４年３月９日	-	岡田	都市整備部　八尾土木事務所	一般国道 308 号電線共同溝整備工事
21059	穴口廃寺	岸和田市加守町	立会	令和４年３月 11 日	令和４年３月 11 日	20.0	西川	岸和田土木事務所建設課	一般府道堺阪南線歩道整備工事
21060	東郷遺跡	八尾市荘内町	立会	令和４年３月 23 日	令和４年３月 28 日	13.0	西川	住宅建築局一般建築課	中河内府民センタービル改修工事
21061	陵東遺跡	羽曳野市島泉	発掘	令和４年３月 16 日	継続事業	758.0	新尺	都市整備部　富田林土木事務所 松原建設事務所	一般府道大阪羽曳野線（藤井寺工区）道路改良事業

【文化財保護課】

課長
- 保存管理グループ
- 文化財企画グループ
- 調査管理グループ　グループ長　主査　中西裕見子
  - 主査　横田　明　事務所・収蔵庫維持管理等
  - 副主査　石角三夫　積算および竣工検査等
  - 副主査　杉本清美　収蔵資料の整理等
  - 副主査　藤井陽輔　文化財公開活用事業等
  - 技師　河原秋桜　収蔵庫資料等の運搬・管理等
  - 専門員　竹原伸次　資料貸出・閲覧等
  - 専門員　藤田道子　報告書作成関連の遺物・資料整理
- 調査事業グループ　調査事業補佐　岡田　賢
  - 主任専門員　三木　弘　調整・指導・発掘調査等
  - 主査　西川寿勝　調整・発掘調査・遺物整理等
  - 副主査　木村啓章　調整・発掘調査・遺物整理等
  - 副主査　原田昌浩　調整・発掘調査・遺物整理等
  - 技師　大澤　嶺　調整・発掘調査・遺物整理等
  - 技師　新尺雅弘　調整・発掘調査・遺物整理等
  - 技師　地村邦夫　調整・発掘調査・遺物整理等

【文化財調査事務所】

令和3年度文化財保護課・文化財調査事務所組織図



主要調査位置図

【試掘確認調査の概要報告】

名越（なごせ）遺跡（２１０２３）

（１）貝塚市清児地内

（２）都市計画道路泉州山手線（名越工区）道路改良事業

（３）地村　邦夫

はじめに

調査地は貝塚市清児地内に所在する都市計画道路泉州山手線（名越工区）の道路用地である。

本道路用地は、近木川右岸に広がる丘陵の縁辺部にあたり、水間寺への参詣道である水間街道と、その東側 100m に並行して伸びる新水間街道に挟まれている。丘陵上は古くより開発が進められており、新水間街道より東側は耕作地となっている一方、調査地の位置する地区は､ほとんどが宅地として利用されている。

調査の概要

調査地は東西に長く、両端の南側が突出する凸字形をしている。最も広い部分で東西約 130m、南北約 65m である。調査区を１～３区に区分し、１区に４ヶ所(1-1 区～ 1-4 区)、２区に２ヶ所(2-1 ～ 2- ２区)、３区に１ヶ所（３区）の計７ヶ所のトレンチを設定した。トレンチは１区及び２区では長さ 12 m×幅３m、３区では長さ３m×幅 1.5 mである。

1区の調査成果

1-1 区では３面の遺構面を確認した。

第１面（T.P+41.8 m）では中世～近世と考える、南北方向の溝１条を検出した。遺構埋土から瓦器片や土師器片が出土している。

第２面（T.P+41.7 m）でも中世と考える南北方向の鋤溝を７条確認し、遺構埋土から土師器片が出土した。

第３面（T.P+41.5 m）では中世と考える不定形の落ち込みを検出し、埋土から瓦器片が出土した。

１-2 区では３面の遺構面を確認している。

第１面（T.P+41.75 m）では中世と考える東西方向の溝９条が検出され、遺構埋土から瓦器片が出土している。

第２面（T.P+41.45 m）では中世と考えらえる東西方向の溝６条を検出している。

遺構面精査時に瓦器椀片、瓦器小皿片、土師器片が出土している。

第３面（T.P+41.35 m）は地山面であり、溝 10 条とピット４基を検出した。顕著な遺物は出土しなかったが、１-2 区の調査成果や他トレンチの調査成果から中世の遺構と考える。

１-3 区及び１-4 区では、いずれも地山面（T.P+41.1 ～ 41.2 m）で中世と考える東西方向の溝を複数検出している。地山面精査時に瓦器片・土師器片が出土している。

2区の調査成果

２-1 区では（T.P+41.25 m）の地山面で中世と考える東西方向の溝２条とピット１基を検出しており、地山面精査時に瓦器片・土師器片が出土した。

２-2 区では遺構は検出されず、瓦器片が出土しているのみである。

3区の調査成果

遺構、遺物とも確認されなかった。

まとめ

今回の調査では、１-1・２区にて遺構面を３面、１-3・４区、２-1 区において１面を検出した。

これら遺構面のうち、最も年代的に遡るのは地山面で検出した中世の鋤溝等であり、この地の開発が中世には進められていたことが明らかとなった。

（地村邦夫）

図１ 調査位置図

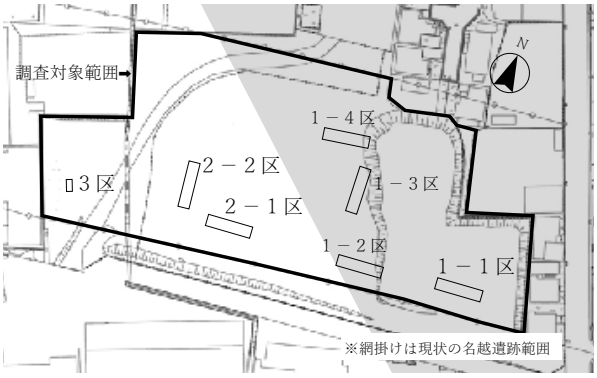


図２ 調査区詳細図

【試掘確認調査の概要報告】

豊能町牧地区（２１０４１）

（１）豊能町牧

（２）府営農村総合整備事業「牧地区」

（３）地村　邦夫

はじめに

豊能町牧地区は、北・東・南の三方を鴻応山とそれに連なる鴻応山山塊、西を妙見山に連なる妙見山山塊に囲まれた山あいの農村である。北摂山地に位置する豊能町域は、山間部を縫うように流れる河川によって形成された盆地性の河谷平野に農村が営まれてきた。牧地区もそのひとつであり、鴻応山・同山塊に源を発する牧川の二つの源流が形成した河谷平野に農地が造られている。地区の範囲は東西 1km、南北 500m に及ぶ。

調査の概要

事業は牧地区の大半を対象とするものである。当地における埋蔵文化財の有無を確認するため、切土の予定されている農地を検討の上、51 ヶ所の調査区を設定した。調査区は平面 2m 四方とし、掘削により土層の変化、遺構・遺物の有無を確認した。

調査の成果

調査区 2 において、調査区北端で井戸 1 基を検出した。北半分は調査区外になるため、正確な規模も不明である。その輪郭を検出した G.L.-0.6m では径 2m 以上、調査の最終掘削深度である G.L.-0.9m では径 1.7m 程度であった。

遺物は井戸より瓦器椀、瓦質鍋、瓦質三足、土師器小皿のような中世の土器片が出土している。他の調査区でも瓦器片・土師器片が出土したものの、遺構は確認されなかった。

このような状況から、牧地区はこれまで明らかにされているように、鎌倉時代には開発が行われていたと考えられる。（地村邦夫）

写真1　調査区 02 南から

写真2　調査区 02 南から

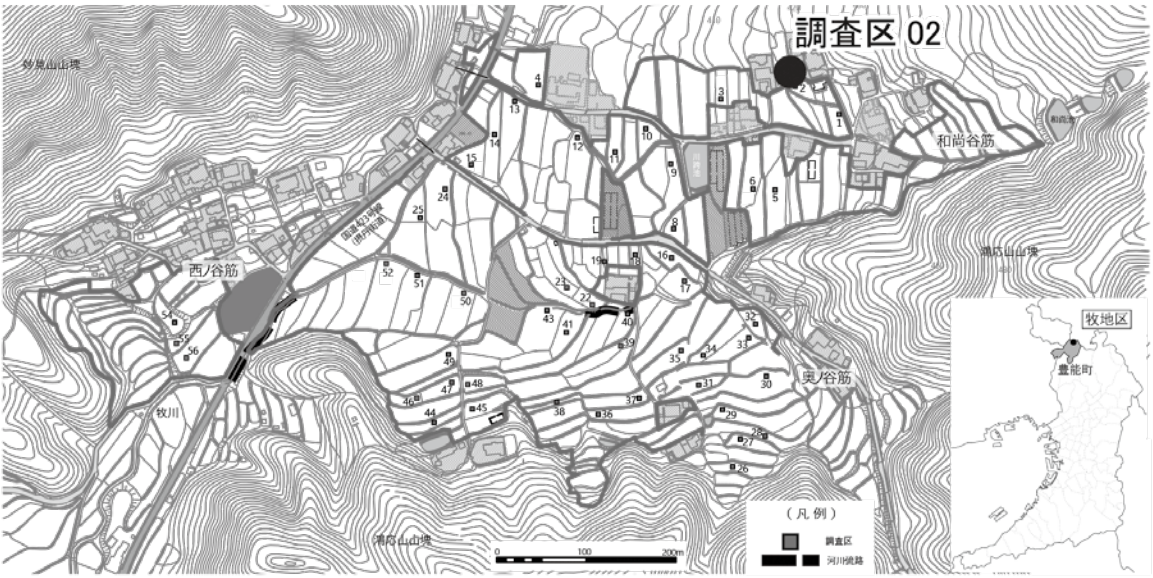


図1　調査区 02 南から

【主要発掘調査の概要報告】

久宝寺遺跡（２１００８）

（１）八尾市西久宝寺町

（２）令和３年度久宝寺緑地整備事業

（３）西川寿勝・岡田　賢

はじめに

今回の発掘調査は府営久宝寺緑地東地区の第２期整備事業に伴うもので、雨水貯留施設の設置に先立って実施した。面積は 1,240㎡である（図 1）。

調査成果

1）基本層序

基本層序は大別して６層ある。第０層は緑地公園の基盤となる造成土。第１層は旧水田耕作土（現代）。第２層は第一遺構面（近世島畠）を覆う堆積土（近代以降の耕作土）。第３層は第２遺構面を覆う暗灰黄色土、灰白色粘土層であり、調査区のほぼ全域で確認された。島畠の構成土や島畠間の水田耕作土などからなる。第４層は第２遺構面の基盤層であり、層厚 40 ～ 80㎝の砂層である。第４層の下半部で認められた灰白細砂層からは布留式土器や準構造船の舷側板とみられる板材が出土した（写真１）。第５層は第３遺構面のベースを形成する黄灰色粘土層などで構成される。葦などの植物片を含む腐植土層もみられ、湿潤な堆積環境が想定される。本層からは弥生時代後期後半から庄内式期の土器が大量に出土した。

2）各遺構面の概要

第１遺構面：南北方向に長い島畠、その間の水田を検出した。水田耕作土から近世後期の陶磁器が出土しており、近世後半以降に機能した島畠である。

第２遺構面：第４層上面で検出された古墳時代中期～後期の遺構面である。溝、土坑、井戸等が検出されている。中でも調査区の西半で検出された井戸 176 は特筆される。検出面での平面形は長辺約 0.9 m、幅 0.7 mを測り、埋土上半は５世紀後半の須恵器片が含まれる淡褐色粘土で、層相から人為的な埋戻しが想定される。これを除去すると木製井戸枠が検出された。井戸枠は準構造船の船首もしくは船尾を切断して再利用したものである（写真２）。井戸枠内からは須恵器・土師器・製塩土器・韓式系土器が出土している。

第３遺構面：調査区西南部にある河川 181 の氾濫により第４層（氾濫堆積物）が堆積したとみられるが、第４層除去後は河川 181 から東側の調査区全体が粘質土で覆われており、この上面で古墳時代前期の水田畦畔の検出を想定したが、溝を数条検出したのみで、耕作地として土地利用されていないことが分かった。

まとめ

平成 30 年度に行った発掘調査では、古墳時代中期の遺構と、平安時代の遺構が同一面で検出されている。今回調査区でも古墳時代中期の遺構を複数検出しており、遺構面の基盤層を考慮すると、北西－南東方向に形成された自然堤防上に集落の広がりが想定できる。なお出土遺物の詳細を今後検討しなければならないが、今回は古代に属する遺構は希薄であった。

また第５層からは弥生時代後期後半～庄内式期の土器が大量に出土している。周辺（調査区の南か？）に当該期の集落が存在することが想定される。

（岡田　賢）

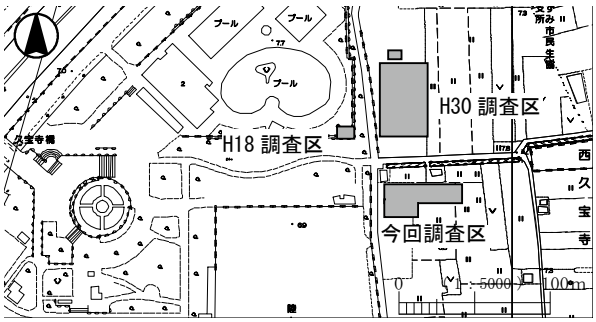


図1　調査区位置図

写真1　第4層中舷側板出土状況（南から）

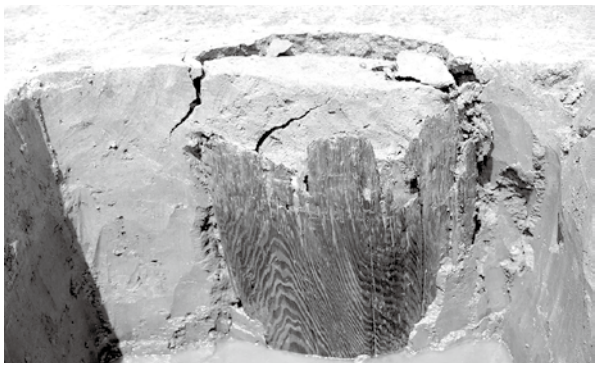


写真2　井戸 176 検出状況（南から）

【主要発掘調査の概要報告】

陵東（みささぎひがし）遺跡（２１００９）

（１）羽曳野市島泉・藤井寺市恵美坂

（２）一般府道大阪羽曳野線 (藤井寺工区) 道路改良事業

（３）新尺　雅弘

はじめに

陵東遺跡は羽曳野市島泉八丁目と藤井寺市恵美坂二丁目にまたがり、羽曳野丘陵の末端に位置する（図１）。一般府道大阪羽曳野線（藤井寺工区）の建設に伴い令和２年度より府教育委員会による発掘調査を実施している。今回の発掘調査は前年度調査の隣接地 1,117㎡を対象として実施した。なお、水路の関係から調査区を分割して調査を実施しており、北側の調査区をＮ区、南側の調査区をＳ区と設定した。

図1　調査位置図

調査の概要

今回の調査区の東側には開析谷が走り、その堆積をＮ区北東部で検出した。南へ向かって標高は高くなり、調査区中ほどでは旧耕作土を除去するとすぐに中位段丘構成層が露頭するようになる。しかし、Ｓ区北端のあたりから調査区南側へ向かって下降し、東側の開析谷に注ぎ込む東西方向の支谷の北崖が検出された。

Ｎ区では、中位段丘構成層の上面を中心に中世～古墳時代前期までの遺構を検出した（写真１）。主なものとしては、古代の掘立柱建物１棟、溝１条、古墳時代後期の掘立柱建物１棟、溝１条、前期の井戸１基、溝２条を検出した。なお、掘立柱建物と溝は前年度調査区で検出していたものの続きである。また、開析谷部では古墳時代後期の水田と畦畔を検出した。

Ｓ区では古墳時代後期の包含層上面で畦畔の痕跡を検出し、当該期以降は水田として利用されていたことが判明した（写真２）。支谷の自然堆積層からは古墳時代前期、弥生時代中期、縄文時代後期の土器が出土している。また、堆積構造から支谷には乾湿のサイクルがあったこともわかり、乾燥期の堆積からは北側の丘陵部から投棄された弥生土器がまとまって出土した（写真３）。

写真1　Ｎ区全景

写真2　Ｓ区全景

写真3　Ｓ区支谷部弥生土器出土状況

まとめ

本調査では、前年度までに明らかにしえた遺跡周辺の土地利用の様相をより明確にできた。特に、支谷部の水田化が６世紀に遡ることが明らかとなり、開析谷部で検出した水田と時期を等しくすることは重要である。前年度に実施した自然科学分析の結果、６世紀を境とした局地的な森林域の縮小が確認されており、古市古墳群の営まれた時期に遺跡周辺で大規模な水田開発が行われたと推察される。　（新尺雅弘）

【主要発掘調査の概要報告】

津堂（つどう）遺跡（２１０１７）

（１）藤井寺市津堂

（２）一般府道大阪羽曳野線 (藤井寺工区) 道路改良事業

（３）原田　昌浩

調査の概要

津堂遺跡は、大阪府藤井寺市の北西一帯に広がる縄文時代から中世にかけての集落遺跡で、昭和 48 年に府立藤井寺高等学校の建設に際して遺構・遺物が発見され、遺跡として周知されている（図１）。過去に数回開発に伴う発掘調査が行われており、中でも平成 27 年の物流倉庫建設に伴って行われた発掘調査では、古墳時代前期末から中期初頭の大型建物２棟と高坏を大量に投棄した溝が見つかっている（笹栗編 2016）。これらの遺構と、南東約１㎞に所在する古市古墳群の嚆矢となる大型前方後円墳である津堂城山古墳（墳丘長 210 m）と時期が近いことなどから、注目を集めてきた。

令和３年度は、一般府道大阪羽曳野線の建設に伴って約 600㎡の調査区を設定し、令和３年８月から令和４年６月まで調査を実施した。調査の結果、中世の遺構面で耕作に伴うと考えられる溝、掘立柱建物複数棟を、古墳時代の遺構面で古墳時代前期末から中期初頭の建物群を検出した。

令和４年３月 17 日に古墳時代前期末から中期初頭の建物群発見について報道提供を行い、同月 26 日に現地公開を予定していたが、現地公開は荒天のため直前に中止した。なお現地公開資料は、当課のホームページにて公開している（図３）。また、現地公開の代替として、令和４年６月 25 日に藤井寺市と共催で「津堂遺跡発掘調査報告会」を開催し（於：藤井寺市生涯学習センター）、本調査内容について報告を行い、39 名の参加があった。報告会の様子は藤井寺市の公式 YouTube チャンネル「フジイデラテレビ」で公開されている。

古墳時代前期末から中期初頭の遺構

調査区南半で計７棟の掘立柱建物、敷地の北端を区画する柵（塀）、土坑、井戸を検出した。調査区の北半は検出面が地形的に低くなっており、遺構はなく、地震等による地形改変の痕跡を検出した（図２・写真２）。

建物Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄは柱間が３間×２間の総柱、建物Ｅは３間×２間、建物Ｆは２間×２間、建物Ｇは３間×２間に復元できる。建物の規模は長辺が約 6.8 m、短辺が約 5.2 mで推定床面積は１棟あたり約 35㎡である。掘方の規模は建物Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｇが一辺約 0.8 mの方形、建物Ｅが一辺約 1.0 mの方形、建物Ｆが一辺約 0.5 mの方形で、深さはいずれも検出面から約 0.8 mである。柱間は芯々で約 2.4 mである。その値から外れる場合、別建物と認識している。柱は直径 0.15 mから 0.25 mの丸太状と推定できる。

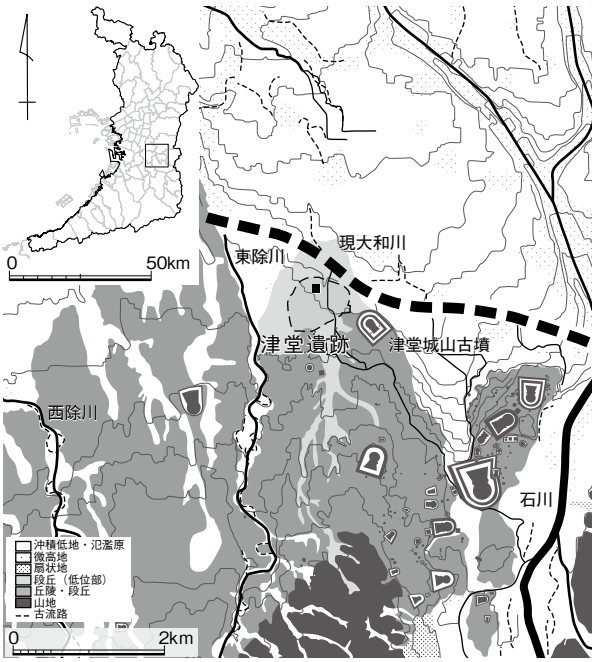


図1　津堂遺跡の位置

遺構の切り合い等から、建て替えが想定される。先行して建物ＥとＦとが建てられているが、これらが同時に建てられ機能していたかは不明である。次に建物Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄが建てられる。建物の柱筋が揃い、規格的な建物配置であることから、これらは同時併存していたと考えている。これらの建物群が機能を終えると、建物Ｇが建てられる。

以上の建物群のうちどの段階のものと組み合うかは不明であるが、建物北端に柱間 3.0 mで１列の柵（塀）を検出した。この柵（塀）より北側の調査区内に古墳時代の遺構は検出できていない。

また全ての柱は建物の機能終了後に抜き取られている。その埋め戻しに際して、土器等を埋めており（写真３）、これらの土器は須恵器を含まず、笹栗拓による津堂遺跡の土器編年（笹栗 2017）の１・２段階のみである。このことから全ての建物の建設・建替・廃絶が短期間であったと考えられる。建物と切り合い関係のない井戸から出土した土器（写真４）も同時期で

写真1　津堂遺跡と周辺の景観（北西から）

写真2　津堂遺跡の遺跡俯瞰写真（上が北）

ある。建物群の機能終了後は、中世（鎌倉時代）の遺構面に至るまで遺構・遺物が希薄であった。

周辺調査との関係

今回の調査区北東 80m では、今回検出した建物群とほぼ同時期に機能していた北流する流路が（岩崎編 1992）、西約 150m では今回の建物群と軸を揃える大型掘立柱建物 2 棟とそれらを囲むような流路と高坏ばかりが廃棄された土器だまりなどが検出されている（笹栗編 2016）。東の流路は機能終了後（今回の建物群の機能終了と同時か？）に埋没していたことが判明している。また西の大型建物は機能終了後に廃絶するが、古墳時代中期以降も遺構遺物がみられ、集落は継続している。

今回の建物群の意義

今回調査した建物群は一部を除いて、束柱を持つ総柱構造の掘立柱建物である。複数棟が連なる総柱構造の建物はクラ（倉庫）である可能性が高い。津堂遺跡の倉庫群は、遺構の時期的に大阪市法円坂遺跡や和歌山市鳴滝遺跡、豊中市蛍池東遺跡で見つかっている古墳時代中期中葉の倉庫群の前史となる可能性がある。なお、法円坂遺跡・鳴滝遺跡・蛍池東遺跡ともに存続時期が短いことも、津堂遺跡と類似する。

また、古市古墳群の周辺では津堂遺跡が発見されるまで大型建物を含め、掘立柱建物自体が少ないことが指摘されてきた（伊藤 2011）。これまでの津堂遺跡の調査成果をまとめると、津堂城山古墳の築造と連動して大型建物や倉庫群等の集落が整備されていたことがほぼ確実である。大型古墳（津堂城山古墳）の築造過程を考察する上で、また古市古墳群造営の歴史的背景等を探究する上でも重要な意義を持つ遺跡と考えられる。

（原田昌浩）

参考文献

伊藤聖浩 2011「古市古墳群の形成と居住域の展開」『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』（平成 20 ～ 22 年度科学研究費補助金　基盤研究（B）研究成果報告書）大阪大学大学院文学研究科

岩崎二郎編 1992『津堂遺跡』大阪府文化財調査報告書第 43 輯、大阪府教育委員会

大阪府教育庁文化財保護課 2022『津堂遺跡現地公開資料』

笹栗　拓編 2016『津堂遺跡―TD2014-3 区の発掘調査報告書―』藤井寺市文化財報告第 39 集、公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 273 集、藤井寺市教育委員会

笹栗　拓 2017「津堂遺跡における古墳時代中期の土器編年―古市古墳群周辺集落の土器様相とその特質―」『大阪文化財研究』第 50 号　公益財団法人大阪府文化財センター

笹栗　拓 2018「津堂遺跡の集落出現期の土器と周辺動向」『古墳出現期土器研究』第 5 号、古墳出現期土器研究会

笹栗　拓 2020「古市古墳群周辺の土地利用と地域開発」『大阪文化財研究』第 53 号、公益財団法人大阪府文化財センター

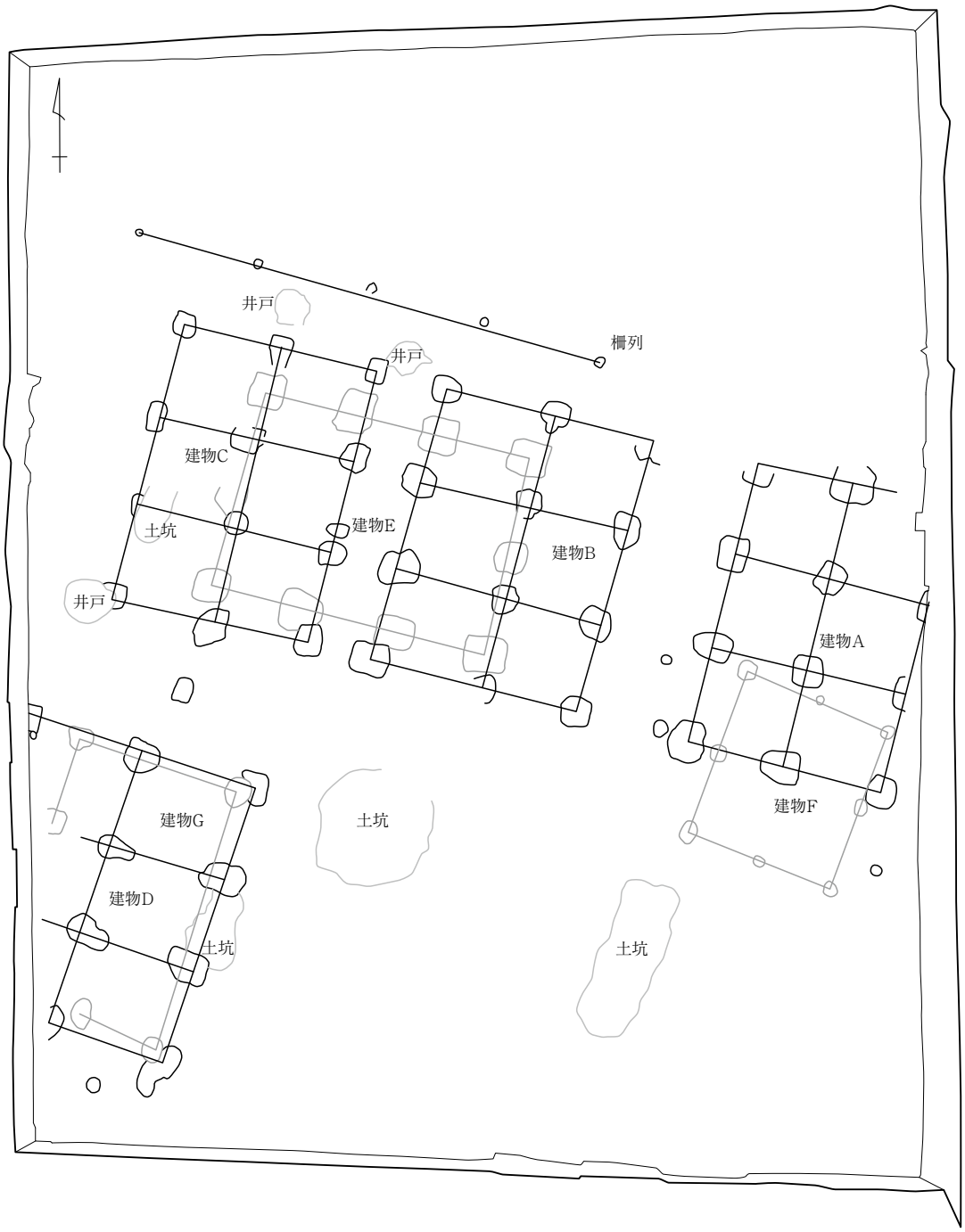
挿図出典

図 1　国土交通省国土数値情報及び笹栗編 2016 より作成

図 2 ～ 3　大阪府教育庁文化財保護課作成

写真3　掘立柱建物の柱穴断面

写真4　井戸出土の土器群



0　5 m

図2　津堂遺跡の遺構平面図

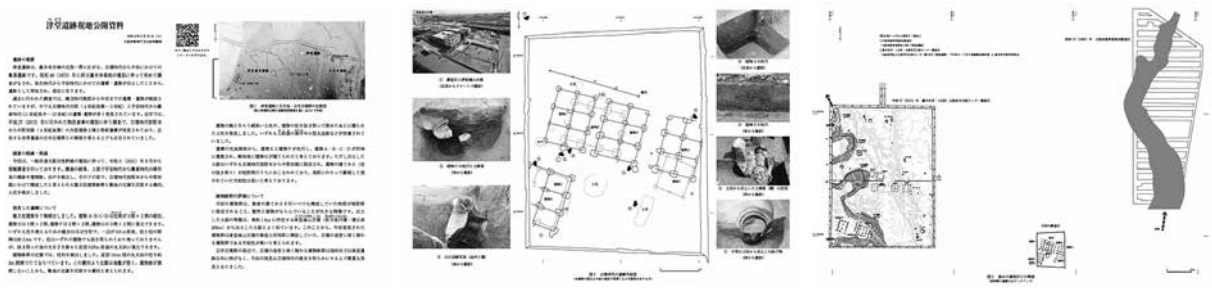


図3　津堂遺跡現地公開資料

津堂遺跡現地公開資料 URL　QR コード

【主要発掘調査の概要報告】

府中遺跡（２１００２・２１０２６）

（１）和泉市府中町・黒鳥町

（２）都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業

（３）木村　啓章

はじめに

府中遺跡は槙尾川右岸の低位段丘上に立地し、和泉市北西部、府中町、黒鳥町、桑原町にまたがる東西約１㎞、南北約 1.2㎞の広範囲にわたる。遺跡内には和泉国府跡や和泉寺跡推定地を含まれている。平成 17 年度より都市計画道路大阪岸和田南海線の街路築造事業に伴う調査を実施しており、令和３年度は前年度調査地から継続する約 700㎡（21002-1・２区）と平成 29 年度調査第１区の北側の道路交差点部分(21026-1・２区）の約 400㎡の範囲において調査を実施した（大阪府教育委員会 2019『府中遺跡』)。

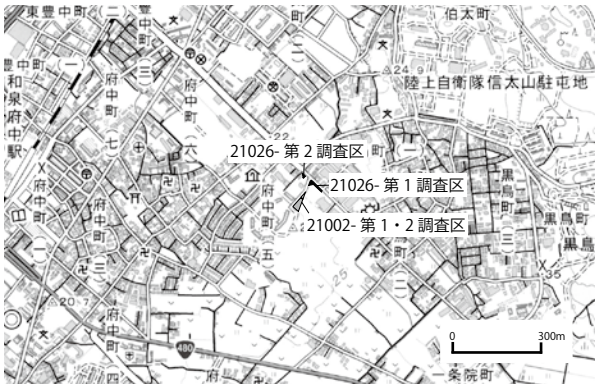


図1　府中遺跡調査区位置図

21002　第１・２調査区の調査の概要

第１・２調査区は現代の水路を挟んで隣合っているため、まとめて報告する。調査地の現地表は T.P.+23.5 m程度で、基本層序は、現代盛土の直下に、近現代耕作土、中世の耕作土、中世から古代の包含層となり、基盤層は砂礫層～砂礫混じりシルト層からなる。昨年度第３調査区と同様、南西に向かってシルト層へと変化し、北東側には砂礫層が広がり、わずかに高まる地形となっている。

弥生時代末～古墳時代初頭の遺構として、第２調査区北端に土坑や第３調査区より続く落ち込み 001 を検出した。昨年度同様この 001 を境に南に行くにつれ当該期の遺物の分布は少なくなる傾向がみられた。

第１調査区南東側では、平安時代後期と考えられる掘立柱建物や土坑を検出した（写真１)。建物の軸は北東－南西方向を向き、規模は三間×四間、もしくはそれ以上と考えられ、柱間は約 1.9m であった。

写真1　21002 第1調査区　掘立柱建物

21026　第１・２調査区の調査概要

【第１調査区】

調査地の現地表は T.P.+23.6m 程度で、基本層序は、現代盛土の直下に、近現代耕作土、中世耕作土となり、基盤層は砂礫層～砂礫混じりシルト層からなる。

中世の鋤溝や大型の土坑、弥生時代末～古墳時代初頭の土坑を同じ基盤層上面で検出した。調査区東側に弥生時代末～古墳時代初頭の遺構が分布する傾向にあり、当該期の集落がより北西に広がることが想定される。

【第２調査区】

調査地の現地表は T.P.+23.2m 程度で、基本層序は、現代盛土の直下に、近現代耕作土、中世耕作土、中世～古代の包含層となり、基盤層は砂礫混じりシルト層からなる。

狭い調査区ではあったものの（写真２)、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居２基や土坑、古墳時代以降と考えられる東西溝を検出した。

（木村啓章）

写真2　21026 第2調査区全景

【主要発掘調査の概要報告】

宮園（みやぞの）遺跡（２１０３０）

（１）堺市中区宮園町

（２）府営堺宮園第３期高層住宅（建て替え）新築工事

（３）大澤　嶺

はじめに

宮園遺跡は堺市中区宮園町に所在する古墳時代から中世にかけての遺跡である。泉北丘陵から北西に伸び、緩い傾斜地となっている泉北台地の中ほどに立地している。府営堺宮園第２高層住宅の建て替え工事に伴い、平成 28 年度より府教育委員会による調査を実施している。今回の発掘調査は、住宅棟、設備棟及び貯水槽の建築予定地約 1300㎡を対象として行った。調査期間は令和３年 10 月から令和４年２月である。

調査の概要

基本層序は上から順に、宅地造成土、現代耕作土、中世耕作土、地山となる。中世耕作土は３～５区では１層のみで構成されるが、１区では２層、２区では３層に分けられ、とりわけ２区の２層目には瓦器や土師器が大量に含まれていた。時期は出土遺物から、12 世紀から 15 世紀と考えられる。６区では確認できなかった。また２区でのみ中世耕作土の下に堆積層が確認された。遺物は須恵器や土師器、石器が出土しており、須恵器は８世紀以降の特徴を示している。

１区はほぼ平坦な地形だが、東端部に段差があり２区と接続している。土層断面の観察から中世耕作土に段差が認められ、耕作に起因する段差の可能性がある。遺構は鋤溝、溝、ピット、土坑を検出した。特に調査区中央の溝は埋土が他の遺構と異なる白色砂質土であり、縄文時代晩期の石鏃が出土した。遺構の配列から建物等を明確に復元することはできなかった。遺物は溝から出土した石鏃のほか、土馬や須恵器の壺、黒色土器、瓦器が出土している。

２区は今回の調査区の中で最も地山の標高が低く、前述のとおり隣接する１区より１段低くなっている。遺物包含層である中世耕作土を３層確認しており、古代に属する堆積層も確認している。遺構は多くの溝、ピット、溝、土坑を検出した。建物等を明確に復元することはできなかった。遺物は前述のとおり中世耕作土から 10 世紀頃の特徴を持つ黒色土器や羽釜の破片が大量に出土しており、緑釉陶器や三彩の破片も含まれている。古代の堆積層からは弥生時代の石鏃のほか、須恵器の破片が出土している。

３区は団地内の旧道路部分にあたるため、調査区のほとんどが攪乱を受けていた。わずかに残存していた壁面から、攪乱される前は中世耕作土が存在していたことを確認した。

４区は大部分で攪乱を受けていた。攪乱を逃れた部分で、溝やピットを検出した。遺物は瓦器や土師器が出土しており、中世に属すると判断する。

５区は大部分で攪乱を受けていた。東側の攪乱を逃れた部分で、溝や井戸を検出した。遺物は中世耕作土層から瓦器と土師器が出土したのみで遺構の時期は不明である。

６区は大部分で攪乱を受けていた。北側の攪乱を逃れた部分で、溝、ピット、土坑を検出した。遺物は瓦器や土師器が出土しており、中世に属すると判断する。

まとめ

今回の調査では既往の調査で確認された建物や粘土採掘土坑、自然流路は確認できなかった。一方で既往の調査ではほとんど出土していない、10 世紀頃の特徴を持つ黒色土器などが大量に出土しており、本遺跡の調査成果に新たな知見を加えることができた。

（大澤　嶺）

写真1　1区全景

写真2　2区全景

日本基督教団大阪教会本館（にほんきりすときょうだんおおさかきょうかいほんかん）

名 称　日本基督教団大阪教会本館
　煉瓦造を主とした複合構造、建築面積 467㎡、３階建、塔屋及び門柱付、洋瓦葺　附：長椅子など調度類 92 点、２階半円窓旧ステンドグラス一具（５枚）
文化財の種類　有形文化財（建造物）
員 数　１件（１棟）
所在地　大阪市西区江戸堀一丁目 23 － 17
所有者　宗教法人　日本基督教団大阪教会
年 代　大正 11 年（1922）

沿革

日本基督教団大阪教会の起源は、アメリカン・ボードの宣教師ゴルドンが始めた英語塾にあるとされ、明治７年（1874）５月 24 日に西区本田の小さな借家である梅本町公会としてはじまった、在阪最古のプロテスタント教会である。その後、明治 10 年（1877）、明治 14 年（1881）、明治 21 年（1888）と教会活動の進展により会堂を移転し、教会員が 300 人を超えた大正７年（1918）には、現在の西区江戸堀における教会堂建設が決められた（註１）。設計は数多くの教会堂建築を手がけていたヴォーリズ建築事務所に依頼され（註２）、大正 10 年（1921）に着工、翌年竣工した（註３）。

建築的特徴について

大阪教会本館は西区土佐堀通りの南に通る江戸堀北通りに南面し、聖堂と大講堂を含む幅 15.4 m、奥行き 28.7 m、最大高さ約 15 m、地上３階建て、妻入りの建物と、その北西隅に 4.5 m四方、高さ約 25 m の塔屋を付している。南面の妻壁の西側に間口 2.2 m の正門を開き、現在、本館の西側には緑豊かな前庭（註４）が配され、塔屋１階部に開く玄関へと通じるアプローチ空間として使われている。本館北側の背後には鉄筋コンクリート造３階建の教育館が建つ。

本館正面は切妻形の煉瓦壁で、中央に御影石の屋根形迫持ちアーチを庇にした出入口と、その上部に直径は約 2.4 mのバラ窓を配す。このファサードの構成は一見すると簡潔であるが、煉瓦の長手と小口を交互に表すフランス積みを基調にして、ブリック・ワークのさまざまな図柄が折り込まれている。また用いられている煉瓦は均一なものではなく、形状不揃いの焼過ぎ煉瓦を積みあげ、織物のような風合いを感じさせている。30 m余りつづく教会堂側壁の一層目はフラットアーチの矩形窓、二層目は半円アーチ窓、側廊上部にあたる三層目には小さな半円アーチ窓が連なり、その上部にはロマネスク・スタイルの特徴であるロンバルディア・バンドが軒下を飾る。塔屋は６層で構成され、宝形屋根を架けている。また本館西側に続く正門の門柱も煉瓦造で、建物正面の妻壁と同様、柱頂部など各所にブリック・ワークが施された意匠性の高いものである。

本館内部の主なる諸室として、１階には玄関ホール及び階段、大講堂、２階は 250 席余りを備えた幅 14.5 m、奥行き 25.5 mの聖堂、牧師室などが置かれている。また聖堂は後部にギャラリーを備え、屋根裏まで吹き抜いたオープン・ルーフとなっている。２階の聖堂は身廊と側廊とで構成されるバシリカ式の平面を有し、上部空間には約 12 mの梁間に７組の木造キングポスト・トラスを架け、それらを支持するブラケットの意匠は、トラス屋根の重量を打ち消すかのように巧みである。内壁面は腰高までを化粧煉瓦積みとし、それより上部を漆喰塗としており、煉瓦の腰壁によって内外の一体感がつくり出されている。聖壇上の大きなラウンド・アーチは力強く、側廊はアーチを連続させることで奥行き感と劇的な光の効果が生まれている。また聖壇は弓形に張り出すように設けられ、会衆席から聖壇に向かって床がゆるやかに傾斜している。

１階の大講堂は聖堂の直下に位置する大部屋で、集会や教会学校の教室等に用いられている。昭和 47 年（1972）の改築により、内装は改変されているが、当初の主要構造部材、東西壁面の窓の配置などは保持されている。加えて階段室も本教会にとって重要な空間である。玄関ホールの両脇に設けられた階段は、連続するアーチ形の手摺子によって上昇感を強め、太い親柱が屈曲する階段を力強く分節する。２階の聖堂への入り口であるホールには、ステンドグラスの入る半円形の飾り窓が配されている。階段室はさらにオルガン（註５）と会衆席を備えた３階ギャラリーへと通じ、上部にある円形のバラ窓から会衆席へと射しこむ光が、ロマネスク・スタイルの大阪教会の象徴となっている。

なお本館の北側には、かつて１階に図書室等、２階に社交室、３階に畳の日本室を備えた木造の教育館（付属館）が接続していたが、平成元年（1989）に鉄筋コンクリート３階建に建替えられている。

構造的特徴について

大阪教会本館の構造はその外観からは煉瓦造を想起させるが、部位によって構造材が異なる「複合構造体（mixed structure）」であることが、当初の設計図面および建物調査（註６）により明らかになっており、構造設計には米国からの技術援助があったことが伝えられている。次に要点を列記する。

・**基礎**：外壁布基礎は無筋コンクリート、外柱基礎は鉄筋コンクリート造であるなど、無筋並びに鉄筋コンクリート造基礎が併用されている。

・**柱**：柱には鉄骨が採用されている。外柱は基礎から小屋までの通し柱とし、中柱は２階の会堂床を支える管柱としている。柱脚部は鉄筋コンクリートで庇護され煉瓦壁体に納められている。

・**梁および床**：鉄骨柱に架かる梁は鉄筋コンクリート造で、主要鉄筋として米国から輸入したカーンバー（Kahn trussed bar）（註７）が用いられている。臥梁も鉄筋コンクリート造で、２階および３階の床部や外周煉瓦壁と繋がるバットレス部に配され、側壁煉瓦頂部の補強効果を高めている。また梁間が最も長大な１階大講堂の天井には、鉄筋コンクリート造の梁を波型鉄板で被覆した防火床（註８）が採用されている。

・**屋根**：煉瓦壁頂部の軒桁、母屋部のトラス梁、下屋の垂木は木造である。屋根葺材はセメント瓦とし、現在は洋瓦に葺き替えられている。

以上のように本建物は壁面に煉瓦を用いているが、無筋・鉄筋コンクリート、鉄骨、木といった異種材料の結合が多く、それらを一体として結実させた「複合構造体」であることが特徴である。

改修履歴について

大阪教会本館における主な改修履歴（註９）について簡単にまとめる。

昭和 47 年（1972）の創立 100 周年記念に合わせて、１階大講堂の床面が傾斜床からフラット床に変更され、１階玄関ホール脇の控室がトイレに改修された。平成元年に本館北側の木造３階建ての教育館が、鉄筋コンクリート造３階建てに建て替えられた。この改修に合わせて塔屋の基礎部を補強し地盤改良が行われた。また本館２階の半円形飾り窓のステンドグラス（註 10）が入れ替えられた。

平成７年（1995）１月 17 日に発生した阪神淡路大震災により被災し、地盤の液状化等により聖堂妻壁に亀裂が生じ、塔屋が傾斜するなどの被害を受けた。復旧にあたっては本館の外周基礎部分の地盤改良が行われ、南側妻面と階段室に鉄骨柱を加えることで妻壁が補強され、塔屋内壁に鉄骨柱を添えることで耐震性が向上された。またバリアフリー化に応じるため、１階玄関ホールにエレベーターが設置された。

以上のようにこれまで改修や耐震補強が行われてきているが、全体を通じて煉瓦壁や柱梁や小屋組みなどの主要構造部材は建築当初から変更されておらず、特に教会堂内部を最も特徴づけている２階聖堂の内部空間は建築当初の姿が維持されている。

本館と一体的に設計・製作された調度類などについて

本教会には、建物と一体として設計・製作された調度類や旧ステンドグラスなどが残っている。

建築当初の調度類（註 11）は、２階聖堂内の会衆席の長椅子 71 点をはじめ、聖壇に据えられた椅子（註 12）３点、講壇および３階ギャラリー席や階段室などに配された長椅子 17 点があり、これらの総数は 92 点である。長椅子はオーク材の厚板を用い、２階会衆席のものは聖壇の曲線を囲むよう円弧形にデザインされている。また聖壇の椅子は、会衆席と比較して装飾性が高いゴシック調のデザインが施されている。

本館２階の半円形飾り窓には教会唯一のステンドグラスが嵌められており、現在のものは改修によって入れ替えられたものだが、前身のステンドグラス一具（５枚から構成）が別置保管されている。旧ステンドグラスは、繁茂する樹木の中央に白い花が咲く風景が図案となっており、使用されている乳白色のマーブル模様のガラス（註 13）は米国製のものである。

なお照明器具も建築当初のものがいくつか残っている。聖堂内天井に設置された灯具は、繊細な彫刻が施された鋳造製の金物で吊り下げられている。また階段室の踊り場に設置された灯具はブラケット部分に装飾模様を彫り出したものである。

評価

大阪教会本館の意匠的特徴は、半円アーチを用いた壁面構成を特色とするロマネスク様式の外観や、バシリカ式平面の聖堂、小屋組みに簡素でかつ力強い印象を与えるキングポスト・トラスが採用されるなど、中世初期に遡る建築様式を用いているところにある。

建築構造は、外観からは煉瓦造に見えるが、柱梁などの主要構造部材に、鉄骨、鉄筋コンクリート等を複合的に活用している点が大きな特徴である。近代日本において大規模建築に用いられた構造の歴史を辿ると、幕末から煉瓦造を主とした洋風建築が数多く建てられ、明治期から大正期にかけて耐久性や防火性を増すため煉瓦のみでなく鉄骨や鉄筋コンクリートを複合的に用いた「複合構造体」へと発展を遂げるとともに、その材料や施工技術は欧米（特に米国）から輸入され

た。しかし大正 12 年（1923）に発生した関東大震災において、煉瓦を用いた建物の多くが被害を受けことにより、以降構造は鉄筋コンクリート造が主流となり、日本国内で材料や施工技術が独自に発展した。このような歴史的な背景があり、煉瓦造を主とした建造物で現存するものは、大阪府内においても少ない（註 14）。そして関東大震災直前の大正 11 年に竣工した大阪教会は、当時の米国の最先端構造技術を導入した「煉瓦を主とした複合構造体」の、最晩年かつ到達点といえる建築作品に位置付けることができる。

また大阪教会は、ヴォーリズ建築事務所の大規模な教会建築の代表作品としても評価できる。同事務所は戦前期におよそ 140 棟の教会建築を設計し、建築活動の主たる部分をなしている。そのうち、煉瓦や鉄筋コンクリート造といった非木造の大規模な教会堂で現存する作例はいくつかあるが（註 15）、建築面積が 450㎡を超し、高さ約 25 mの高塔を有する大阪教会本館は、最大規模のものである。

大阪教会本館は建築当初から現在に至るまで、教会の需要や安全性を確保するため、改修や耐震補強が行われてきたが、外観を特徴づける煉瓦壁、本館の骨格である柱梁や小屋組みなどの主要構造部材、内部の意匠的価値が最も高い２階聖堂の空間などは適切に維持されている。また当該建物は聖堂のみならず大講堂の機能が含まれているのが特徴として挙げられる。これは献堂にあたり大阪教会が、礼拝のみではなく地域のため種々の集会など多用途に供することができる教会堂を目指したためであり（註 16）、現在も聖堂と大講堂の機能が保持されている。さらに 1990 年代に再整備された前庭が塔屋 1 階に開く玄関へと通じるアプローチ空間を豊かなものにしており、都市部における教会堂としても見るべきものがある。なお大阪教会本館はすでに平成８年（1996）に国登録有形文化財として登録されており、建築から現在に至るまで教会員達によって大切に守られている。

以上のように大阪教会本館は、都市部における大規模な教会堂建築であり、その外観に煉瓦壁とロマネスク様式の伝統的な要素を用いているが、建築構造には当時最先端の「煉瓦を主とした複合構造体」が使われており、近代日本における建築構造技術の発展を知るうえで貴重である。また全国に数多くの教会建築を残したヴォーリズ建築事務所における大規模な教会堂作品としても重要であり、総じて大阪府指定文化財としてふさわしい。なお建築当初から使用されている調度類や、別置保管されている旧ステンドグラスは、建物と一体として設計・製作された貴重なものである。

（神谷悠実）

註１　明治 15 年（1882）に大阪教会の牧師として就任した宮川経輝は、現教会堂の建設を推進し、教会活動の進展に大きく寄与した。

註２　大正７年（1918）にヴォーリズ建築事務所に設計が依頼され、設計着手から着工まで３年を要した。６つの計画案スケッチが残されており、長い設計期間中にヴォーリズ建築事務所において様々な計画案が検討されていたことが分かる貴重な資料といえる。設計にあたり作成されたスケッチや建築図面の原図は、現在、株会社一粒社ヴォーリズ建築事務所が所蔵しており、大阪教会には複写図面が保管されている。

註３　建築年代は、献堂式の際に配布された記念冊子「大阪基督教会会堂建築記念　大正 11 年６月」による。

註４　前庭は 1990 年代に一部を煉瓦敷きにするなどの改修が施され、現在の姿となっている。

註５　３階ギャラリーにはリードオルガンとパイプオルガンが据えられている。リードオルガンは、*Esty Organ company*（米国）の製品で、当社の 1922 年のカタログに掲載されている。建築時に奉献されたものと伝わる貴重な装備といえる。阪神淡路大震災で被災したが、修復され現在も演奏することができる。パイプオルガンは昭和 51 年（1976）に設置されたもので、設置に伴いギャラリーを支持する補強工事が行われた。

註６　大阪教会では歴史を経てきた教会堂の保存対策に向けての建築調査を昭和 52 年（1977）に日本建築学会近畿支部に依頼し、昭和 56 年（1981）に「大阪教会建築調査報告書」が作成された。報告書は教会堂を保存することを前提として、特に構造上の特徴に重点を置いて書かれている。

註７　*Trussed Concrete Steel company*（米国）製の異形鉄筋の種類。大正年間に日本に輸入され使用された。大正 12 年の関東大震災で多くに被害を引き起こしたため、以降使用されていない。なおカーンバーが使われている現存建物には、大谷派本願寺函館別院（国指定／大正４年（1915））、山口銀行本館（山口県指定／大正９年（1920））などがある。

註８　防火床とは、コンクリートや木造の梁を鉄板で被覆することで防火性を増すための工法である。

註９　大阪教会では創建から現在に至るまでの建物としての歩みを令和３年（2021）に「日本基督教団大阪教会建築調査記録」にまとめるとともに、建物の現況図面が作成された。現況図面は、建築当初図面に一部加筆や改変する方法で作図されており、本稿では本調査記録に収録された図面を引用する。

註 10　現在のステンドグラスはキリストと羊の図案で、平成元年（1989）にミラノで製作されたものである。

註 11　調度類の図面は残っていないが、主に会堂建築記念冊子に掲載されている古写真に写っているものを、建築当初と判断する。

註 12　椅子の背もたれの裏側には、献堂にあたり尽力した建築委員長の名が刻まれている。

註 13　ステンドグラスに使用されているのは、*Kokomo Opalescent Glass*（米国）製のガラスである。

註 14　大阪府内で煉瓦を主とした建造物で現存するのは、北浜レトロビルヂング（旧桂隆産業ビル）（国登録／明治 45 年（1912））、高麗橋ビルディング（明治 45 年）、大阪市中央公会堂（国指定／大正 7 年（1918））、川口基督教会（府指定／大正 8 年（1919））、田尻歴史館洋館（府指定／大正 11 年（1922））が挙げられる。

註 15　ヴォーリズ建築事務所設計による現存する非木造の大規模な教会堂は、京都御幸町教会（煉瓦造／京都市指定／大正 2 年（1913））、明治学院礼拝堂（煉瓦造／港区指定／大正 4 年（1915））、久留米ルーテル教会（煉瓦造／登録／大正 7 年）、大阪福島教会（RC 造／昭和元年（1926））、神戸ユニオン教会（RC 造／国登録／昭和 3 年（1928））、神戸女学院チャペル（RC 造／国指定／昭和 8 年（1933））、博愛社礼拝堂（RC 造／昭和 10 年（1935））、京都復活教会（RC 造／昭和 11 年（1936））が挙げられる。

註 16 「大阪基督教会会堂建築記念　大正 11 年 6 月」の冒頭には、「（前略）新会堂は独り我が教会の使用に止めず広く之れを我が大阪市民の為めに解放し宗教、教育、社会事業等の集会に便し教会本来の使命に向て邁進せんこと之なり。（後略）」とあり、地域に開かれた教会を目指すべきであると記されている。

参考文献

大阪基督教会 1922『大阪基督教会　会堂建築記念』

大阪基督教会 1924『大阪基督教会沿革略史』

日本建築学会近畿支部・日本基督教団大阪教会 1981『大阪教会建築調査報告書』

大阪府教育委員会 2007『大阪府近代化遺産（建造物等）総合調査報告書』

独立行政法人　国立文化財機構　東京文化財研究所 2020『コンクリート造建造物の保存と修復－未来につなぐ人類の技 19』

日本基督教団大阪教会 2021『日本基督教団大阪教会　建築調査記録』

写真1　日本基督教団 大阪教会本館　外観

写真2　日本基督教団 大阪教会本館　聖堂内部

写真3　日本基督教団 大阪教会本館　聖堂会衆席

写真4　日本基督教団 大阪教会本館　階段室

金剛寺一切経

名 称 金剛寺一切経
文化財の種類 有形文化財（書跡・典籍）
員 数 4461 巻 24 帖２枚
所在地 河内長野市天野町 996 番地
所有者 宗教法人 天野山金剛寺
年 代 平安時代前期から江戸時代中期まで

概要

金剛寺一切経は、天野山金剛寺（以下、金剛寺。河内長野市）が所蔵する 4461 巻 24 帖２枚（註１）にて構成された、まとまって伝来する府内唯一の写本一切経である。

本一切経は、鎌倉時代前期から中期にかけて金剛寺およびその周辺地域の寺社等にて書写した経巻と、既に平安時代以来各所にて書写されていた経巻を併せることで形作られた。この中には、中国唐代の経巻に基づく本文をとどめる奈良時代写経を転写した経巻も多数含まれる（註２）。

金剛寺における一切経の書写

一切経とは、体系的に集積した数多の仏教経典のことで、経・律・論の三蔵のみならず中国の高僧らが著した中国撰述の注釈書類等も加えた、仏教典籍の集大成というべき経典群である。

金剛寺は、行基の開創で、空海修行の地とされるが、その後荒廃する。金剛寺の再興は平安院政期のことで、聖地房阿観（1136 ～ 1207）が弘法大師空海の御影供を始めたと伝わる承安２年（1172）、あるいは金堂が建立された治承２年（1178）とされる。金剛寺一切経の書写事業は、『施焔口餓鬼陀羅尼経』の奥書に「承元第二年六月七日、於河内国金剛寺書写已畢」と記されることから、阿観の没した翌年となる承元２年（1208）に開始されたと考えられている。以降、嘉禎３年（1237）を最多として書写奥書を有する経巻が多く見いだされ、建長３年（1251）より後は急速に書写にかかる奥書が見えなくなる。このことから、金剛寺を拠点とする書写事業は承元２年に開始、嘉禎３年頃に最も活発な書写活動がなされ、ほどなく大部分の書写が終了したとされる。金剛寺の山内における書写場所として、北房、東谷、塔本房、如意院、北谷不動院、中院、極楽院、光明心院などが奥書から確認できる。

こののち、文永 10 年（1273）に「金剛寺安置一切経之内、未加点之間、（中略）、仍加点而納寺」と記された『成唯識論 巻六』の奥書のごとく、加点にかかわる奥書が現れる。この頃には金剛寺に整えられた一切経を用いて、訓読のための訓点を付すなど修学のなされたことが知られる。また、南北朝時代の文中元年（1372）に『大般若波羅密多経』巻第五十三および巻第五十五などが補写されたこと、江戸時代中期の正徳４年（1714）には『羅摩伽経』や『摩訶般若波羅蜜道行経』『小品般若波羅蜜経』などが修理のうえ折本に改装されるとともに、欠本は黄檗版をもって補写されたことなどが奥書より判明する。長きにわたって整備や護持のなされてきたことがうかがえる。

金剛寺周辺寺院における書写

本一切経には、金剛寺周辺地域の寺院などにて書写された経巻も数多く伝存する。奥書に「金剛寺一切経内」などと明記される事例として、貞応３年（1224）に和泉国南郡山直郷の大日寺（岸和田市）にて書写された『雑一阿含経 巻第十一』『雑一阿含経 巻第二十』や、嘉禎２年（1236）に同国塩穴郷石津村の念仏寺（堺市）にて書写された『十誦羯摩比丘要用法』『善見律毘婆沙 巻第四』、同３年に同国和田郷下条菱木村（堺市）の釈尊寺にて書写された『摂大乗論釈 巻第十』、同年に同国泉郡上条郷豊中村（堺市）にて書写された『広弘明集 巻第三』などがあげられる。金剛寺にて書写を進めると同時に、各所に散在する貴重な仏典の写本を求め、周辺地域の寺院などにて書写を行っている様子がうかがえる。

このほか、奥書などに金剛寺一切経とは記されないものの、同時期に書写され、金剛寺に伝えられた経巻も数多く存在する。例えば、河内国内において書写された経巻として、寛喜２年（1230）に錦部郡宇礼志郷の結縁院（富田林市）にて書写された『薩婆多毘婆沙 巻第一』や、嘉禎３年に丹北西条郡矢田部郷の善福寺（大阪市）にて書写された『四分律 巻第五十三』などがある。また、和泉国内での写経として、嘉禄３年（1227）に大鳥郡の長承寺（堺市）にて書写された『根本説一切有部毘奈耶雑事 巻第三十一』や、貞永元年（1232）に日根郡淡輪辺（岬町）で書写された『阿毘曇八揵度論 巻第二十二』、嘉禎２年（1236）に土塔山（堺市）にて書写された『大周刊定衆経目録 巻第五』、そして同３年（1237）に泉郡の槙尾寺（和泉市）にて書写された『阿毘達磨倶舎釈論 巻第十八』『広弘明集 巻第十八』、向井村（堺市）にて書写された『弘明集』、和田郷下条の栄多寺（堺市）にて書写された『一切経音義 巻第十』、日根郡近木の地蔵堂（貝塚市）にて書写された『一切経音義 巻第四』などが伝存する。

平安・鎌倉写経の収集

金剛寺一切経は、そのほとんどが鎌倉時代に書写された経巻で構成されている。しかし、この一切経中には、阿観による金剛寺の再興期、あるいは書写事業の開始時期を遡る年代を記した、書写や校合の奥書を有する経巻も見いだすことができる。特筆すべきものとして、本一切経中にて奥書から書写年代が判明する最も古い経巻である承暦３年（1079）書写の『大般若波羅密多経 巻四百』を含む大般若経約三百巻や、保延５年（1139）書写の『大唐慈恩寺三蔵法師伝』など僧快尋が発願した一切経の一部、応保２年（1162）書写の『顕揚聖教論』など大鳥郡深井郷（堺市）八田寺の一切経の一部、そして建久７年（1196）書写の五部大乗経などを含む僧栄印発願の紀伊国丹生都比売神社とみなされる天野宮一切経の一部などが挙げられる。このほかにも、長承４年（1135）に和田郷中条（堺市）の行墓（基カ）院野々井寺住僧らが書写した『経律異相 巻第三十五』や、康治２年（1143）に常楽寺（堺市）の御塔供養料経として書写された『大方広仏華厳経 巻第三十八』なども伝わる。また、書写の年紀は記されないものの、もう一組、字体や料紙といった形態から平安時代前期の書写と判断される大般若経約六百巻も現存する。これらの経巻は、13 世紀初頭から金剛寺にて一切経書写事業が進められる間、既に平安時代以来書写され存在していた経巻の施入もしくは収集もなされたため、金剛寺に伝来したと考えられている。

金剛寺一切経と奈良写経

金剛寺一切経中には、いわゆる古逸経典が遺存することも注目される。例えば、本一切経中より見いだされた後漢代の安世高訳『十二門経』は、隋代の仁寿２年（602）に成立した『衆経目録』で既に欠本と記されており、７世紀初頭には散逸していた経典であった。また、安世高訳『安般守意経』をはじめとして、『仏説七女経』『五王経』『餓鬼報応経』『集諸経礼懺儀』などは、現在流布する 10 世紀以降に成立した宋版や高麗版といった刊本一切経系統の文言と大きく相違する異本であり、その文言は奈良写経である正倉院聖語蔵本と多く一致することが明らかにされている。奈良時代の写経は、隋・唐代の本文を反映しており、敦煌写経とも親近性を有するとされる。金剛寺一切経は平安時代以降に書写された写経であるが、しかし、その藍本として奈良時代の写経もしくはその転写本を用いたものが存するため、宋版や高麗版といった刊本とは異なる経典や本文を伝えているとされる。

評価

金剛寺一切経は、その大半が平安時代から鎌倉時代中期にかけて金剛寺および周辺地域の寺社などにて書写された経巻で構成される、まとまって伝わる府内唯一の書写一切経である。本一切経には、書写や校合などの奥書が数多く記されており、書写の年代や場所、人物そして願意などを知ることが出来る。このことから、中世における金剛寺史のみならず、河内国および和泉国の地域史や文化史を理解する上で非常に重要である。加えて、僧侶の学問的営為により訓点を付された経巻や、加点年を記した奥書を持つ経巻が存することから、当時の訓読を知ることができ国語学上においても貴重である。また金剛寺一切経は、主たる藍本が奈良時代の写経もしくはその転写本と考えられており、既に散逸したとされてきた経典を蔵することや、宋版など刊本一切経系統とは異なる本文を記す経典を多数含む資料群であることから、日本列島のみならず東アジアにおける仏教学上の資料的意義も大きい。以上より金剛寺一切経は、歴史学、国語学、仏教学などの学術研究上において非常に価値が高いといえ、本府指定文化財にふさわしい。

（三好英樹）

註１　金剛寺一切経を構成する経巻のうち、既に国の重要文化財として大正４年（1915）に指定された後村上天皇の奥書を有する『大般涅槃経』12 巻および大正８年指定の『梵漢普賢行願讃』１巻、昭和 43 年（1968）指定の『宝篋印陀羅尼経』１巻は、この員数に含まない。また本一切経中には、同一名の経典が複数巻存在するものもある。

註２　金剛寺一切経は、昭和 11 年（1936）に東方文化学院東京研究所によってはじめて整理と調査がなされ、その後、昭和 40 年代半ばには河内長野市史編纂事業で調査のうえ史料編等が刊行されるなど、世に広く知られた存在であった。しかし、長らくその全貌は詳らかでなく、落合俊典氏を中心とした研究チームによる、目録を含む調査報告書（2004、2007）の刊行によってはじめて明らかになった。

参考文献

三好鹿雄 1936「金剛寺一切経全貌」『宗教研究』13 － 6

梶浦晋 2001「金剛寺一切經と新出安世高譯佛典」『佛教学セミナー』73

落合俊典編 2004『金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究』科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成果報告書

京都国立博物館編 2004『古写経―聖なる文字の世界―』

赤尾栄慶 2005「河内長野金剛寺一切経管見―中間報告にかえて―」『マンダラの諸相と文化―頼富本宏博士還暦記念論文集 下 (胎蔵界の巻)』法藏館、頼富本宏博士還暦記念論文集刊行会編

落合俊典編 2007『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成果報告書

大塚紀弘 2016「天野山金剛寺一切経の来歴について」『寺院史研究』15

堺市博物館編 2018『堺・経典をめぐる文化史』

堀川亜由美 2019「天野山金剛寺一切経奥書からみる和泉、河内地域の寺院、人物」『堺市博物館研究報告』第 38 号、堺市博物館編

京都仏教各宗学校連合会編 2020『新編 大蔵経―成立と変遷』法藏館

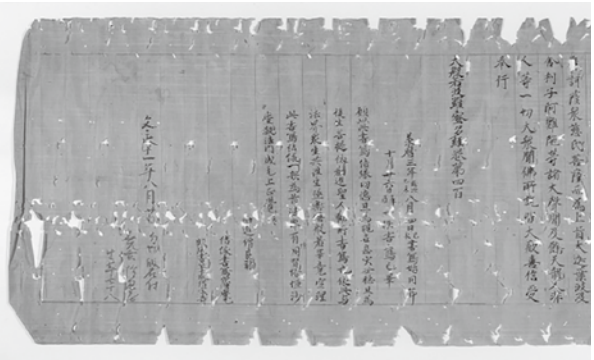


写真1『大般若波羅密多経　巻第四百』巻末

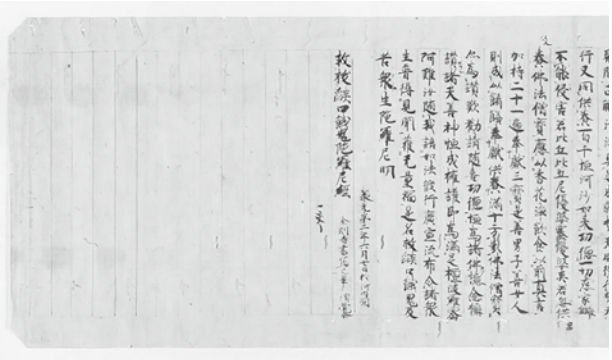


写真2『施焔口餓鬼陀羅尼経』巻末

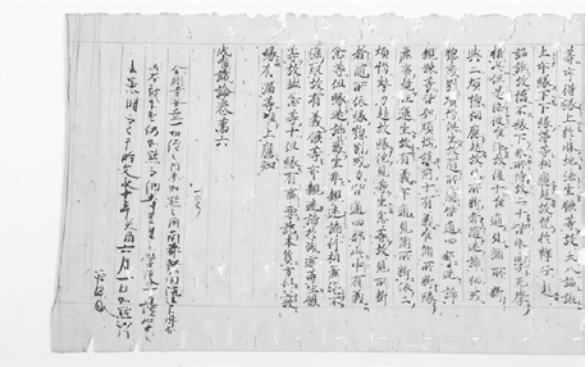


写真3『成唯識論　巻第六』巻末

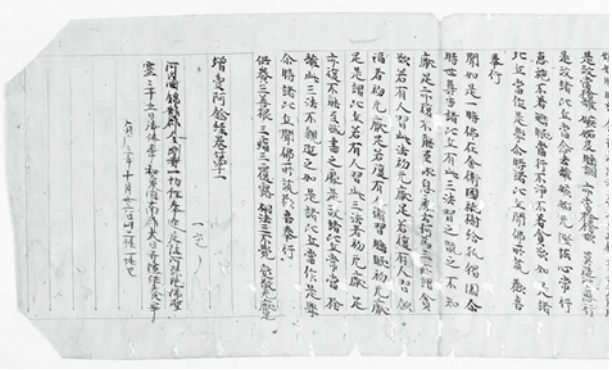


写真4『雑一阿含経　巻第十一』巻末

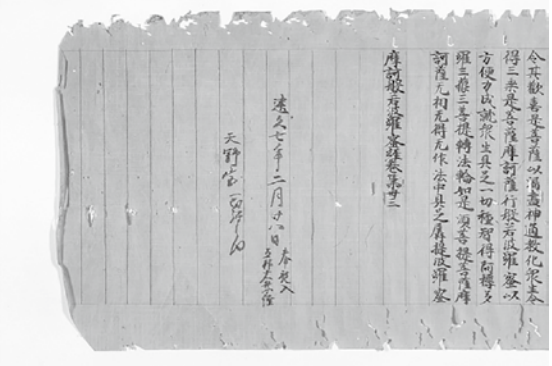


写真5『摩訶般若波羅蜜経　巻第三十三』巻末

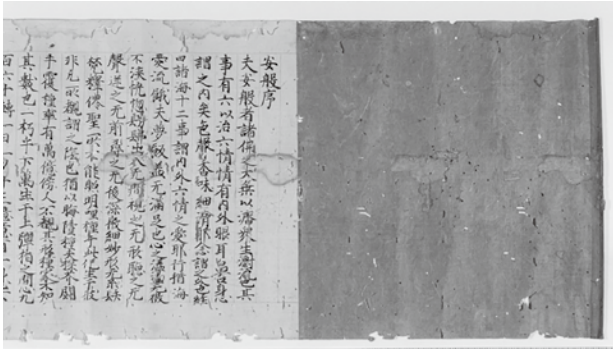


写真6『安般守意経・仏説十二門経・仏説解十二門経』巻首

【資料紹介】

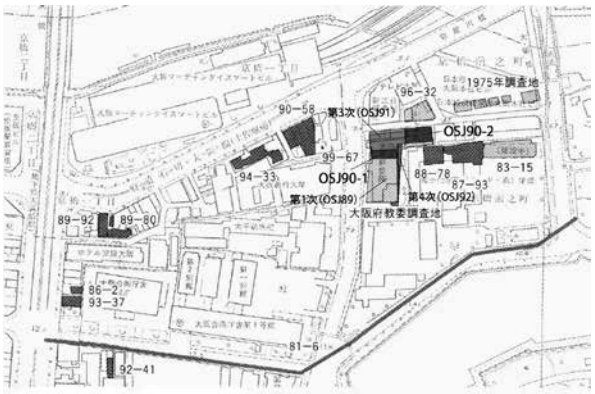
大坂城跡発掘調査報告（ドーンセンター第２次調査報告）

はじめに

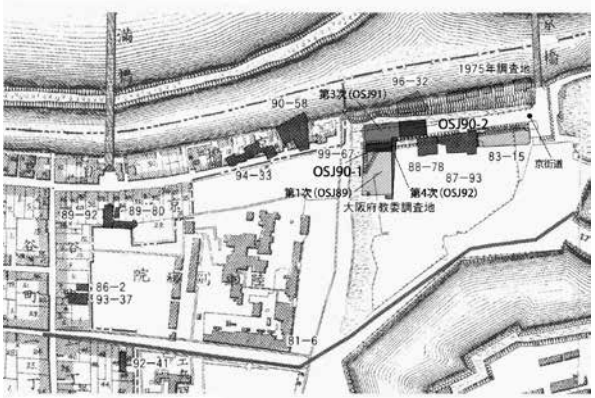
大阪府教育委員会は、婦人総合センター（以下、ドーンセンター）建設事業に伴って、大阪府立大手前会館敷地内において、平成元年（1989）から平成４年（1992）かけて４次にわたって発掘調査を実施している（図 1）。

第１次調査（OSJ89 区：OSJ は大坂城跡の略号）では、奈良時代のピット・土坑、大坂本願寺期の建物群、豊臣前期の屋敷地とそれを移転させて新設した大坂城三ノ丸の石垣、そして江戸時代初期の屋敷跡を検出した。豊臣前期の屋敷地からは遺構に伴って陶磁器、木製品（漆器・下駄・木簡・枡）、鉄製品（短刀・笄・小柄・鏃）、銭貨、金箔瓦を含む瓦類、動物骨など大量の遺物が出土している（註 1）。

今回、紹介する第２次調査は、第１次調査で検出された三ノ丸石垣の解体調査とその下層の屋敷地の調査（OSJ90-1 区、調査面積 215.52㎡）および第１次調査の北東に接する部分（OSJ90-2 区、調査面積 311.74㎡）の二ヶ所で、調査は平成２年（1990）11 月 25 日から平成３年（1991）５月 23 日まで実施した。



大阪市地形図



大阪実測図　明治 19 年（1886）

図1　調査位置図（註2の図 62 に今回の調査区を追加）

OSJ90-1 区では、三ノ丸石垣の移築復元を前提とした解体調査後（石垣を撤去後）、下層の調査を行い、第１次調査で検出された豊臣前期の側溝を伴う南北道路の続きや土坑、礎石、ピット、そして大坂本願寺期の焼土層、礎石やピット、埋甕等を検出した。

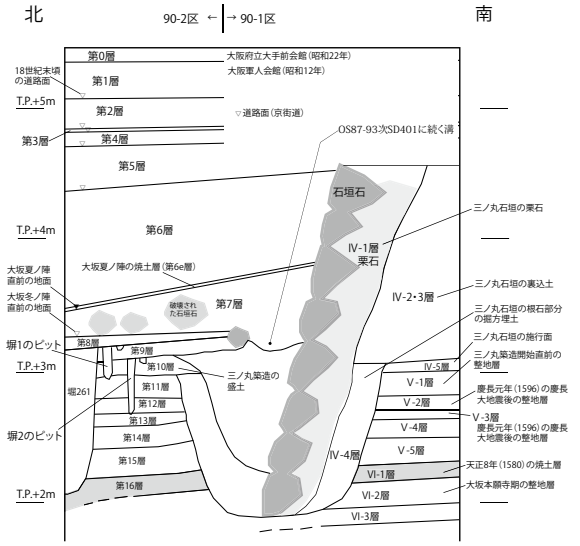
OSJ90-2 区では、豊臣前期の礎石建物、ピット、井戸、便所、土坑、そして豊臣後期の三ノ丸石垣に併行する形で、その前面に設けられた新旧２時期の柱列（塀）と堀、大坂ノ陣による焼土層、江戸時代初期の庇を伴う礎石建物、江戸時代初期から昭和初期にかけて重層して堆積する道路跡（京街道）、昭和初期の区画整理が行われるまで調査地の北端に見られた間知積みの石垣（大正時代までさかのぼる可能性）と寝屋川の河川敷跡などを検出した（註３、４）。

なお、中近世の時期区分については、大坂本願寺が創建された明応５年（1496）から焼亡した天正８年（1580）までを「大坂本願寺期」、大坂本願寺焼亡から大坂城三ノ丸築造開始の慶長３年（1598）までを「豊臣前期」、三ノ丸築造から大坂夏ノ陣の慶長 20 年（1615）までを「豊臣後期」、大坂夏ノ陣以降を「徳川期」としている（註 5）。

1. OSJ90-1 区調査の概要

調査は、堤状に残されていた三ノ丸石垣の中央部分南北方向に先行トレンチを設定し、三ノ丸石垣の裏込めの堆積状況や基底面を確認した。その上で移築復元に必要なデータを記録するため、石垣の各段毎に平面図作成（写真 1）と並行して、約 288 個の石垣石の詳細な標高や個々の寸法（高さ、幅、控長）を計測した（写真2）。そして石を慎重にレッカーで取り外した後に（写真 3）、下層の調査を実施している。

なお、石垣石の撤去作業の前に、現状の写真撮影を行い、石垣前面を洗浄後、番号付け（ガムテープを石面に貼り付け油性マジックインキで記入）を行った。並行して 50cm ピッチで水糸を張り、復元の際の設計図とした。その後、石垣撤去施工者と綿密に調整し、北側に解体用足場の設置後、南側の裏込め土の調査と並行して石垣の解体作業に着手した（写真４～７）。具体的な撤去作業は東・西・中央の３つの地区に分けて東と西を交互に作業を行い、最後に断面観察用に残していた中央部分の石垣石を取り外すこととした。平成２年（1990）11 月 27 日に開始し、平成３年（1991）１月 30 日に終了した。取り外した石垣石は洗浄後、上面の控え方向に墨汁で番号を記入している。

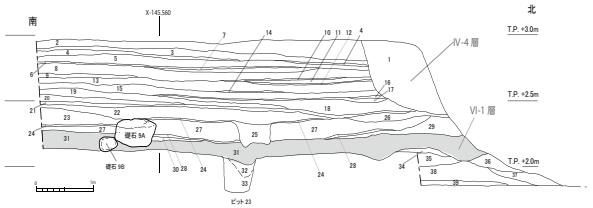


＊第6層はOS83-15の第4-1層（大坂夏ノ陣後の松平忠明による整地層）、第6e層はOS83-15の第4-3層（大坂夏ノ陣の焼土層）、第7層はOS83-15の第5-1層（大坂冬ノ陣後の徳川幕府による豊臣氏大坂城三ノ丸壊平時の整地層）、第8層はOS83-15の第5-2層、Ⅳ-1～5層はOS83-15の第6-1～3層（三ノ丸築造に伴う盛土層）、第16層はOS83-15の第8層（大坂本願寺期）に対応する（註10）。

図2 OSJ90-1・2区の基本層序模式図

基本層序は三ノ丸石垣の北側と南側では、豊臣後期以降の堆積状況が異なることが予想されたため、OSJ90-2区の層序名をアラビア数字ではなく、ローマ数字のⅠ～Ⅵ層と呼称し、Ⅰ層（表土層､昭和以降）、Ⅱ層（江戸時代～戦前）、Ⅲ層（江戸時代）、Ⅳ層（豊臣後期）、Ⅴ層（豊臣前期～後期）、Ⅵ層（大坂本願寺期）とした（図2・3、写真8）。第1次調査で江戸時代以前の遺構については調査が終了しているため、調査はⅣ層から開始している。

Ⅳ層：三ノ丸石垣築造による盛土及び整地土で、Ⅳ－1～5層に分けられる。Ⅳ－1層は三ノ丸石垣の栗石で層厚45～60cmをはかる。Ⅳ－2・3層は三ノ丸石垣の裏込土で、層厚は約1.15mである。Ⅳ－4層は三ノ丸石垣の根石部分の掘方埋土で、中央部分においては栗石で充填され、Ⅳ－4層の堆積はほとんど認められなかった。Ⅳ－5層（標高T.P.+2.8～3.1m）は層厚約20cmをはかり、三ノ丸石垣築造の施工面として、上面の約1cm前後の層は堅固に突き固められており、三ノ丸石垣の掘方を検出している。東側では轍の痕跡を確認し、石垣石を運搬するための荷台の車輪跡と考えられた。層中より備前焼（擂鉢・鉢・甕・壺）、丹波焼大平鉢、青花、青磁、白磁、不明陶器、瀬戸美濃焼（鉄釉擂鉢・碗・皿、灰釉皿）、李朝瓶、犬形土製品、櫛、瓦、銅銭、木簡等が出土している。



1 5Y 5/3 灰オリーブ 粘土・シルトブロック 極粗粒砂～細粒砂【Ⅳ-4】
2 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 瓦敷 【Ⅴ-1】
3 N 5/0 灰色 粗粒砂～細粒砂 【Ⅴ-1】
4 5Y 7/4 浅黄色 極粗粒砂～中粒砂（ラミナ有り）【Ⅴ-1】
5 10Y 5/2 オリーブ灰色～10BG 5/1 青色 礫混じり粗粒砂～極細粒砂 【Ⅴ-2】
6 5Y 3/1 オリーブ黒色 炭 【Ⅴ-2】
7 2.5Y 5/2 暗灰黄色 極粗粒砂混じり中粒砂～細粒砂 【Ⅴ-2】
8 2.5Y 5/2 暗灰黄色 礫混じり中粒砂～極細粒砂 【Ⅴ-2】
9 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 中粒砂～細粒砂 【Ⅴ-3】
10 N 2/0 黒色 炭 【Ⅴ-3】
11 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細粒砂 【Ⅴ-3】
12 5Y 4/1 灰色 中粒砂～細粒砂 【Ⅴ-3】
13 5Y 5/1 灰色 P礫混じり中粒砂～極細粒砂 【Ⅴ-3】
14 5Y 4/1 灰色 中粒砂～細粒砂 【Ⅴ-4】
15 10Y 6/2 オリーブ灰色 P礫混じり中粒砂～シルト【Ⅴ-4】
16 10Y 4/1 灰色 シルト 【Ⅴ-4】
17 5GY 5/1 オリーブ灰色 シルト炭混じり中粒砂～細粒砂 【Ⅴ-4】
18 2.5Y 3/1 黒褐色 細粒砂 【Ⅴ-4】
19 7.5Y 7/2 灰白色 シルトブロック 極粗粒細砂～細粒砂 【Ⅴ-4】
20 5GY 5/1 オリーブ灰色 シルトブロック P礫混じり粗粒砂～細粒砂 【Ⅴ-4】
21 7.5Y 4/1 灰色 炭混じり 細粒砂～極細粒砂 【Ⅴ-5】
22 10GY 7/1 明緑灰色 粘土ブロック 中粒砂～シルト 【Ⅴ-5】
23 10Y 6/2 オリーブ灰色 シルトブロック 粗粒砂～細粒砂（炭混じり）（客土）【Ⅴ-5】
24 5Y 2/1 黒色 炭 【Ⅴ-5】
25 2.5Y 7/6 明黄色
26 2.5Y 4/2 暗灰黄色 粘土ブロック 極細粒砂～シルト 【Ⅴ-5】
27 10Y 6/2 オリーブ灰色 炭ブロック 粗粒砂～細粒砂 【Ⅴ-5】
28 5Y 3/1 オリーブ黒色 炭 【Ⅴ-5】
29 10Y BG 6/1 緑灰色 粗粒砂～細粒砂（炭混じり）【Ⅴ-5】
30 7.5Y 7/3 浅黄色 極粗流砂～細粒砂 【Ⅴ-5】
31 5Y 2/2 オリーブ黒色 シルト混じり炭 【Ⅵ-1】
32 31と33の混層 ピット23
33 ②2.5Y 7/4 浅黄色 粗粒砂～細粒砂 ピット23
34 7.5Y 5/1 灰色 シルト 【Ⅵ-2】
35 10BG 6/1 緑灰色 粗粒砂～極細粒砂 【Ⅵ-2】
36 5Y 6/4 オリーブ黄色 シルトブロック 粗粒砂～細粒砂 【Ⅵ-2】
37 10G 6/1 緑灰色 シルト～粘土 【Ⅵ-2】
38 7.5Y 8/2 灰白色 極粗粒砂～細粒砂 【Ⅵ-2】
39 5Y 2/1 黒色 粘土ブロック 極細粒砂 【Ⅵ-2】

図3 OSJ90-1区の東側Pライン沿い土層断面

三ノ丸石垣は慶長4年（1599）に築造された三ノ丸の北外郭をめぐる防御施設（註6）で、慶長19年（1614）の大坂冬ノ陣の講和後に上部が破壊され、埋没していた。現存高は根石部分を含めると最大で高さ3.3m（8段）、平均して2～3m前後で、東西約21mにわたって石垣を検出した（図4・5、写真9～13）。石垣の掘方は西端で、南側へ大きく入り込んでいく状況から、西端でL字形に屈曲して、南側へ伸びる可能性が考えられる（図6）。第1次調査（OSJ89区）では三ノ丸石垣の前面（大坂冬ノ陣直前の地表面）には破壊された石材（石垣石・栗石）が転がっており（写真14）、これを加えると築造当初は高さ5m以上と推定される。また、裾部には排水を目的とした配石溝を巡らせていた（写真15）。下の2～3段分の石垣石は幅約3m、深さ約0.6mの掘方を設け、地表下に根石状に埋められていた。基底面の高さは東端では標高T.P.+2.37m、中央部でT.P.+1.85m、西端ではT.P.+2.15mと西側が低くなる。中央部で低くなっているのは下の層に存在する遺構の影響で沈んでいるためと考えられる。石垣の施工単位については石垣石の段数の違いから少なくとも4単位あると推定された。

石垣の方位はN-86.2°-Eである。石垣は六甲山系・生駒山系の花崗岩の自然石（割石を少量含む）を用いる「野面積（のづらづみ）」という積み方で、約288個の石垣石の大きさは最大で幅160cm、最小で幅12cm、平均して幅46cm、高さ35cm、長さ58cmで、1㎡あたり使用個数は4～6個である。間詰石はよく残っており、中には間詰石を石垣石として利用している例（仮に支石と呼称）も認められた。石垣の勾配は約5分5厘～5分7厘（約65～67度）である。注目される点は、石の位置が人の目線の高さ（約1.5m）になる石垣の垂直方向の中ほどに幅1mを超える大きな石（837・939・1001）を使用している。石垣の壮大さを強調し、威圧感を与えるための演出と考えられる。栗石は幅29～84cmで、栗石幅と石垣石の控えの長さがほ

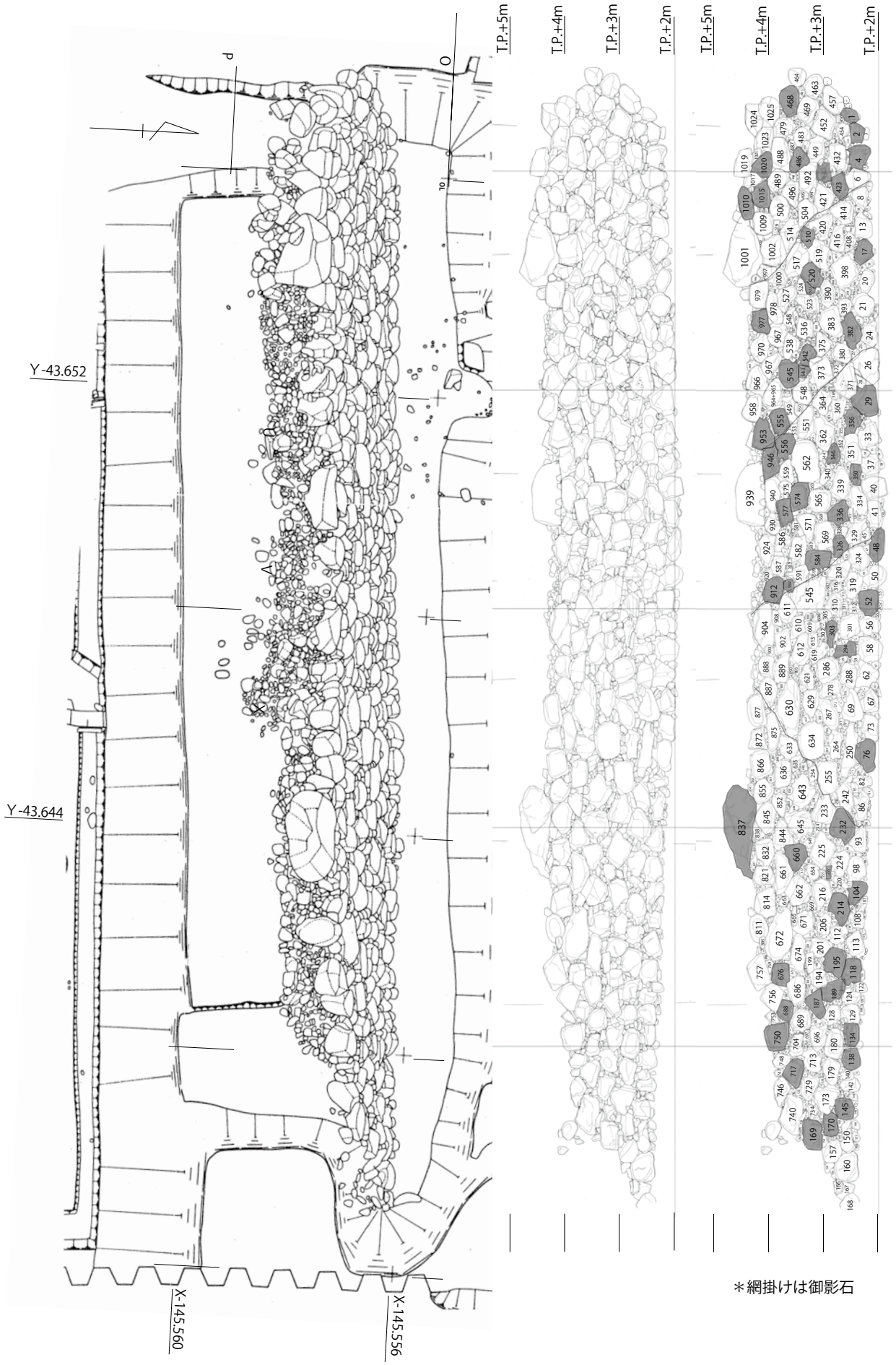
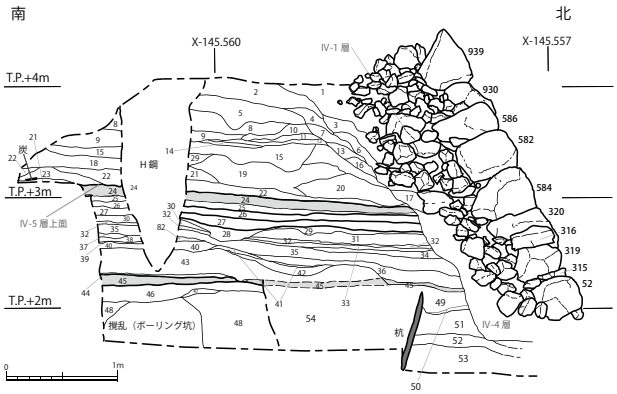


図4 OSJ90-1 区 三ノ丸石垣の平面図、正面図 根石部分を含む（1/100）



1　10YR 6/6 暗黄褐色　粘土・シルトブロック粗粒砂層　【IV-2】
2　10YR 3/1 黒褐色　粘土ブロック粗粒砂層　【IV-2】
3　7.5YR 5/8 明褐色　シルトブロック細礫混じり粗粒砂層　【IV-2】
4　7.5 YR 4/2 灰褐色　極細粒砂ブロック粗粒砂層　【IV-2】
5　7.5YR 4/1 褐灰色　細礫・シルトブロック中粒砂層　【IV-2】
6　7.5YR 4/6 褐色　シルトブロック細礫混じり粗粒砂層　【IV-2】
7　10YR 5/8 黄褐色　シルト・粘土ブロック　中粒砂層【IV-2】
8　7.5GY 6/1 緑灰色　細礫ブロック細粒砂層（細礫が集中する部分は褐色）【IV-2】
9　10Y 5/2 オリーブ灰色　極粗粒砂混じり細粒砂層【IV-2】
10　10YR 4/1 褐灰色　シルトブロック中粒砂層【IV-2】
11　7.5YR 4/4 褐色　シルト粘土ブロック細礫混中粒砂【IV-3】
12　10YR 4/1 褐灰色　粘土ブロック細粒砂層【IV-3】
13　5 Y 5/3　灰オリーブ色　粘土シルトブロック中粒砂層【IV-3】
14　10YR 7/6 明黄褐色　細礫～中礫層【IV-3】
15　7.5Y 5/2 灰オリーブ色　青灰色シルト・黒色土・炭化有機物・下層の 17 等ブロック・中粒砂（円礫が多く含まれる）【IV-3】
16　5 Y 4/1 灰色　シルトブロック　中粒砂層【IV-3】
17　5 Y 5/1 灰色　シルトブロック粗粒砂層【IV-3】
18　10YR 6/8 明黄褐色　シルトブロック細礫～極細粒砂層【IV-3】
19　5 Y 7/6 黄色　粘土・円礫ブロック粗粒砂層（特に円礫は多く含まれる）【IV-3】
20　5 Y 4/2 灰オリーブ色　シルト・粘土・ブロック粗粒砂～中粒砂層（中礫やや多く含む）【IV-3】
21　10YR 2/1 黒色　粘土・シルトブロック　粗粒砂～中粒砂層【IV-3】
22　10YR 3/1 黒褐色　シルト・粘土ブロック　極粗粒砂～中粒砂層【IV-3】
23　10YR 5/6 黄褐色　シルト・炭・焼土ブロック極粗粒砂層【IV-3】
24　N 3/0 暗灰色　極細粒砂～シルト層【IV-5】（石垣施行面）
25　N 3/9 暗灰色　極細粒砂～シルト層【IV-5】
26　5 BG 1.7/1 青黒色　有機物を含む極細粒砂～シルト層【V-1】
27　2.5Y 6/2 黄灰色　礫混じり中粒砂～細砂【道路面：V-2 層相当】
28　2.5Y 2/1 黒色　有機物・炭混じり細砂～シルト層【道路面：V-3 層相当】
29　2.5Y 3/1 黒褐色　炭混じり細粒砂層【道路面：V-3 層相当】
30　2.5Y 6/4 にぶい黄色　極粗粒～極細粒砂層【道路面：V-3 層相当】
31　2.5Y 8/3 淡黄色　PG ？礫混じり粗砂～極細砂層【道路面：V-3 層相当】
32　5Y 3/1 オリーブ黒色　炭混じり中粒砂～極細砂層【道路面：V-3 層相当】
33　5Y 8/1 灰白色　礫混じり粗砂～細砂層【道路面：V-3 層相当】
34　10Y 6/1 灰色　極細砂層【道路面：V-3 層相当】
35　2.5Y4/1 黄灰色　中粒～極細粒砂層【道路面：V-3 層相当】
36　5Y 8/1 灰白色　礫混じり中粒砂～極細砂層【道路面：V-3 層相当】
37　10GY 7/1 明緑灰色　礫混じり中粒～極細粒砂層【道路面：V-4 層相当】
38　7.5Y 2/1 黒色　極細砂～シルト層【道路面：V-4 層相当】
39　5Y 2/1 黒色　炭【道路面：V-4 層相当】
40　5Y 6/3 オリーブ黄色　中粒～極細砂層【道路面：V-4 層相当】
41　5Y 4/1 灰色　炭層　有機物混じり【道路面：V-4 層相当】
42　5Y 8/1 灰白色　礫混じり中粒～極細砂層【道路面：V-4 層相当】
43　2.5Y 6/18 明黄褐色　礫混じり中粒砂～シルト層【V-5 層】
44　2.5Y 4/1 黄灰色　粘土混じり中粒～極細砂層【V-5 層】
45　10YR 1.7/1 黒色　炭層　シルトブロック　客土　【VI-1 層】
46　2.5Y 4/1 黄灰色　炭層　粗砂ブロック　極細砂～シルト層　【VI-2 層】
47　不明
48　不明
49　5Y 2/2 オリーブ黒色　有機物混じり細砂～極細砂層　【VI-2 層】
50　2.5Y 3/2 黒褐色　有機物混じりシルト層
51　10Y 5/1 灰色　礫混じり細砂～シルト層
52　2.5Y 2/1 黒色　有機物混じり炭層
53　7.5Y 4/1 灰色　礫混じり細砂～シルト層
54　崩壊した土坑 4 の埋土

図5　OSJ90-1 区　三ノ丸石垣中央部の側面及び断面図

ぼ同じになり、根石付近より天端の方が広く、玉石と割石状のものが同程度使用されている（註 7）。また、三ノ丸石垣の表面で確認されていた 5 点の石垣石（73・98・371・457・519）の墨書以外に、解体中に新たに 5 点の石垣石（112・267・360・454・740）の上面、側面で「大」？と書かれた墨書が確認された（写真 16）。

なお、この三ノ丸石垣は、平成 6 年（1994）に文化財の活用として、ドーンセンター竣工と同時にドーンセンターの北側を区画するような形で、原位置より北東に約 21m の所で、地上に 2.2m ほどかさ上げし、検出された姿（大坂冬ノ陣の講和後に上部が破壊された状態）に移築復元されている（写真 17・18）。

Ⅴ層：豊臣期の堆積層で、Ⅴ -1 ～ 5 層に細分され、Ⅴ -1 層は豊臣後期、Ⅴ -2 ～ 5 層は豊臣前期。

Ⅴ -1 層：黒色粘質土（下位で粗粒砂がブロック状に堆積）で、層厚は 5 ～ 10cm である。標高 T.P.+2.99m 前後で、三ノ丸築造開始直前までの整地層で、豊臣前期の屋敷地を覆うように堆積している。上面及び下面に瓦片を敷いている（写真 19）。層中より白磁、青花、赤絵、李朝、瀬戸美濃焼（鉄釉香炉、灰釉皿、天目碗・筒形・皿）、備前焼、丹波焼大平鉢、信楽焼（擂鉢・鉢）、土師質土器、瓦質土器、犬形土製品、硯、漆器椀、箸、木簡、シカ前肢骨、魚、貝殻等が出土している。

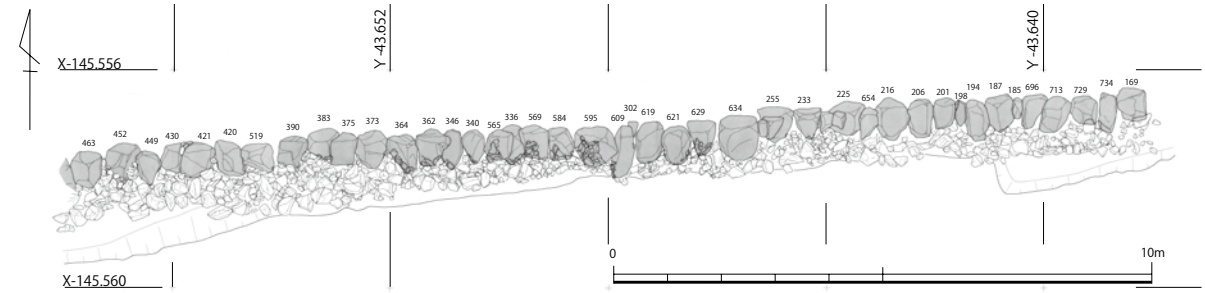


図6　OSJ90-1 区　三ノ丸石垣の施工面での平面図

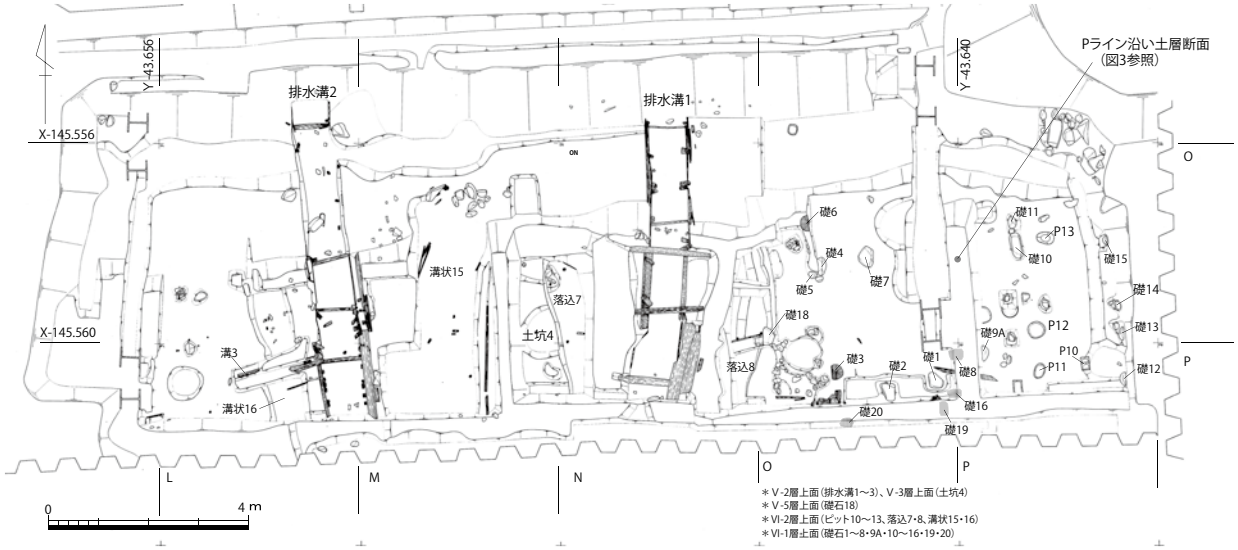


図7　OSJ90-1 区　Ⅵ -1 層上面遺構（Ⅴ -2 ～ 5 層、Ⅵ -2 層上面も含む）

Ⅴ-2 層：オリーブ灰色～暗青灰色土層で、層厚は 10 ～ 15cm である。標高 T.P.+2.86m 前後で、第 1 次調査から、慶長元年（1596）の慶長大地震後の整地土と考えられている。層中より白磁、青花、瀬戸美濃焼（鉄釉碗・皿、灰釉皿）、備前焼（瓶・壺・甕・擂鉢）、唐津焼小皿、丹波焼大平鉢、信楽焼大平鉢、瓦質土器鉢、将棋の駒等が出土している。上面において第 1 次調査で検出された大坂城三ノ丸築造開始前の豊臣前期の屋敷地や両側に側溝（排水溝 1・2）を設けた幅約 5m の道路遺構や溝 3 を検出している（図 7、写真 20）。

排水溝 1・2 は木組みの溝で、幅約 1m、深さ約 1.2m である。埋土から白磁、青磁、青花、色絵、李朝、瀬戸美濃焼（鉄釉碗・皿・壺・坏、灰釉皿）、備前焼（擂鉢・甕・壺・鉢・瓶）、丹波焼（擂鉢・大平鉢）、信楽焼（擂鉢）、土師質土器（鍋・皿・甕・蓋）、瓦質土器（鉢）、硯、木製品（漆器椀、しゃもじ、傘の軸、曲物底板）、金箔瓦、瓦等が出土している。

Ⅴ-3 層：オリーブ灰色土層で、層厚は 5 ～ 10cm である。標高 T.P.+2.7m 前後で、上面はⅤ-4 層同様、豊臣前期（1583 ～ 1598 年）の屋敷地で、Ⅴ-3 層に相当する道路面において土坑 4 を検出している（図 7）。層中より白磁、青花、瀬戸美濃焼（鉄釉碗・皿・壺、灰釉皿）、軟質施釉陶器、備前焼（擂鉢・甕・壺・鉢）、信楽焼（甕）、土師質土器（皿・甕・鉢）、破風（屋根の切妻にある合掌形の装飾板で、長さ 1.2m をはかる。Ⅴ-3 層相当の道路面より出土：写真 21）、曲物底板、ヘラ状木製品、下駄、炭団、骨角製品、貝殻等が出土している。

土坑 4 はゴミ穴で、径 1.5 × 1.6m、深さ 0.63m をはかり、坑中より青磁、白磁、青花、瀬戸美濃焼、備前焼、土師質土器、銭貨、木製品（将棋・下駄・木簡・漆器・栓・櫛・箸）、銅製品、鉄製品（鉄釘・鉄針・刀子・小札・鉄滓）、瓦、魚類、ネズミ、種子等が出土している。

Ⅴ-4 層：オリーブ灰色～黒灰色土層で、層厚は 15cm 前後である。標高 T.P.+2.6 ～ 2.65m で、上面は、豊臣前期（1583 ～ 1598 年）の屋敷地である。Ⅴ-2 層上面で検出した排水溝 1・2 はこの面で掘削される（図 7）。OSJ90-2 区では第 14 層に対応し、礎石、井戸、土坑、ピットなどを検出している。層中より青磁、白磁、青花、李朝、瀬戸美濃焼（鉄釉碗・皿・壺、灰釉皿）、備前焼（擂鉢・甕・壺・鉢）、丹波焼（大平鉢・擂鉢）、信楽焼擂鉢、土師質土器（皿・甕・壺・羽釜）、瓦質土器（鉢、羽釜）、灯明皿受台、木簡、金箔瓦、弥生土器等が出土している。

Ⅴ-5 層：灰色～オリーブ灰色土層で、層厚は 25cm 前後である。標高 T.P.+2.4 ～ 2.5m である。大坂本願寺消失後の整地土と考えられ、上面で落込や礎石等を検出している（図 7）。層中より曲物底板等が出土している。

Ⅵ層：大坂本願寺期以前の堆積層で、Ⅵ-1 ～ 3 層まで確認している。Ⅵ-1 層は天正 8 年（1580）の焼土層（10YR1.7/1 黒色炭層）で、層厚 12 ～ 20cm をはかり、標高は T.P.+2.0 ～ 2.3m である。層中より瀬戸美濃焼、備前焼擂鉢、土師質皿、包丁、鉄製鎌、鋸、切羽、飾り金具、毛抜き、銭貨、木綿、碁石、硯等が出土している。上面で礎石 1 ～ 16・19・20、溝状遺構 16 を検出している（図 7・8、写真 22）。礎石は平面プランの把握はできなかった。溝状遺構 16 からは炭団（たどん）が出土している。礎石の中には石臼を転用したもの（礎石 3・6）もある。Ⅵ-2 層（黄灰色～緑灰色砂質土）は大坂本願寺期の整地層で、層厚 25cm を

図8 OSJ90-1 区 Ⅵ-2層上面遺構

はかり、標高は T.P.+2.15 ～ 2.2m である。上面でピット群、土坑 17、埋甕 20、礎石 18B・21・22、落込 7・8、溝状遺構 15・16 を検出している（図 7・8、写真 22・23）。層中より備前焼擂鉢・徳利、銅製品、笄、漆器椀、側板、鬼瓦等が出土している。Ⅵ-3 層は灰白色砂質土層で、層厚 5 ～ 15cm をはかり、標高は T.P.+1.9 ～ 2.0m である。層中から漆器椀が出土している。

2. OSJ90-2 区調査の概要

調査地は、明治 19 年（1886）の『大阪実測図』によると、東側の京橋南詰めから西側の天満橋南詰め方面に延びる京街道の一画に位置し、調査区内の北端は寝屋川の南岸となる斜面として描かれている（図 1 下）。現在、この区間の京街道は昭和 2 ～ 7 年（1927 ～ 1932）に実施された寝屋川付近都市計画事業によって、寝屋川が付替えられ、旧流路の埋め立てにより、調査地の北側へ道幅を縮小して新たに造り直されている（図 1 上）。

調査によって、大坂本願寺期から近代までの遺構を検出し、第 0 ～ 15 層の堆積層を確認している。第 6 層は OSJ90-1 区のⅢ層、第 7 層～ 10 層はⅣ層、第 11 ～ 14 層はⅤ層、第 16 層はⅥ層に対応する。近世から昭和初期の絵図・地図によると、調査区の北半部は一貫して、道路遺構（京・大坂を結ぶ幹道：京街道）として、南側は町屋や空き地として利用されている。図 9 は調査区西側（T ライン：Y-43.624 m）での基本土層である。

第 0 層：昭和 20 年（1945）から大阪府立大手前会館（戦後に大阪軍人会館を改築したもので、昭和 22 年（1947）に開館）建設時までの堆積土で、電気配管溝、水道管や塀の基礎坑・溝等を検出している（図 10）。上面の標高は T.P.+5.4 ～ 5.45m 前後で、層厚は約 10cm 前後である。

第 1 層：層厚 10 ～ 22cm をはかり、表層約 10cm は大阪軍人会館建設（昭和 12 年（1935）7 月建設）後に盛った整地土である。調査区の中央部から南半部の下層では道路面を検出した（近代～昭和初期の京街道で幅約 6m）。上面に径 1 ～ 2cm の礫が敷かれたもので、表面の土層は固く締まっている。なお、北端は昭和 2 ～ 7 年（1927 ～ 32）の大阪市の寝屋川付近都市計画事業によって埋め立てられた整地層が覆う。この整地層を除去する東西方向の間知積みの石垣を検出した（図 10）。昭和 3 年（1928）の航空写真に見られ、昭和 17 年（1942）の航空写真では埋まっていることから大正時代にさかのぼる石垣と考えられる（註 8）。間知積みの石垣は東西方向に長さ約 23m を検出し、高さは上部が削平されているものの残りの良い西側で 2.6m（9 段分）で、方位は N-81.2° -E である。基底面は東から西へ向かって 4 度傾斜し、北側は寝屋川の河川敷きに続く。近代～昭和初期。

第 2 層：黄色粘土で、上面は玉砂利を敷きつめており、1 ～ 2㎜前後の灰色極細粒砂によっておおわれる（道路面）。道路面及び層中より 18 世紀末頃の陶磁器が出土している。層厚は 20 ～ 25cm である。徳川期。

第 3 層：層厚は約 4 ～ 5 cm 前後である。上面は第 2 層同様に 1 ～ 2㎜前後の灰色極細粒砂によっておおわれている（道路面）。層中より陶磁器、青磁、白磁、瀬戸美濃焼、唐津焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、染付、砥石、鉄釘、小刀、寛永通宝、瓦等が出土している。徳川期。

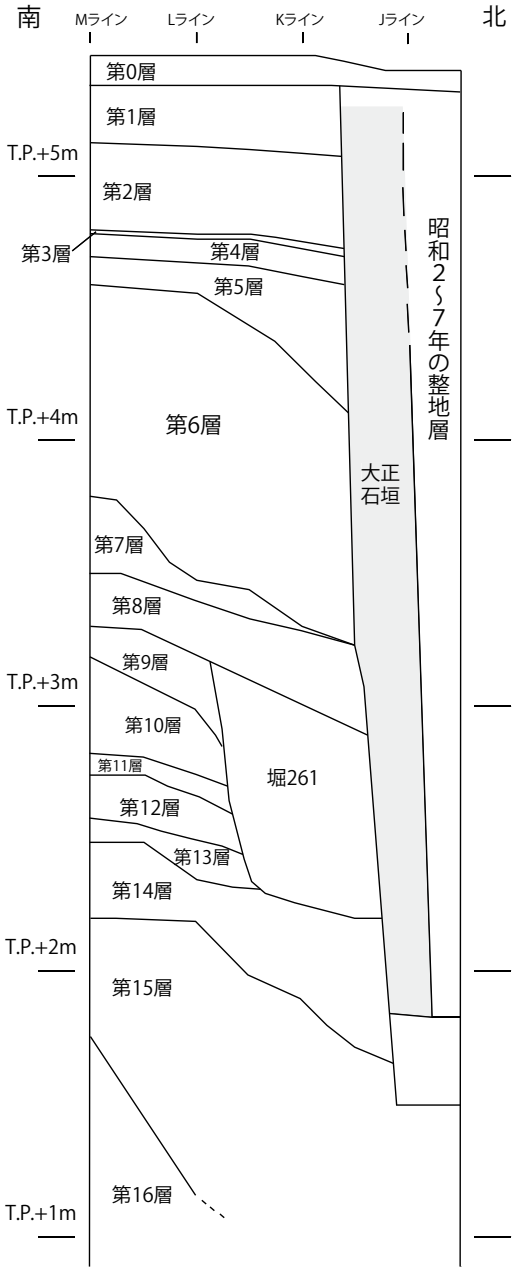


図9 OSJ90-2 区 西側Tライン土層柱状図

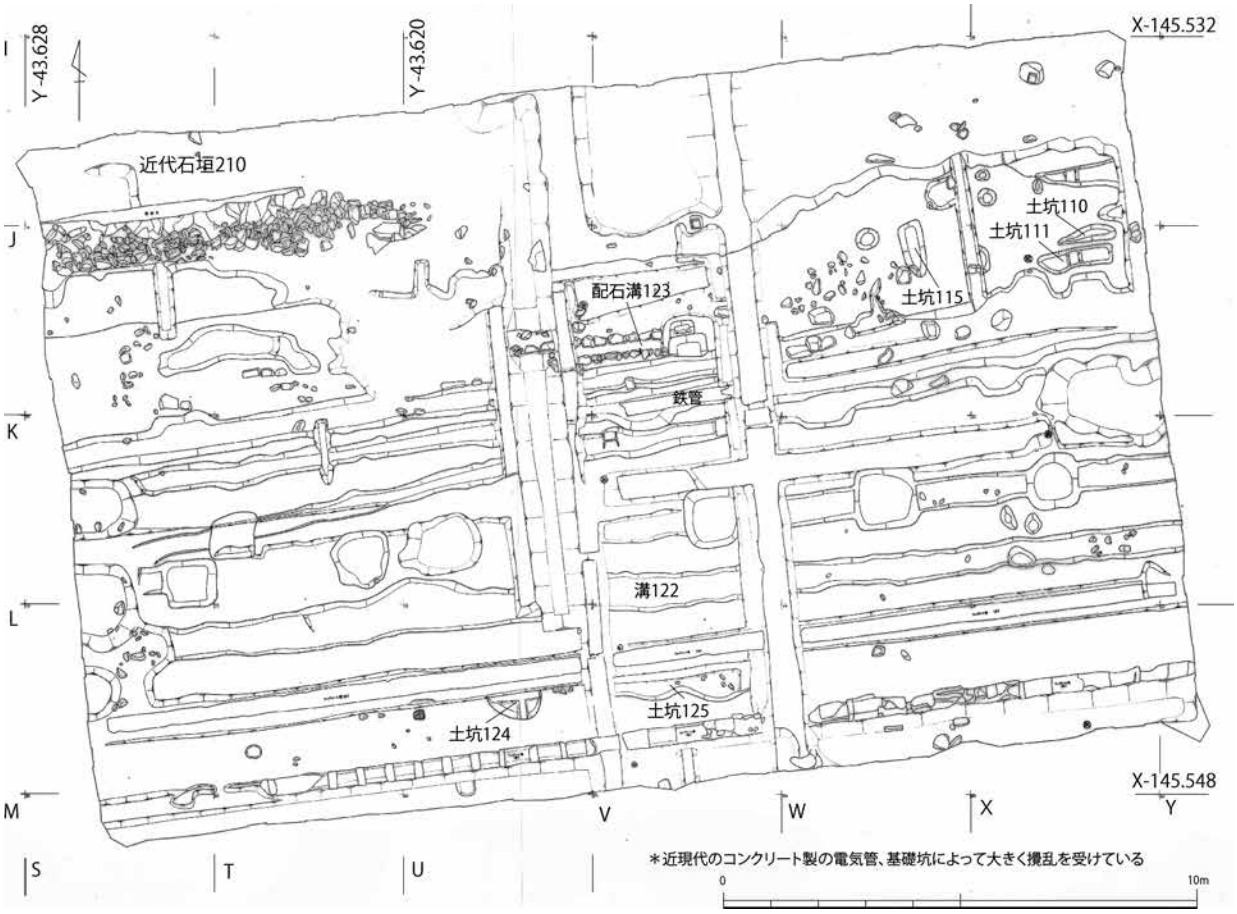


図 10　OSJ90-2 区　第 4 層上面遺構

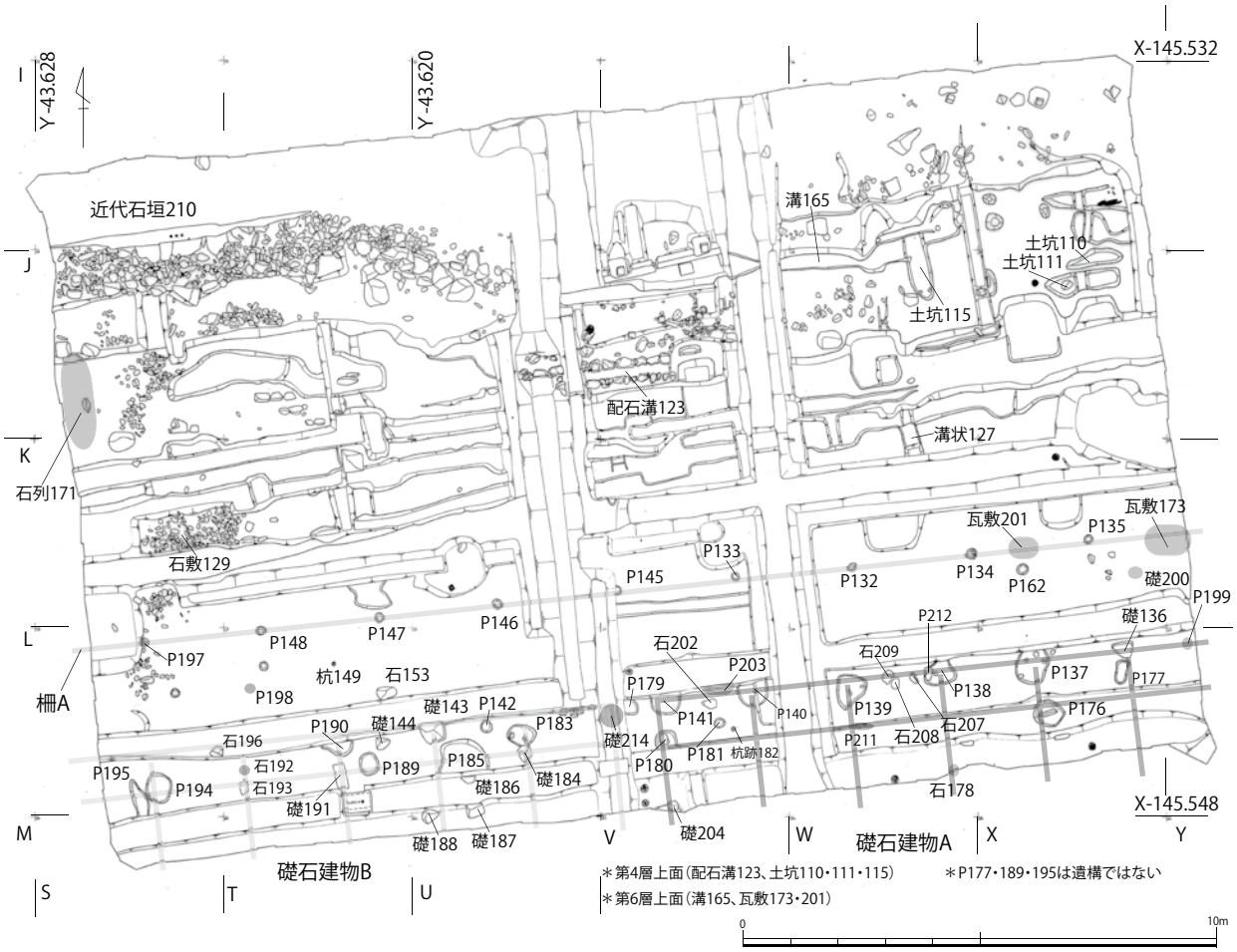


図 11　OSJ90-2 区　第 5 層上面遺構（一部、第 4 層および第 6 層上面の遺構も含む）

第４層：青灰～明褐色シルト層の整地層である。層厚約 10cm で、上位は厚さ 1cm 前後の白色砂層が覆う。上面の標高は T.P.4.7 ～ 4.78m。上面で溝 122、配石溝 123、土坑 110・111・115・124・125、中央部から北側は道路面（京街道）となっている（図 10）。層中より陶磁器、青磁、白磁、青白磁、青花、瀬戸美濃焼鉄釉碗、唐津焼、高取焼、志野焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質鍋･甕、瓦質火灯の蓋、染付、硯、銭貨、鉄釘、貝、瓦等が出土している。徳川期。

第５層：江戸時代初期の整地土（1620 年頃）である。層厚 10 ～ 50cm で、中央部から北半部についてはａ～ｄの４つに分けられ、いずれも上面に小礫が認められた。標高は T.P. 4.6 ～ 4.7m 前後である。上面で礎石建物 A・B、柵 A、溝状遺構 127、石列遺構 171、石敷遺構 129、礎石 144・186・187・200、ピット 142・162・179・181・189・199・203、石 153・178・196・198・202・207 ～ 209・212、杭跡 149・182、暗渠 174・175 を検出している（図 11、写真 24）。柵 A としたピット 132 ～ 135・145 ～ 148・197 は礎石建物 A（礎石 136・204、ピット 137 ～ 141・176・180・211）及び礎石建物 B（石 192・193、礎石 143・184・188・191・214、ピット 183・185・190・194）に伴う庇のピットと考えられる。礎石建物 A・B は、調査区北半部を東西に走る江戸時代の京街道に面した町屋等の建物跡の可能性が高いと考えられる（註２）。礎石建物 A・B は桁行６間以上（1 間は 2m 間隔）×梁間２間以上（1 間は 1m 前後）である。なお、庇のピットは第 5a 層上面で検出されたもので、主軸方位は N-83.8°-E である。７間以上（1 間はほぼ 2.5m 間隔）で、ピットの径は 16.3 ～ 21.7cm で、平均 18.5cm、深さは 10 ～ 38cm で、平均 26.5cm である。第 5c ～ d 層上面では石列遺構 171 を確認している。層中より陶磁器、青磁、白磁、青花、李朝、瀬戸美濃焼、唐津焼、高取焼、志野焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、染付、硯、砥石、フイゴの羽口、銭貨、鉄釘、サザエ貝、瓦等が出土している。徳川期。

第６層：黄褐～緑灰色粘土混じり砂質土で、層厚約 0.8 ～ 1.0 mをはかり、全体に柔らかく、締まりのない土で、ａ～ｅの５つに分けられる。調査区中央の上面の標高 T.P.+ 4.05 ～ 4.6 mで、北側に傾斜している。三ノ丸北辺部にある東隣接地の調査（OS83-15 次、OS87-93 次、OS88-78 次）から大坂夏ノ陣（1615 年）後の整地層と考えられている（註２・10）。上面で溝 165、瓦敷 173・201（砂利と同じ用途で敷いている）を検出している（図 11）。上面（写真 25）は、1 ～ 2㎜前後のにぶい黄色中粒砂～細粒砂層による礫敷き面（小さな瓦片も多く含む）となり、よく締まっている（京街道）。

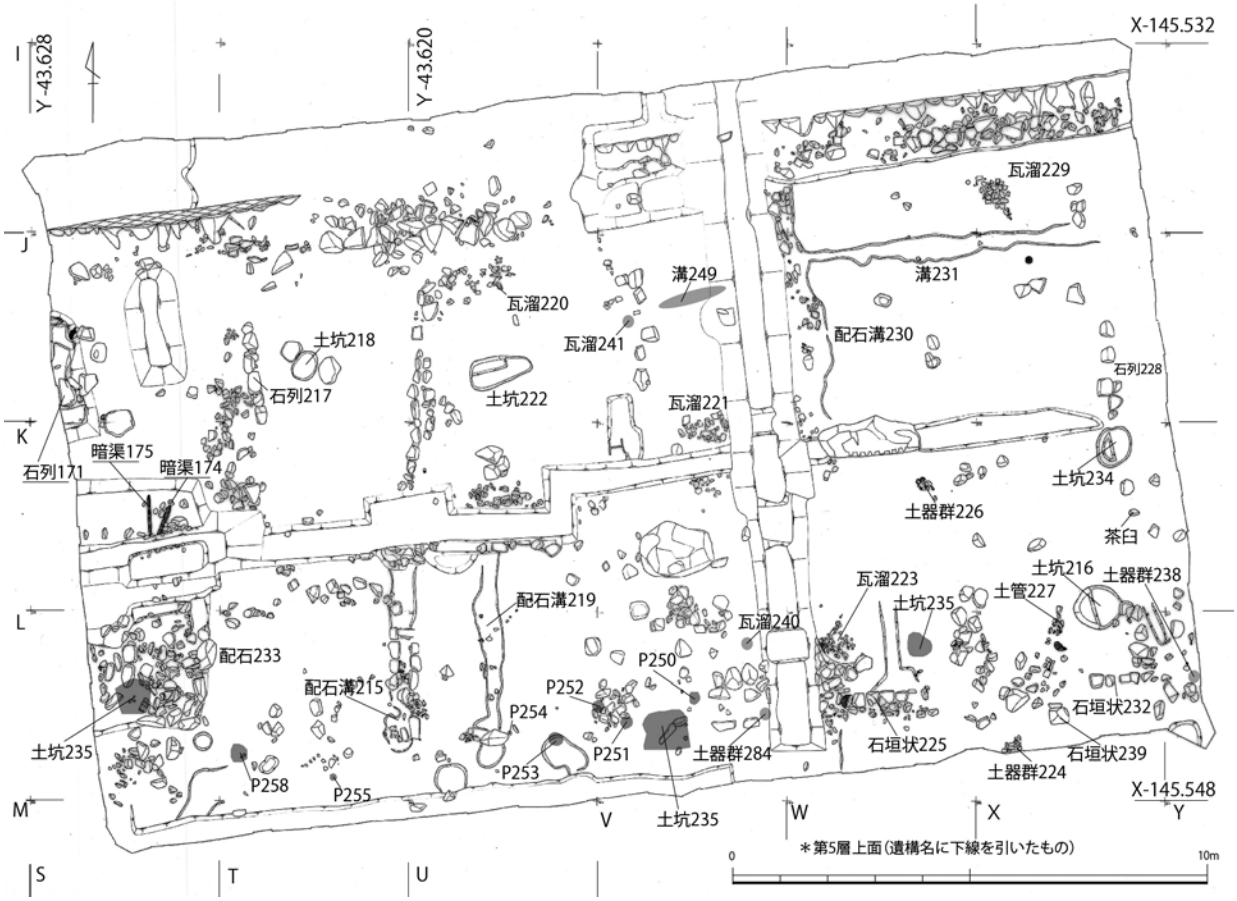


図 12　OSJ90-2 区　第７層上面遺構（一部、第５層上面の遺構も含む）

層中より青磁、白磁、青花、ベトナム陶器、李朝、瀬戸美濃焼（鉄釉天目碗・筒形碗）、唐津焼（瓶・碗）、志野焼（皿・向付）、織部焼、高取焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、焼塩壷、硯（「天正十九年」の紀年銘）、砥石、茶臼、石臼、金箔瓦等が出土している。下位にあたる第 6e 層は焼土層で、大坂夏ノ陣による焼土層と考えられ、層中より白磁、青花、ベトナム陶器、瀬戸美濃焼、唐津焼、志野焼、織部焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、漆器椀、硯、石臼、銭貨、金箔瓦、瓦等が出土している。豊臣後期。

第 7 層：緑灰～明褐色中粒砂で、層厚約 4 ～ 30cm で、上面は大坂夏ノ陣の被災面で、焼土層（第 6e 層）に覆われている。標高 T.P.+ 3.24 ～ 3.78 m で、北側に傾斜し、層中に破壊された三ノ丸石垣の石垣石や栗石を含む。OS88-78 次調査地の第 5 層に対応する。上面で、瓦・陶磁器が集中して出土している。第 7 層は大坂冬ノ陣（1615 年）後の整地層と考えられ、上面の遺構は大坂冬ノ陣の後に設けられた遺構で、配石溝 215・219・230（268）、土坑 216・218・222・234・235・256・257・260、石列 217・228、石垣状遺構 225・232・239、瓦溜 220・221・223・229・240・241、土器群 224・226・238・284、溝 231・249、配石 233（第 7 層中）、ピット 250 ～ 255・258、杭跡 262・293 を検出している（図 12・13、写真 26）。層中より白磁、青花、瀬戸美濃焼、唐津焼、絵志野、高取焼、織部焼、備前焼鉢、丹波焼、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、焼塩壷、下駄、漆器椀、硯、砥石、軽石、銭貨（永楽通宝）、鉄釘、鉄鎌、鉄鍋、銅製紅皿、木簡、下駄、瓦、金箔瓦などが出土している。LR 区の土坑 235 からは織部焼、志野焼も出土している。豊臣後期。

第 8 層：砂・シルトの互層で、層厚 22 ～ 35cm である。OS88-78 次調査地の第 6 層に対応し、三ノ丸石垣の北に堆積する。調査区の東側で、標高は T.P.+3.5 m、北及び西側で標高 T.P.+3.2 m前後をはかり、西および北に傾斜する。上面は道路面として利用され、大坂冬ノ陣の直前の遺構面に相当し、ピット 242 ～ 246・248・259・263・264・315 ～ 317、溝 247 を検出している（図 13）。直上には大坂冬の陣の講和によって破壊された三ノ丸石垣の盛土や石垣石や栗石が覆う。層中より白磁、青花、瀬戸美濃焼、唐津焼、高取焼、志野焼、備前焼、丹波焼擂鉢、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、銭貨、瓦等が出土している。豊臣後期。

第 9 層：暗青灰色シルト質砂層で、上下二層に分けられ、層厚は 10 ～ 30cm である。OS88-78 次調査地の第 6 層に対応する。上面の標高は T.P.2.8 ～ 3.3m

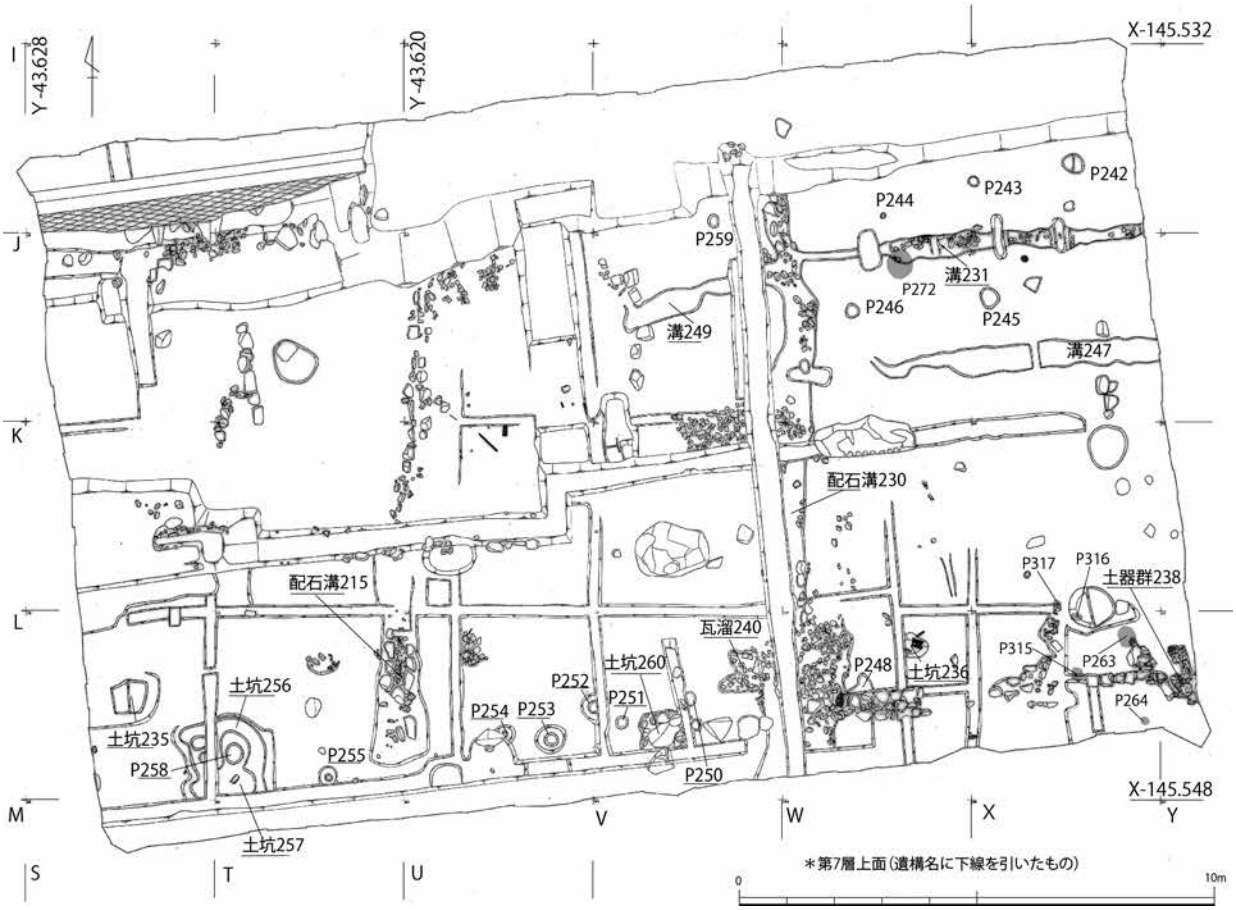


図 13 OSJ90-2 区 第 8 層上面遺構（一部、第 7 層上面の遺構も含む）

で、一部に礫敷きや瓦敷きの認められる箇所がみられた。三ノ丸石垣が築かれた後の整地土で、三ノ丸石垣の北に堆積し、上面で三ノ丸石垣に併行し、防御するような形で柱列（塀 1）やそれに伴う溝 276、堀状遺構 261（266）・269 を検出している（図 14・15、写真 27・28）。溝 276 は第 10 層上面で検出された塀 2 同様に塀 1 の雨落溝と考えられる。堀状遺構 261 から和泉砂岩の五輪塔片も出土している。層中より、青磁、白磁、青花、色絵、瑠璃釉、李朝、瀬戸美濃焼香炉、唐津焼、志野焼、軟質施釉陶器、漆器椀、木製蓋、木刀、物差し、下駄、土製円板、砥石、十能、犬形土製品、銭貨、瓦等が出土している。OSJ90-1 区のⅣ層に相当する。豊臣後期。

塀 1 の主軸方位は N-85.5° -E で、東側で L 字状に北側に屈折する。ピット 271・275・277・281 ～ 283・382・383・442・585・645 で構成され、ピット列の内側に溝 276（雨落溝）が巡り、外側に堀状遺構 261、溝 269 を設けている。ピットの径は 40 ～ 75cm で平均約 52cm、深さは 39 ～ 81cm で平均約 47cm をはかり、1 間は約 1.4m となっている。検出面の標高は残りの良いところで、T.P.+3.08m をはかる。溝 276、堀状遺構 261 は塀 1 に沿うような形で、東側で L 字状に北側へ折れ曲がる。溝 276 は幅 70cm、深さ 3cm をはかる。堀状遺構 261 は幅 6m 以上、深さ 0.7m をはかり、底の標高は T.P.2.26m である。堀内から木製品（蓋・折敷の底板）等が出土している。塀 1 は何らかの理由で、下層の塀 2 を豊臣後期の短い期間の間に主軸方位をより三ノ丸石垣に沿うように造り替えている。

第 10 層：緑灰色砂層（ブロック土混じり）で、層厚 10 ～ 38cm をはかる。三ノ丸の石垣構築のために盛土された整地土で、三ノ丸石垣の北側に堆積している。OS88-78 次調査地の第 7 層に対応する。上面の標高は T.P.2.98m ～ 3.19m で、礫敷き面が広がる。包含される遺物は相対的に少ない。上面で三ノ丸石垣にほぼ併行する形（三ノ丸石垣よりも昭和 3 年以前の寝屋川に沿うように主軸をやや北に振る）で、塀 2 やそれに伴う溝 285、そして石 448・449、ピット 278・648・649、溝 286・287 を検出している（図 15、写真 29・30）。溝 285 は塀 2 の雨落溝と考えられる。層中より、白磁、青花、中国陶器、李朝、瀬戸美濃焼（鉄釉天目碗・灰釉丸皿）、岸嶽系唐津焼皿、備前焼、丹波焼、土師質土器、瓦質土器、漆器椀、底板、下駄、砥石、石臼、銭貨、鉄釘等が出土している。OSJ90-1 区のⅣ-2・3 層に対応する。豊臣後期。

塀 2 の主軸方位は N-82° -E で第 9 層上面で検出した塀 1 同様に L 字状に 7 間以上（1 間はほぼ 1.9m 間隔）で、

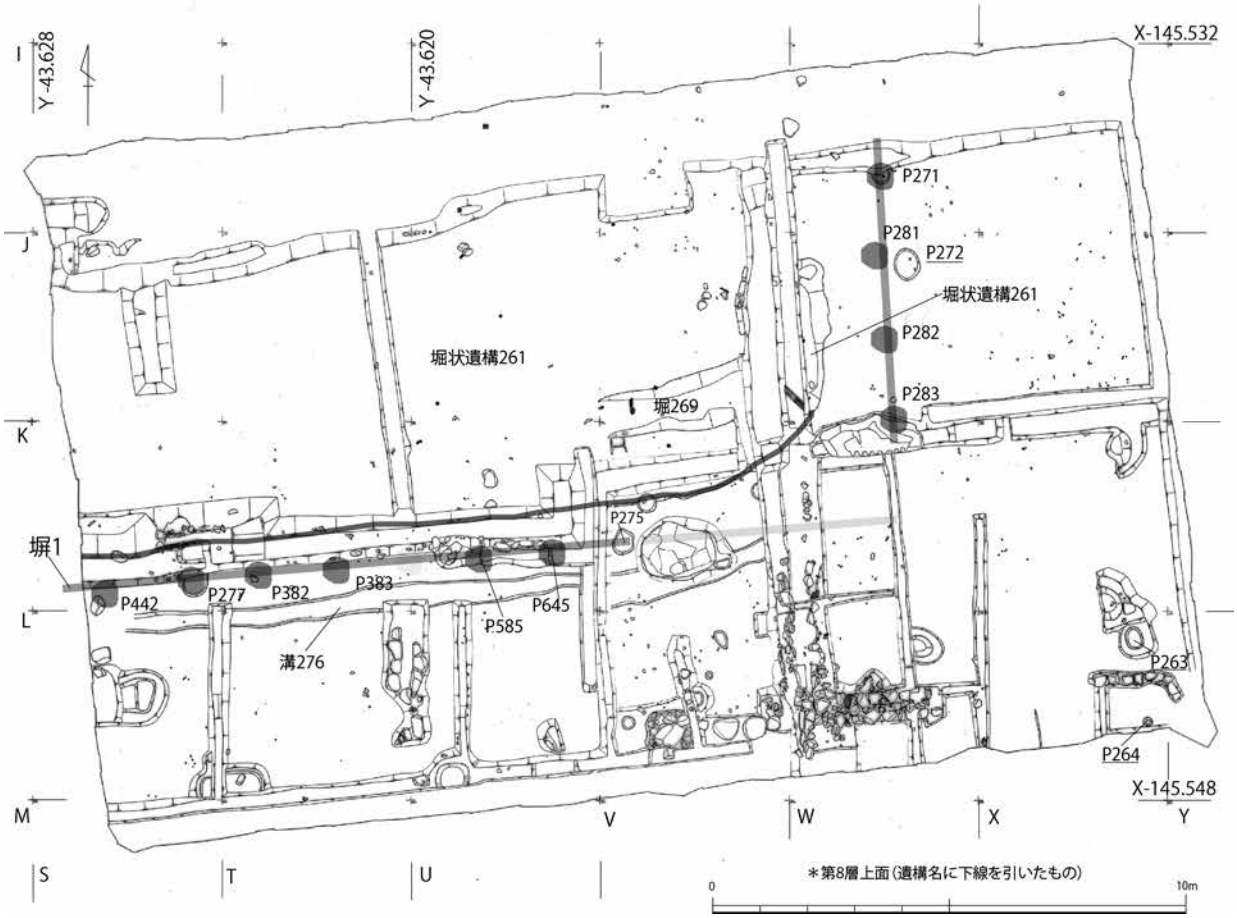


図 14 OSJ90-2 区 第 9 層上面遺構（一部、第 8 層上面の遺構も含む）

配置されている。ピット 297 ～ 299・310 ～ 313・384、溝 285 で構成され、ピット列の内側に溝 285（雨落ち溝）が巡っている。北西側のピット 297 ～ 299、そして溝 285 の北半は第 9 層上面で検出された堀状遺構 261 によって上面を削平されていた。ピットの径は 51 ～ 86cm で平均 73cm、深さは 57 ～ 97cm で平均 77.2cm をはかる。検出面の標高は残りの良いところで、標高 T.P.+2.9 ～ 3.0m をはかる。溝 285 は幅 31cm、深さ 24cm である。

第 11 層：青灰色シルト層で、層厚 5 ～ 10cm の薄い層である。三ノ丸の構築直前の整地層で、豊臣前期の屋敷地（建物群）を覆っている。OS88-78 次調査地の第 7a 層に対応する。上面の標高は T.P.+ 2.7 ～ 2.82m である。層中より青磁、白磁、青花、中国陶器、ベトナム陶器、李朝、瀬戸美濃焼、唐津焼、志野焼、軟質施釉陶器、備前、丹波、土師質土器、瓦質土器、弥生時代後期の甕底部片、漆器椀、木錘、碁石、砥石、茶臼、銭貨、鉄釘、瓦等が出土している。OSJ90-1 区のⅤ -1 層に相当する。豊臣後期。

第 12 層：青灰色ブロック土で、層厚 3 ～ 12cm の土層で、慶長元年（1596）の慶長伏見地震後の整地土と考えられる。層内や上面では礎石建物 1・2、瓦溜 294、土坑 295、礎石 439・451・600、ピット 373・380・386・474・623、杭跡 453 を検出している（図 15、写真 30）。層中より白磁、青花、中国陶器、李朝、瀬戸美濃焼、唐津焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、漆器椀、下駄、扇子、砥石、銭貨、小柄、鉄釘、火箸、小札、フイゴ羽口、貝、骨、瓦等が出土している。OSJ90-1 区のⅤ -2 層に相当する。豊臣前期。

調査区北東の IW 区で検出したピット 373 は径 40 × 32cm、深さ 25cm で、底に根石を据えており、布でその根石を覆っていた。

礎石建物 1（礎石 322 ～ 325・327 ～ 333・335・343 ～ 346・348・388 ～ 390・566、ピット 326・334・335、炉 338）は西側に集石遺構 340 ～ 342 を伴う 3 間× 5 間の建物で、内部に炉 388 を設けている。礎石の上面の標高は T.P.+2.64 ～ 3.01m。炉 338 は一辺 38cm の方形の粘土の枠で、枠の幅は約 5cm をはかり、内側に厚さ 6cm の炭灰が堆積していた（写真 31）。粘土の枠はもともと木の枠で、茶室の炉跡の可能性が考えられる。

礎石建物 2（礎石 319 ～ 321・350・352・353・358・377 ～ 379・606 ～ 608、ピット 351）の礎石の上面の標高は T.P.+2.46 ～ 3.0m。6 間× 3 間以上の長い建物と考えられる。

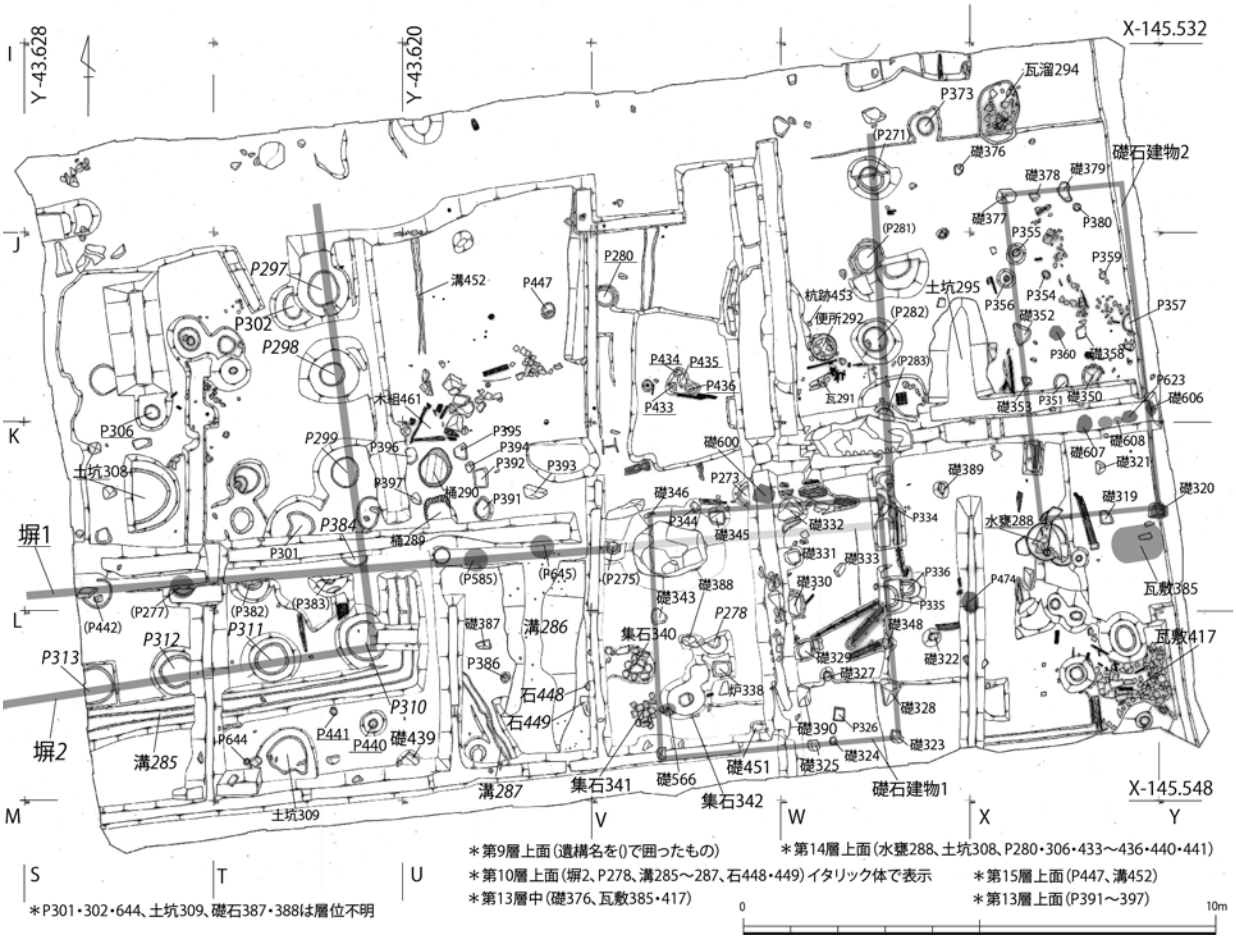


図 15 OSJ90-2 区 第 10・12 層上面遺構（一部、第 8・9・13 ～ 15 層上面の遺構も含む）

第 13 層：青灰色砂質シルト層～灰色炭混じり砂質土層。第 14 層同様に慶長元年（1596）の慶長伏見地震前の屋敷地と考えられる。上面で礎石 391 ～ 397（図 15）、層中で礎石建物 4、瓦溜め 385・417、礎石 370・374・376・577 を検出している（図 16、写真 32）。層中より陶磁器とともに青磁、白磁、青白磁、青花、色絵、李朝、瀬戸美濃焼（鉄釉ひだ皿・天目碗・折縁皿、灰釉折縁皿・丸皿）、唐津焼、志野焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器皿、瓦質土器、弥生時代前期壺片、弥生時代中期壺片、木製品（漆器椀、箒、羽子板、木製蓋、下駄、木簡、曲物底板、物差し、灯明皿受台、台鉋）、わらじ、硯、砥石、土錘、銭貨、火箸、鉄釘、鉄製鎌、小柄、小札、柄付き刀子、アワビ貝、瓦等が出土している。OSJ90-1 区のＶ - ３層に対応する。豊臣前期。

礎石建物 4 は 3 間× 4 間で、礎石 362 ～ 365・367 ～ 369・372・375（454）・381（455）・416・456・458・555 ～ 556、ピット 557 で構成され、礎石の上面の標高は T.P.+2.18 ～ 2.38m をはかる（写真 33）。

第 14 層：褐灰色～黄灰色砂層で、層厚 30 ～ 50cm で、a ～ c の 3 つに分けられる。上面の標高は T.P.+2.3 ～ 2.5m で、上面で伏見大地震以前に建てられた建物群（建物 3・5・6）、礎石 347・433 ～ 436・482 ～ 485・488・489・498 ～ 501・516・517・567・584・609・619 ～ 622、ピット 300・304・306・440・441・475 ～ 479・492・493・495・511 ～ 515・518・583・614 ～ 618・627・629・637 ～ 639・646、石 565、土坑 308・519、瓦敷 421、水甕 288、瓦燈 423、石臼 641 を検出している（図 16、写真 32）。生活時の堆積土を第 14a 層としている。層中より青磁、白磁、青花、色絵、李朝、瀬戸美濃焼（鉄釉天目碗・徳利、灰釉丸皿）、唐津焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器皿、瓦質土器擂鉢、漆器椀、灯明皿受台、下駄、柄杓、羽子板、硯、碁石、砥石、犬形土製品、瓦灯、銭貨、火箸、鉄釘、鉄製鋤先、鉄鎌、鉄鍋、刀子、小柄、貝、サカナ、イノシシの骨、瓦等が出土している。OSJ90-1 区のＶ - ４層に対応する。豊臣前期。

礎石建物 3（礎石 414・415、ピット 410 ～ 413）の礎石の上面の標高は T.P.+2.5m で、ピット 407 ～ 415 は礎石抜き取り跡である。

礎石建物 5（礎石 459・460・466 ～ 468・480・481・490・491・494・496・497・560・625・626・632・636）の礎石の上面の標高は T.P.+2.32 ～ 2.64m。瓦溜め 385・417 は土間で、水甕 288（写真 33）、瓦燈 423 と同様に礎石建物 5 に伴う可能性も

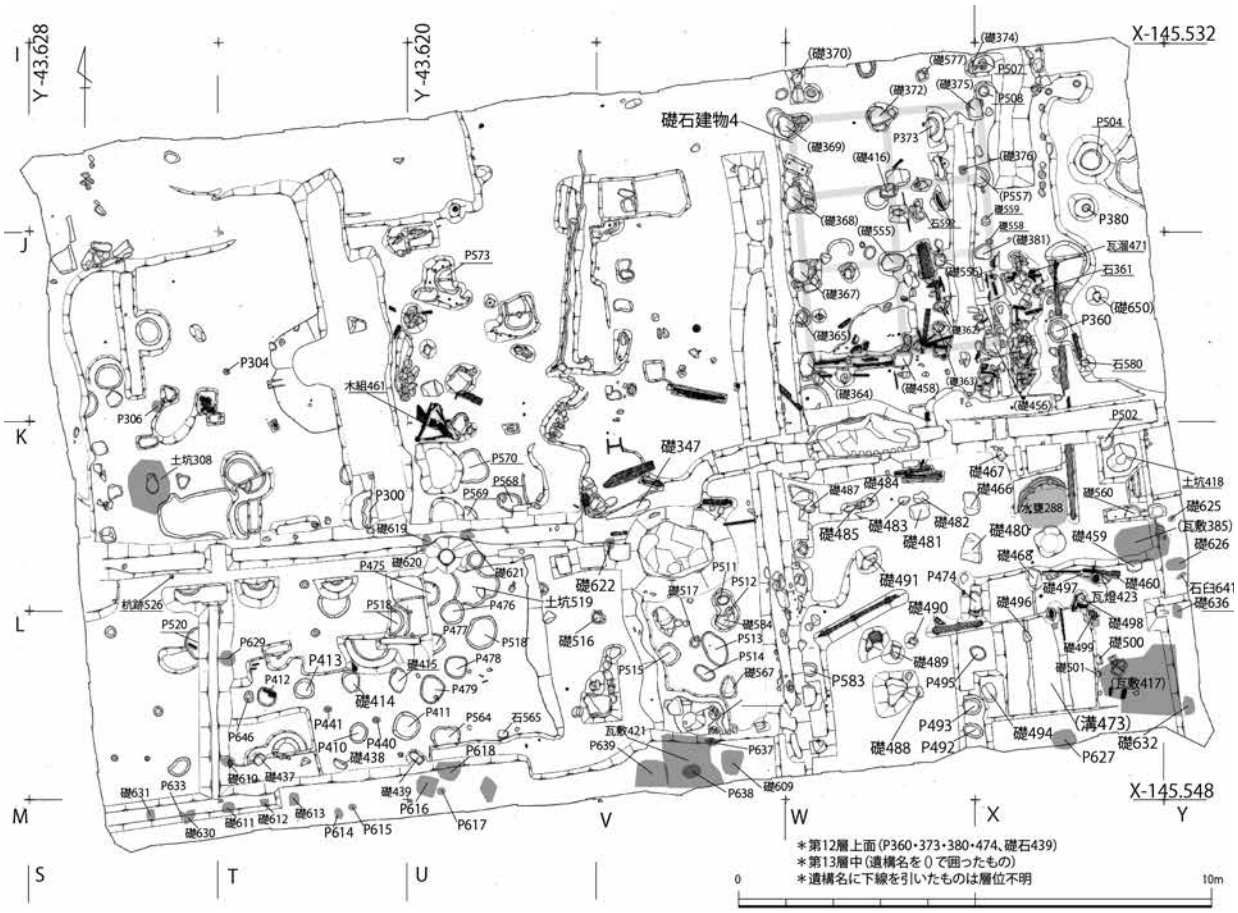


図 16 OSJ90-2 区 第 13・14 層上面遺構（一部、第 12 層上面の遺構も含む）

考えられる。礎石 626 には径 13.6 × 11.6cm、高さ 12.9cm の柱根が遺存しており、上部に 5 × 9cm、高さ 3cm のほぞが認められた。

礎石建物 6（礎石 437・438・610 ～ 613・630・631、ピット 633）の礎石の上面の標高は T.P.+2.45 ～ 2.66m で、ピット 614・615・633 は礎石抜き取り跡である（写真 34）。

第 15 層：上面の標高 T.P.+1.7 ～ 2.21m をはかり、西および北へ傾斜する。上面で礎石建物 7・8、集石 422、土坑 420・530・596、礎石 462 ～ 464、石 531 ～ 538・549・551・561 ～ 563・572、ピット 303・305・307・443 ～ 445・447・503・505・506・521 ～ 525・527 ～ 529・540 ～ 543・552 ～ 554・575・576・578・586・635、溝 452 を検出している（図 17、写真 32）。層中より青花、李朝、瀬戸美濃焼、備前焼、土師質土器皿、瓦質土器、漆器椀、草鞋、下駄、曲物底板、砥石、石臼、銭貨、鉄釘、貝、瓦等が出土している。OSJ90-1 区のⅤ -5 層に対応する。豊臣前期。

礎石建物 7（礎石 398 ～ 406）は 3 間× 2 間で、礎石の上面の標高は T.P.+1.93 ～ 2.14m（写真 35）。集石 422、土坑 530 は礎石建物 7 に伴う遺構の可能性が考えられる（写真 36）。なお、集石 422 の南に接して木枠に囲まれた状態で、二枚貝 3 点（標高 1.874 ～ 1.99m）が出土している（写真 37）。

礎石建物 8（礎石 509・510・539・544・545 ～ 548・590・591・593・594・605・640、ピット 595・597 ～ 599・604）は 3 間× 5 間で、礎石の上面の標高は T.P.+1.98 ～ 2.09m（写真 33 の下）。ピット 595・597 ～ 599・604 は礎石抜き取り跡である。礎石 640 には径 10.5 × 13cm の柱根が遺存しており、上部で横木に組み合わさっていた（写真 38）。

土坑 420 は径 2.5m、深さ 0.44m をはかる大型の土坑で、埋土から土師質土器、漆碗、曲物の底板、瓦、骨片が出土している（写真 39）。

第 16 層：北西の JT・JS 区に設定した下層確認トレンチにおいて、標高 T.P.+ 1.42 m で礎石 571、標高 T.P.+ 1.215 m で礎石 643 を検出した（図 17）。層中より土師質土器、瓦等が出土している。大坂本願寺期の焼土層は確認していないが、隣接する調査地の調査成果から大坂本願寺期の層位と想定される。OSJ90-1 区のⅥ層に対応する。大坂本願寺期。

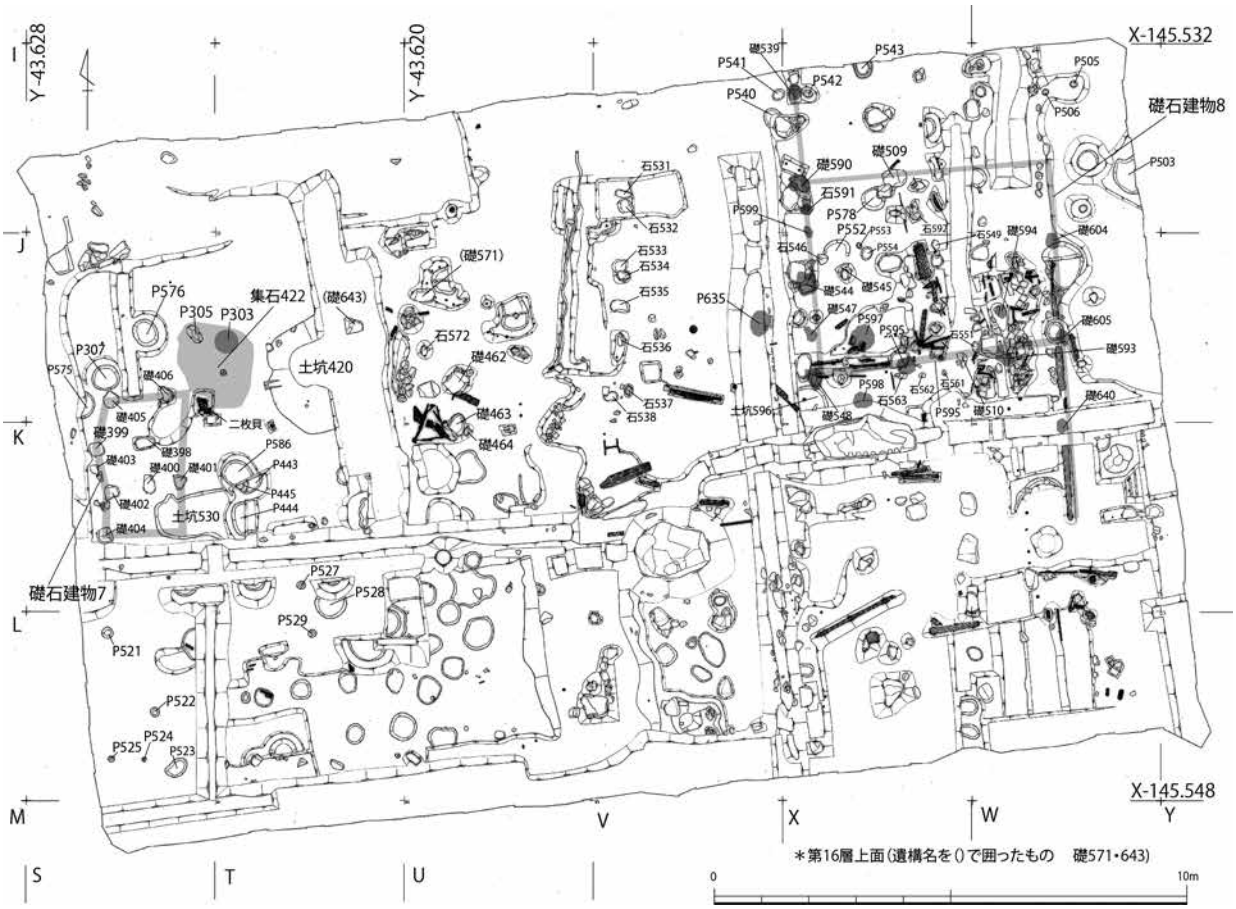


図 17 OSJ90-2 区 第 15 層上面遺構（一部、第 16 層上面の遺構も含む）

3. OSJ90-1・2 区の出土遺物（写真 41 ～ 58）

出土遺物のうち主だったものを 45 ～ 61 ページの写真にまとめた。11、15、21、26、29、31、68 ～ 70、74 ～ 76、79 ～ 81、84、88、91、93 ～ 95、98 ～ 105、108、110、113、115 ～ 117、119、123、124、128 は OSJ90-1 区、1 ～ 10、12 ～ 14、16 ～ 20、22 ～ 25、27、28、30、32 ～ 67、71 ～ 73、77、78、82、83、85 ～ 87、89、90、92、96、97、106、107、109、111、112、114、118、120 ～ 122、125 ～ 127、129 は OSJ90-2 区から出土した。1 ～ 68 の土器・陶磁器類の詳細は表 1 の観察表にまとめたので参照されたい。なかでも 42 の備前焼甕は口径 69cm、器高 106cm をはかる大甕で、肩部に「参石入　捻土也」の刻銘がある。27 の瓦燈（瓦灯）は灯明皿を載せる台に、釣鐘型の蓋をかぶせる瓦質の灯火器で、27 は台の部分である。

69、70 は骨角製品で、69 は鹿角、70 は獣骨でつくられている。切断された痕跡など加工跡があり、製品をめざしていたことはわかるが、用途は判然としない。

71 は土製のフイゴの羽口で、第 12 層（慶長元年（1596）の整地土）から出土した。先端側の径は 3.0cm で残存長が 3.9cm を測る。72 は径 3.3cm、全長 3.9cm の筒形をした土錘で第 13 層（慶長伏見地震前の屋敷地、Ⅴ - 3 層に対応）から、73 の瓦質の円板は第 9 層（三ノ丸石垣築造による盛土及び整地層、Ⅳ層に対応）から出土した。

74、75 は犬形の土製品で、74 はⅤ -1 層、75 はⅣ -5 層から出土した。74 は全長 4.4cm、75 は全長 4.9cm を測る。76、77 は碁石で、76 は大きさ 27.85 × 23.7mm、厚さ 8.9mm でⅥ層から出土、77 は大きさ 29.5 × 23.25mm、厚さ 6.8mm を計り、第 11 層（Ⅴ -1 層対応）から出土した。78 は植物繊維を縄で縛った箒のような製品で第 12 ～ 13 層から出土、79 はⅥ層上面の溝状遺構 16 から出土した縄、80 は埋甕 18 から出土した木綿の布である。

81 は石臼で建物礎石として転用されていた（礎石 6）。このほかに 82 ～ 85 も石臼で、86 は茶臼で、85、86 は石垣状遺構 225 に転用されていた。87 は五輪塔の一部で堀状遺構 261 から出土した。

大坂夏ノ陣後の整地層（第 6 層、Ⅲ層対応）及び大坂冬ノ陣後の整地層（第 7 層、Ⅳ層対応）からは硯が多く出土している。88 は大坂本願寺期の焼土層（Ⅳ -1 層）から出土した硯で、焼けによる変質がみとめられる。89、90 は第 7 層から、91 は OSJ90-1 区排水溝 2 から出土した。92 は「天正十九年」の銘入りで、被熱している。第 6 層から出土した。88 及び 90 ～ 92 は頁岩製である。

93 は側板直下の溝状遺構 15（Ⅵ -2 層上面）から出土した完形の隅瓦である。94 ～ 97 はすべて金箔押軒丸瓦で、94 は残存幅 8cm で OSJ90-1 区排水溝 1 から、95 は残存幅 9cm で三ノ丸石垣施工面のⅣ - 5 層から、96 は残存幅 9.5cm で第 6 層から、97 は残存幅 11.8m で第 7 層から出土した。

98 ～ 105 は銅銭（銅銭群 5）で、93 の隅瓦と同じ溝状遺構 15 から 18 枚がまとまって出土した。その中には、洪武通寶がもっとも多く 9 枚あり、その他にも、景徳元寶、祥符元寶、天禧通寶などの明銭・宋銭が含まれる。106 ～ 110 は鉄製品で、106 は鋤先、107 ～ 109 は鎌先、110 は包丁である。106 及び 109 は 14 層（豊臣前期、Ⅴ - 4 層対応）から 107 は第 13 層（Ⅴ -3 層に対応）から、108 及び 110 はⅣ - 1 層から出土した。このほかにも本調査では、台鉋や鋸、錐などの大工道具類や毛抜き、切羽、小札、小柄、鋏、鍋、釘、針、火箸など、多くの鉄製品や笄、紅皿などの銅製品が出土している。

荷札と思われる上部に切り込みのある木簡も多数出土している（111 ～ 117）。111 は第 13 層から出土し、長さ 17.41cm、最大幅 2.7cm、厚さ 0.56cm を測る。112 は両面に文字が見える。同じく第 13 層から出土し、18.84cm、最大幅 3.1cm、厚さ 0.52cm を測る。113 にも両面に文字が残る。Ⅴ - 1 層から出土し、17.9cm、最大幅 2.2cm、厚さ 0.50cm を測る。114 は片側が欠損しており、長さ 11.92cm、残存最大幅 1.24cm、厚さ 0.2cm を測る。第 7 層から出土した。115 は片側が欠損した上部のみの木簡で、文字は見えるが判読できない。残存長 4.53cm、残存幅 1.48cm、厚さ 0.3cm を測り、Ⅳ - 5 層から出土した。○で囲まれた「高山」の文字が見える。116 は下部の破片で、Ⅴ - 3 層相当面で検出された土坑 4 から出土した。117 も同じ土坑 4 から出土した木簡で、「十一月十日」と日付が書かれている。裏面には「油五斗の□□□□」と品物と分量がはっきり書かれている。長さ 14.82cm、最大幅 2.03cm、厚さ 0.40cm を測る。

118 ～ 123 は残存状態が極めてよい漆塗の木製椀である。118 は黒漆で塗られ、内外面ともに朱で植物の絵が描かれている。底部に直径 5.7cm、高さ 1.4cm の高台が付き、厚さは 0.5cm を測る。第 9 層から出土した。119 は内面が黒漆の上に赤漆で塗られ、外面が黒漆の上に赤漆で模様が描かれた椀。底部の高台の内側に「上」のような記号が書かれている。高台径 7.8cm、器高 5.2cm を測り、OSJ90-1 区排水溝 1 から出土した。120 は内面が黒漆の上に赤漆、外面が黒漆で塗られ、高台径 6.5cm、器高 4.6cm を測る。第 14 層上面から出土した。121 は内面が黒漆の上か

ら茶漆で塗られ、外面が黒漆で塗られた上に赤漆で模様が描かれている。第13層から出土したもので、外側の高さ3cm、直径7.8cmと高い高台をもつ。122は内面が赤漆、外面が黒漆で塗られた椀で、高台の高さが外側で2.4cm、器高9.0cmと背の高い椀である。厚みは0.8cmを測る。第12層上面から出土した。123は内外面ともに黒漆塗の椀で、内部が鉄分を帯びて赤茶色に変色している。底部の高台径は7.5cmを測る破片で、Ⅵ-2層から出土した。

124、125はともに完形の木製下駄である。124は116の木簡と同じ土坑4から出土し、全長21.2cmを測る。125は、全長19.7cm、幅9.5cm、で第10層（三ノ丸石垣構築のための整地層）から出土した。このほかにも本調査では、破風、曲物底板、羽子板、柄杓、しゃもじ、傘の軸、将棋の駒、物差し、木刀、栓、櫛、箸、扇子、木錘、灯明皿受け台、木製蓋などの木製品が出土している。

この調査では動物遺体も出土している。126、127の貝は、アカニシ（*Rapana venosa*）と呼ばれる海水に生息する巻貝の一種で食用に適する。128はⅤ-1層から出土したニホンジカの上肢骨で、写真33の上段左から上腕骨、尺骨、橈骨である。129はアカガイ（*Anadara broughtonii*）で、大きさは8～9cm程度、第15層上面で検出した集石422から出土した（写真38）。内湾の潮間帯や浅海の砂泥底に浅く潜って生息する二枚貝の一種で、こちらも食用に適する。

まとめ

大坂本願寺期

・OSJ90-1区ではⅥ-2層上面でピット群、土坑、埋甕、礎石、落込み、溝状遺構を検出している。大坂本願寺消失時の焼土層（Ⅵ-1層）や整地層（Ⅵ-2～3層）からは陶磁器や鉄製品（鎌、鋸、切羽、飾り金具、毛抜き、銭貨）、木綿などの生活用具が出土した。

豊臣前期

・隣接する調査地（第1次調査区OSJ89区）で検出された道路側溝をともなう屋敷地（OSJ90-1区Ⅴ-2～4層上面、OSJ90-2区第12層～第14層上面）や道路側溝をともなう屋敷地が整備される以前の土坑・礎石建物・柱穴遺構（OSJ90-1区Ⅵ-1層上Ⅴ-5層上面、OSJ90-2区第15層上面）を検出している。

豊臣後期

・慶長4年（1599）に三ノ丸築造工事によって築かれた三ノ丸石垣を東西約21mにわたって検出している。また、三ノ丸石垣構築に伴う盛土および整地土（OSJ90-1区Ⅳ層・Ⅴ-1層、OSJ90-2区第10・11層）や三ノ丸石垣に併行する形で、その前面に新旧2時期（第9層及び第10層上面）の柱列と堀を検出している。柱列のすぐ南側には雨落溝と考えられる小溝を伴うことや堀に落ち込んだ瓦や漆喰等から塀と考えられ、三ノ丸の石垣の北側を塀がめぐる二重の構造を示すことが明らかとなった。またいずれの塀も東側で折れ曲がり北に延びていることから、この地点が三ノ丸内への進入路と推定している。

・第8層上面は大坂冬ノ陣直前の面で、第8層を覆う第7層中には、破壊された三ノ丸石垣の石垣石や陶磁器が出土した。第7層上面を覆う焼土層（第6e層）は、大阪市文化財協会による隣接地の調査成果などから、慶長20年（1615）の大坂夏ノ陣で被災した地面と考えられる。

・慶長4年（1599）に築造された三ノ丸石垣が、慶長19年（1614）の冬ノ陣後に破却されるまでの変遷については、以下のように推定することができる。三ノ丸築造のため、豊臣前期の屋敷地を破却し、その跡地を覆うようにⅤ-1層（第11層）で整地する。次に表面を固く叩き締め、施工面（Ⅳ-5層）とし、幅約3m、深さ約0.65mの掘方（Ⅳ-4層）を掘削し、石垣の根石2～3段分を据える。南側については順次石垣石を積みながら栗石（Ⅳ-1層）、裏込土（Ⅳ-2・3層）を積み上げ、石垣の北側についても盛土（第10層）を行い、三ノ丸石垣を完成させる。その後、三ノ丸石垣の北側にさらなる防御施設として第10層上面に塀2を設ける。その後、第9層によって整地され、その上面に、塀2の代わりに塀1と堀をもうけ、石垣の北側に接して石垣の裾の排水を目的とした配石溝を巡らす。その後、塀を壊して更地（第8層で整地）とし、慶長19年（1614）の冬ノ陣後に破壊される。

徳川初期

・盛土（第5層）が行われ、第5層上面では庇を伴う礎石建物やその北側に玉砂利を敷きつめた道路遺構（京街道）を検出している。

・江戸時代から昭和初期には、OSJ90-2区の北側において重層して堆積する道路跡（京街道）、昭和初期の区画整理が行われるまで調査地の北端に見られた間知積みの石垣（大正時代までさかのぼる可能性）と寝屋川の河川敷跡などを検出した（第2～4層）。

（中西裕見子、宮崎泰史（元大阪府教育委員会））

表1　資料一覧

写真	no.	遺物の種類	遺構・層位	調査	地区	登録番号	口径（底径）	高さ	
41	1	土師質皿	第 13 層	90- 2	A04JU	2858	12.1cm	2cm	
41	2	土師質皿	桶 290	90- 2	A04KU	2503	6.7cm	1.8cm	図 15（豊臣前期相当）
41	3	土師質皿	第 14 層	90- 2	A04LV	3333	7.7cm	1.7cm	
41	4	土師質皿	土坑 418	90- 2	A04KX	3400	10cm	2.05cm	図 16（豊臣前期相当）
41	5	土師質杯	第 14a 層	90- 2	A04LT	3499	7.9cm	2.6cm	黒褐色砂質シルト
41	6	土師質皿	土坑 418	90- 2	A04KX	3091	10.15cm	2.2cm	図 16（豊臣前期相当）
41	7	土師質皿	堀状遺構 261 最下層（暗灰色砂質シルト）	90- 2	A04JU	1999	12.15cm	2.1cm	図 14（豊臣後期）
41	8	土師質皿	第９層 (砂質シルト）	90- 2	A04 JU	1885	13.8cm	2.4cm	
41	9	瀬戸美濃焼	第 11 ～ 13 層（表採・廃土）	90- 2	廃土	2474	8.4cm	2.2cm	
41	10	瀬戸美濃焼	第 14 層	90- 2	A04LW	2873	10.2cm	3cm	
41	11	瀬戸美濃焼	Ⅳ -1 層	90- 1	A04PP	3329	9.3cm	2.3cm	南あぜ
41	12	瀬戸美濃焼	第 13 層下位	90- 2	A04MT	3400	11.6cm	2.35cm	暗灰色シルト質粘土、あぜ 22
42	13	瀬戸美濃焼	第 14a 層	90- 2	A04MS ？	3549	7cm	3.5cm	
42	14	瀬戸美濃焼	第 15 層	90- 2	A04JX	3550	6.2cm	3cm	
42	15	瀬戸美濃焼丸碗	排水溝 1	90- 1	A04 PN	2673	11.5cm	6.25cm	図 7（豊臣前期）　丸椀
42	16	唐津焼	第９層（暗灰色砂質シルト）	90- 2	A04JV	1900	10.4cm	5.9cm	
42	17	瀬戸美濃焼	第７層	90- 2	A04LV	1324	上 3.5cm、下 6.2cm	10.3cm	織部元屋敷茶入れ
42	18	瀬戸美濃焼	第 13 層	90- 2	―	3551	10.2cm	1.4cm	
42	19	瀬戸美濃焼	第 11 ～ 12 層	90- 2	A04LU	3370	-	-	あぜ 22、墨書（十二・・・？）
43	20	備前焼 水滴	瓦敷 417	90- 2					図 15（豊臣前期）
43	21	備前焼	排水溝 1	90- 1					図 7（豊臣前期）
43	22	織部焼	土坑 235	90- 2	A04 LS	1471	-	-	図 13（豊臣後期）方形の１角部分
43	23	軟質施釉薬陶器	第 11 層	90- 2	A04 JX	2254・2679			
43	24	絵志野焼	第７層（６d 層下）	90- 2	A04LV	1023			
43	25	絵唐津焼	第７層	90- 2					
44	26	瓦質土器甕	埋甕 18	90- 1	A04 OP	3309	36cm	-	図 8（大坂本願寺期）
44	27	瓦質土器 瓦燈	瓦燈 423	90- 2	A04 KX	3123	14.3cm	18.1cm	図 16（豊臣前期）
44	28	土師質土器	便所 292	90- 2	A04 JW	2867			図 15（豊臣前期）　湊焼
44	29	備前焼 擂鉢	Ⅳ - １層	90- 1	A04 PP	2217	24.3cm	9.5cm	
44	30	備前焼 擂鉢	第 14 層	90- 2	A04 JX	3239	27cm	10.5cm	
44	31	備前焼 擂鉢	Ⅳ -2 層もしくは落込７	90- 1	A04ON	3134	32cm	14.4cm	
45	32	李朝陶磁器	第 6c・d 層	90- 2	A04LW	997			
45	33	李朝陶磁器	第９層及び堀状遺構 261	90- 2	A04JS	2999			口縁部破片
45	34	李朝陶磁器	第９層	90- 2	A04JT	2113			口縁部破片
45	35	李朝陶磁器	第９層	90- 2	A04KT	1806			口縁部破片
45	36	李朝陶磁器	第６b 層	90- 2	A04KW	949			
45	37	李朝陶磁器	第９層	90- 2	A04KU	1826			高台
45	38	李朝陶磁器	第６b 層	90- 2	A04KX	931			高台
45	39	李朝陶磁器	第 13 層	90- 2	A04LW	2856	16.6cm(6.0cm)	4.15cm	
45	40	李朝陶磁器	第 13 層	90- 2	A04LU	3320			高台
45	41	李朝陶磁器	第５層	90- 2	A04KT	643			徳川初期　高台
46	42	備前焼大甕	水甕 288	90- 2	A04 KX	2729			図 15（豊臣前期）、写真 34
47	42	備前焼大甕	水甕 288	90- 2	A04KX	2729			「参石入　捻土也」（拡大）
47	43	色絵	第９層下	90- 2	A04 JU	1901			豊臣後期　高台
47	44	色絵	第９層	90- 2	A04 LV	1884			高台
47	45	色絵	第 13 ～ 14 層	90- 2	A04 LX	2921			
47	46	色絵	第９層	90- 2	A04 LU	1903			
47	47	色絵	第 14 層	90- 2	A04 LW	3529			
47	48	色絵	第９層	90- 2	A04 JT の東	1864			
47	49	色絵 瑠璃釉	第９層	90- 2	A04 JT	1968			コバルトブルー
47	50	白磁	第 14 層上面	90- 2	A04 KX	3309	13.1cm	2.9cm	
47	51	白磁	第 14 層上面	90- 2	A04 LW	3279	10.4cm	2.3cm	高台　底部無釉
47	52	白磁	第 14 層	90- 2	A04 KW	3173			
47	53	白磁	第 14 層	90- 2	A04 KW	3013			高台無釉？
47	54	青花	第 13 層	90- 2	A04FW	2735			口縁部
47	55	青花	第 13 層	90- 2	A04 JU	2820			口縁から高台まで。
47	56	青花	第 13 層下位	90- 2	A04 MT	3400	11.66cm		口縁から高台まで。あぜ 22
47	57	青花	第 13 ～ 14 層	90- 2	A04 KW	2780			
47	58	青花	第 13 層	90- 2	A04MT	3400			口縁部
47	59	青花	第 13 層	90- 2	A04KW	3322			口縁部
47	60	青花	第 13 層	90- 2	A04JX	3152			口縁部
47	61	青花	第 13 層下位	90- 2	A04MT	3400			口縁から高台まで
47	62	青花	第 13 層	90- 2	A04JU	3156			高台
47	63	青花	第 13 層	90- 2	A04LW	3323			
48	64	李朝徳利	第 13 層	90- 2	A04KU	3439	4.1cm	7.1cm	内面にも釉薬
48	65	信楽擂鉢	第 12 層	90- 2	A04KU	3363			
48	66	中国陶器	第９層	90- 2	A04KS	1953	23.9cm		褐釉？　口縁部
48	67	瀬戸美濃焼	第９層	90- 2	A04JT	1968	7.6cm		口縁から高台
48	68	華南三彩	排水溝２	90- 1	A04PL	1781			図 7（豊臣前期）　口縁部黄色、体～底部緑
48	69	鹿角製品	溝状遺構 15	90- 1	A04OM	2668			図 8（大坂本願寺期）
48	70	骨角製品	V- ３層	90- 1	A04 PM	2340			
48	71	フイゴの羽口	第 12 層	90- 2	A04LV	3415	3cm	3.9cm	あぜ 22
48	72	土錘	第 13 層	90- 2	A04JX・IX	2932	3.2cm	3.9cm	東側あぜ
48	73	土製円板（瓦質）	第９層（植物層）	90- 2	A04JT	1968	5.6~5.8cm		瓦を円板にする
49	74	犬形土製品	Ⅴ -1 層	90- 1	A04OM	1266	4.4cm		
49	75	犬形土製品	Ⅳ -5 層	90- 1	A04OP	494	4.9cm		
49	76	碁石	Ⅵ -1 層	90- 1	A04PO	2712	27.85 × 23.7mm	8.9mm	
49	77	碁石	第 11 層	90- 2	A04KW	2391	29.5 × 23.25mm	6.8mm	
49	78	箒	第 12 ～ 13 層	90- 2		2683			
49	79	縄	溝状遺構 16	90- 1	A04PL	3169			図 8（大坂本願寺期）　南あぜ
49	80	木綿布	埋甕 18	90- 1	A04OP	2743			図 8（大坂本願寺期）
50	81	石臼（上）	礎石６	90- 1	A04OO	3162			図 7（大坂本願寺期）　花崗岩
50	82	石臼（上）	第 10 層	90- 2	A04LW	2551			あぜ 20

50	82	石臼（上）	第 10 層	90- 2	A04LW	2551			あぜ 20
50	83	石臼		90- 2	A04LW				
50	84	石臼（下）	礎石 7	90- 1	A04OM	2674			図 7（大坂本願寺期）
50	85	石臼	石垣状遺構 225	90- 2	A04LW	2221			図 12（豊臣後期）
50	86	茶臼（下）	石垣状遺構 225	90- 2	A04LW	2588			図 12（豊臣後期）
50	87	五輪塔	堀状遺構 261	90- 2	A04KU	2050			図 12（豊臣後期）　和泉砂岩、金箔で梵字、T.P. ＋ 2.675m
51	88	硯	Ⅵ－１層	90- 1	A04OQ	3244			東あぜ、頁岩
51	89	硯	第７ｂ層	90- 2	A04LW	1511			T.P. ＋ 3.62m
51	90	硯	第７層	90- 2	A04KW	1589			頁岩
51	91	硯	排水溝２	90- 1	A04NL	2656			図 7（豊臣前期）　T.P. ＋ 1.51m、頁岩
51	92	硯	第６層	90- 2	A04LW	989			頁岩、被熱、「天正 19 年」
52	93	隅瓦	溝状遺構 15	90- 1	A04OM	3232			図 8（大坂本願寺期）
53	94	金箔押軒丸瓦	排水溝１　下層	90- 1	A04PN	3136	残幅 8.0cm		図 7（豊臣前期）、南あぜ
53	95	金箔押軒丸瓦	Ⅳ - ５層	90- 1	A04OL	588	残幅 9cm		T.P. ＋ 2.833m
53	96	金箔押軒丸瓦	第６ｂ層	90- 2	A04LV	1020	残 9.5cm		
53	97	金箔押軒丸瓦	第７層	90- 2	A04LT	1434	残 11.8cm		
53	98	銭貨	溝状遺構 15	90- 1	A04OM	2622			図 8（大坂本願寺期）、18 枚
53	99	銭貨	溝状遺構 15	90- 1	A04OM	2622			
53	100	銭貨	溝状遺構 15	90- 1	A04OM	2622			
53	101	銭貨	溝状遺構 15	90- 1	A04OM	2622			
53	102	銭貨	溝状遺構 15	90- 1	A04OM	2622			
53	103	銭貨	溝状遺構 15	90- 1	A04OM	2622			
53	104	銭貨	溝状遺構 15	90- 1	A04OM	2622			
53	105	銭貨	溝状遺構 15	90- 1	A04OM	2622			
54	106	鉄製鋤先	第 14 層	90- 2	A04KW	2733	29.4cm	16.5cm	T.P. ＋ 2.35m
54	107	鉄製鎌先	第 13 層	90- 2	A04KW	3007			
54	108	鉄製鎌先	Ⅵ－１層	90- 1	A04PP	3230	残 14.8cm		T.P. ＋ 2.22m、南あぜ
54	109	鉄製鎌先	第 14 層	90- 2	A04LW	3279			
54	110	鉄製包丁	Ⅵ－１層	90- 1	A04PP	3230	残 9.98cm		T.P. ＋ 2.203m、南あぜ
55	111	木簡	第 13 層	90- 2	A04IW	2840	17.41cm	2.7cm	
55	112	木簡	第 13 層	90- 2	A04IW	2840	18.84cm	3.1cm	
55	113	木簡	Ⅴ－１層	90- 1	A04PM	1921	17.9cm	12.2cm	
55	114	木簡	第７ａ・ｂ層	90- 2	A04LS	1469	11.8cm	残 1.25cm	
55	115	木簡	Ⅳ－５層	90- 1	A04ON	533	残 4.53cm	残 1.48cm	
55	116	木簡	土坑４	90- 1	A04ON	1866			図 7（豊臣前期）
55	117	木簡	土坑４	90- 1	A04ON	2379	14.82cm	2.03cm	図 7（豊臣前期）
56	118	漆器椀	第９層	90- 2	A04JU	1848	残存幅 13.5cm		T.P. ＋ 2.562 m。
56	119	漆器椀	排水溝１	90- 1	A04ON	1710	底径 7.8cm		図 7（豊臣前期）　T.P. ＋ 1.973 m。
56	120	漆器椀	第 14 層	90- 2	A04KW	2869	12.7cm	4.6cm	T.P. ＋ 2.363 m
56	121	漆器椀	第 13 層	90- 2	A04KW	2868	底径 7.4cm	8cm	
56	122	漆器椀	第 12 層上面	90- 2	A04KW	2868		9cm	T.P. ＋ 2.73 m
56	123	漆器椀	Ⅵ－２層	90- 1	A04OM	3132		7.5cm	
57	124	下駄	土坑４	90- 1	A0OM ～ PM	244	長さ 21.2cm	幅 7.7cm	図 7（豊臣前期）
57	125	下駄	堀状遺構 261	90- 2	A04KV	2188	長さ 19.7cm	幅 9.5cm	図 14（豊臣後期）　T.P. ＋ 2.45m
58	126	アカニシ	第 14 層	90- 2	A04MT				あぜ 23
58	127	アカニシ	第 14 層	90- 2	A04MT				あぜ 23
58	128	ニホンジカ上肢骨	Ⅴ－１層	90- 1	A04OM	1290			上腕骨、尺骨、橈骨、手根骨 4 点
58	129	アカガイ	集石 422	90- 2	A04JS	3295			図 17（豊臣前期）

註 1　佐久間貴士　1990「大坂城跡の発掘調査－府立婦人総合センター建設予定地」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第 22 回）資料』大阪府教育委員会

註 2　大阪市文化財協会 2002『大坂城跡Ⅵ』

註 3　宮崎泰史　1993「ドーンセンター建設に伴う大坂城跡の調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第 27 回）資料』

註 4　大阪城天守閣　1993『特別展　城下町大坂 - 地中より今甦る激動の歴史 -』

註 5　一般財団法人　大阪市文化財協会の時期区分に準拠。

註 6　内田九州男 1989「豊臣時代大坂城三の丸工事の史料について」『大阪城天守閣紀要』第 17 号

蒲生郷成が慶長３年９月２日付で同僚に宛てた書状に、大坂　御普請の様子は（三ノ丸）の南と東については完成したが、 北の方については来年の春に実施する予定。検出された石垣は、慶長４年の段階で普請されたもの考えられる。

註 7　三ノ丸石垣の詳細なデーターは、日産建設（株）賀集幸治、中村石材工業（株）水田周一によってまとめられた（「大坂城跡発掘調査に伴う機械掘削等請負工事の内　石垣撤去工　事に関する報告書」平成３年３月）による。

註 8 「大正 14 年 4 月 1 日、大大阪明細地図、大阪毎日新聞社」の地図には表記されている。

註 9　内田九州男　1980「研究ノート　新出の寛永期大坂城図について」『大阪府天守閣紀要』第８号

寛永８～９年（1631 ～ 1632）の「大坂御城並町中之図」　によれば、調査地には京街道、町屋が描かれている。

註 10　大阪市文化財協会 1988『大坂城跡Ⅲ』

凡例

・座標値は日本測地系（国土平面直角座標第Ⅵ系）を用い、挿図中の方位記号は、座標北を示す。水準値は T.P. 値（東京湾平均海面値）を用い、本文・挿図中では T.P. ± m を記している。

・地区割りについては 1/2500 地形図（都市計画図）を基本として、二つのアルファベットを組み合わせた 4m 四方の区画（OP、OQ 地区など）を設定した。なお、この 4m 区画は遺物取り上げの最小単位（遺物登録番号）としている。

・調査については渡辺　武、内田 九州男、北川　央、宮本裕次、佐藤 弘、佐藤恭司、藤井重夫、森村健一、嶋谷和彦、松尾信裕、鈴木秀典、森　毅、宮本佐知子、黒田慶一、山口誠治、川口宏海、多賀谷　昭、安部みき子、酒野俊明、酒野晶子、稲次俊敬、西川寿勝、井西貴子、林日佐子、木下 亘、藤本史子、渡辺 晶、寒川　旭、日野菊美、中村　忠、水田周一、阪口文子、別所秀高、鍋島隆宏、荒樋真由美、岡本奈美子、小島美穂、辻尾幸美の御教示・後協力を得ました（順不同・敬称略）。

写真１ OSJ90-1 区 石垣石の平面図作成（西から）

写真２ OSJ90-1 区 石垣石の寸法計測（東から）

写真３ OSJ90-1 区 石垣石の撤去作業（北西から）

写真４ OSJ90-1 区 石垣石の番号付け（北から）

写真５ OSJ90-1 区 50cm ピッチの水糸張り（北から）

写真６ OSJ90-1 区 解体用足場の設置（北西から）

写真７ OSJ90-1 区 石垣石の洗浄（南西から）

写真８ OSJ90-1 区 東側 P ライン沿い土層断面（東から）

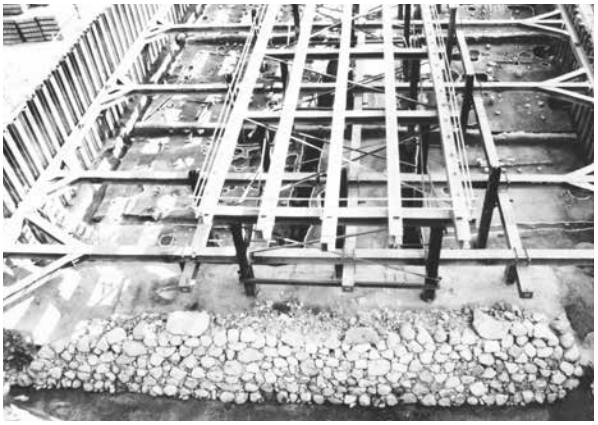


写真 9　OSJ90-1 区　三ノ丸の石垣石（北から）

写真 10　OSJ90-1 区　三ノ丸の石垣石　近景①（北から）

写真 11　OSJ90-1 区　三ノ丸の石垣石　近景②（北から）

写真 12　OSJ90-1 区　三ノ丸の石垣石　近景③（北から）

写真 13　OSJ90-1 区　三ノ丸石垣の断面（東から）

写真 14　OSJ90-1 区　石垣石の転石状況（北から）

写真 15　OSJ90-1 区　三ノ丸石垣前面の配石溝（北から）

写真 16　OSJ90-1 区

「大？」と書かれた墨書　石垣石 112

写真 17　移築復元された三ノ丸石垣　完成時撮影

写真 18　左に同じ　令和 4 年 10 月撮影

上部は大坂冬ノ陣後に破壊された状態で、地表下には 2 ～ 3 段分の石垣石を根石としていた築造当初の状態で復元している。石垣の北側に接して石垣の裾の排水を目的とした配石溝の代わりにコンクリート製の排水溝が巡る。

写真 19　OSJ90-1 区西半部　Ⅴ -1 層上面　瓦片(東から)

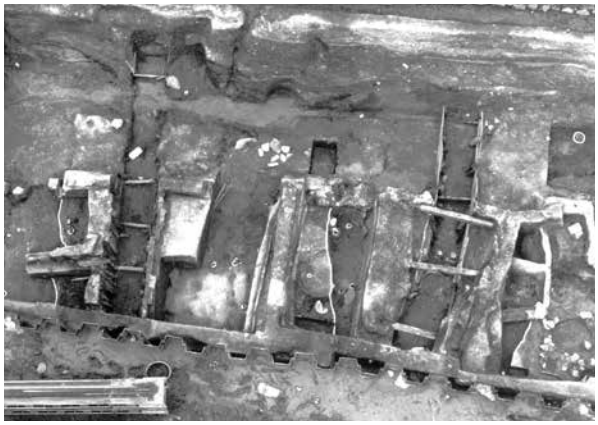


写真 20　OSJ90-1 区　排水溝 1 ～ 3（上が北）

写真 21　OSJ90-1 区　破風　出土状況（南から）

写真 22　OSJ90-1 区　Ⅵ層上面（東から）

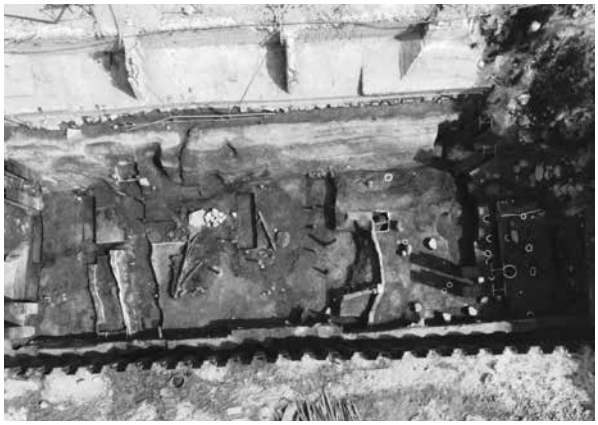


写真 23　OSJ90-1 区　Ⅵ層上面（上が北）

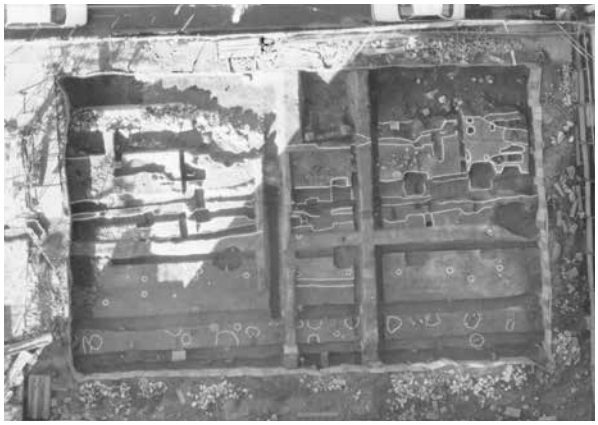


写真 24　OSJ90-2 区　第 5 層上面（上が北）

写真 25　OSJ90-2 区　第 6 層上面　礫敷面（西から）

写真 26　OSJ90-2 区　第 7 層上面（上が北）

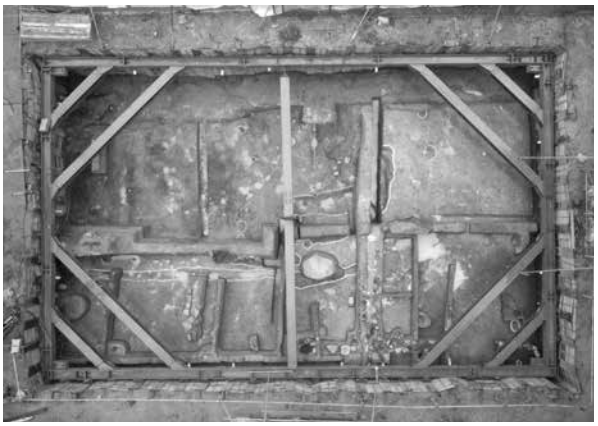


写真 27　OSJ90-2 区　第 9 層上面（上が北）

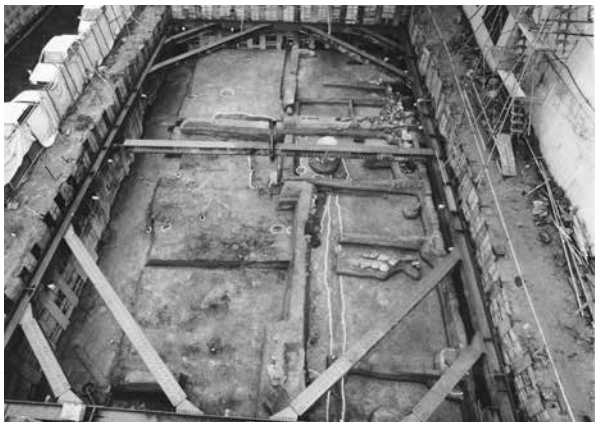


写真 28　OSJ90-2 区　第 9 層上面（西から）

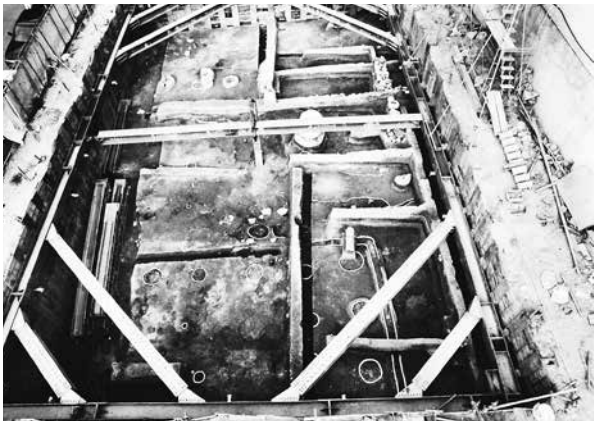


写真 29　OSJ90-2 区　第 10 層上面（上が北）

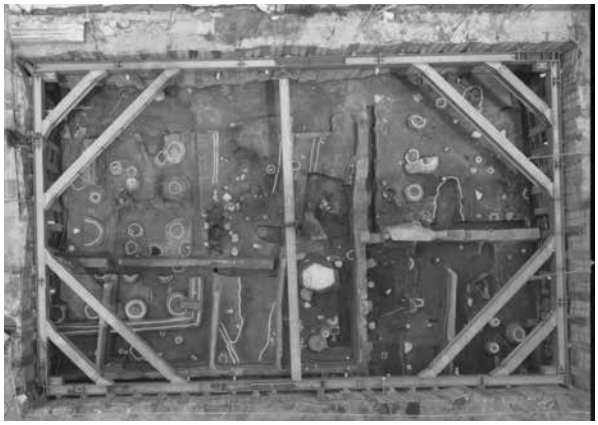


写真 30　OSJ90-2 区　第 10 ～ 12 層上面（上が北）

写真 31　OSJ90-2 区　第 12 層上面　炉 338(北東から)

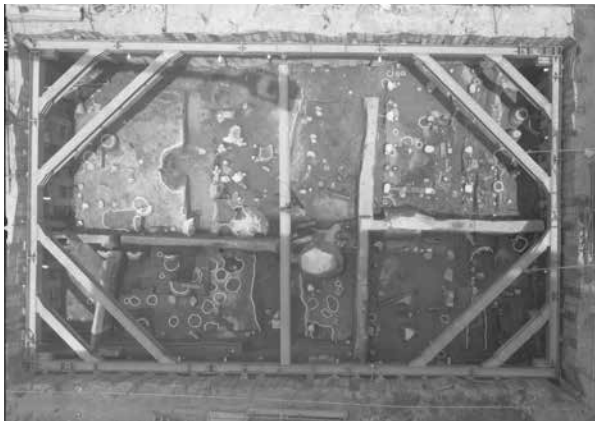


写真 32　OSJ90-2　第 13 ～ 15 層上面（上が北）

写真 33　OSJ90-2 区　第 13 層中　礎石建物 4（東から）

写真 34　OSJ90-2 区　第 14 層上面　水甕 288（東から）

写真 35　OSJ90-2 区第 14 層上面　礎石建物 6（西から）

写真 36　OSJ90-2 区第 15 層上面　礎石建物 7（南から）

写真 37　OSJ90-2 区　第 15 層上面　集石 422（西から）

写真 38　OSJ90-2 区　第 15 層上面　二枚貝（西から）

写真 39　OSJ90-2 区　礎石建物 8　礎石 640（東から）

写真 40　OSJ90-2 区　第 15 層上面　土坑 420（西から）

写真 41　大坂本願寺期～豊臣前期・後期　土器・陶磁器土師皿（1～4・6～8）土師質坏（5）
瀬戸・美濃焼（9～ 12）
第 13 層（1・12）桶 290（2）第 14 層（3・5・10）土坑 418（4・6）堀状遺構 261（7）
第9層（8）第 11 ～ 13 層（9）Ⅵ - 1層（11）

写真 42　大坂本願寺期～豊臣前期・後期　陶磁器

瀬戸・美濃焼（13 ～ 15・17 ～ 19）唐津焼（16）

第 14a 層（13）第 15 層（14）排水溝1（15）第7層（17）第 13 層（18）第9層（16）

第 11 ～ 12 層（19）

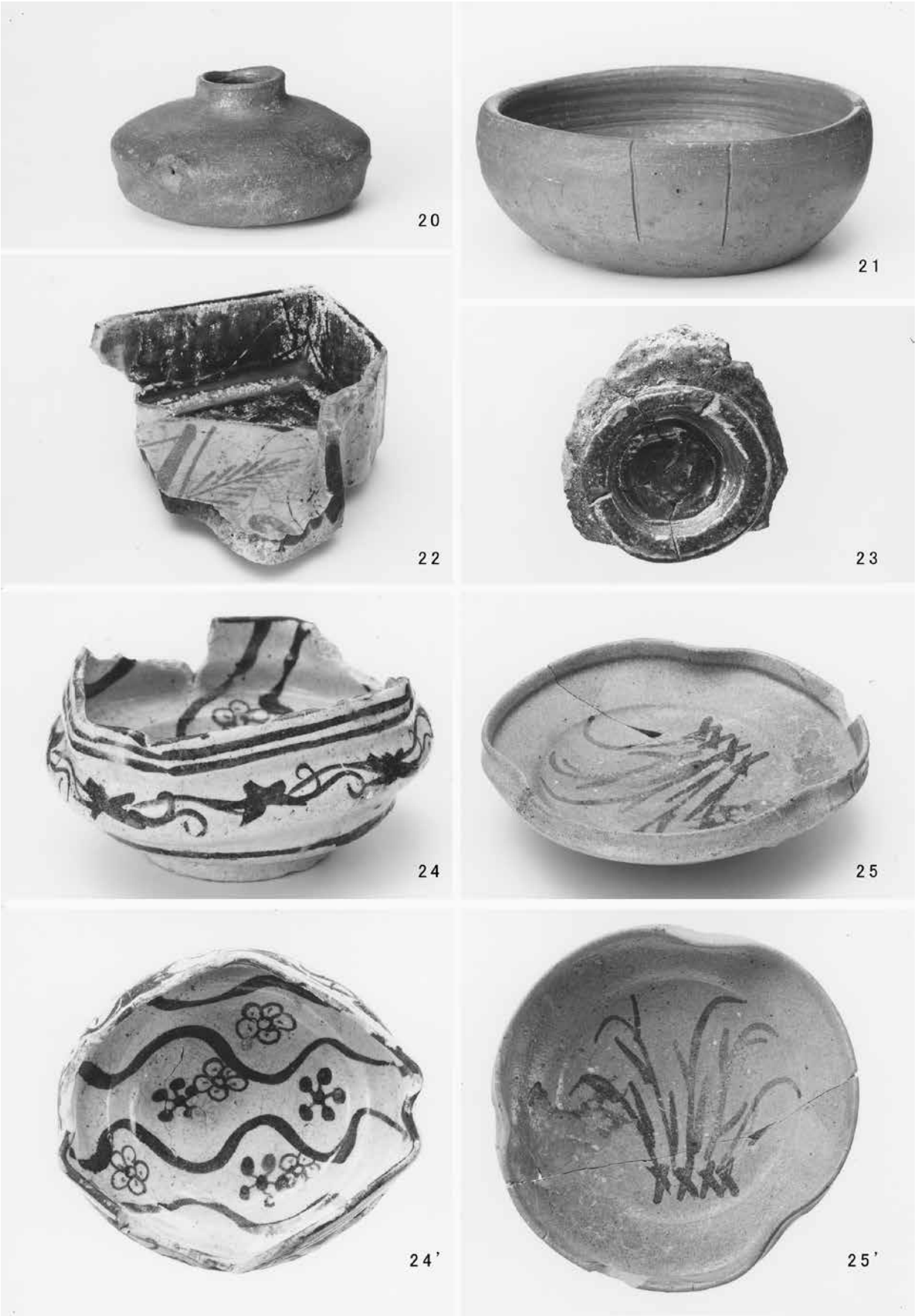


写真 43　豊臣前期・後期　陶磁器

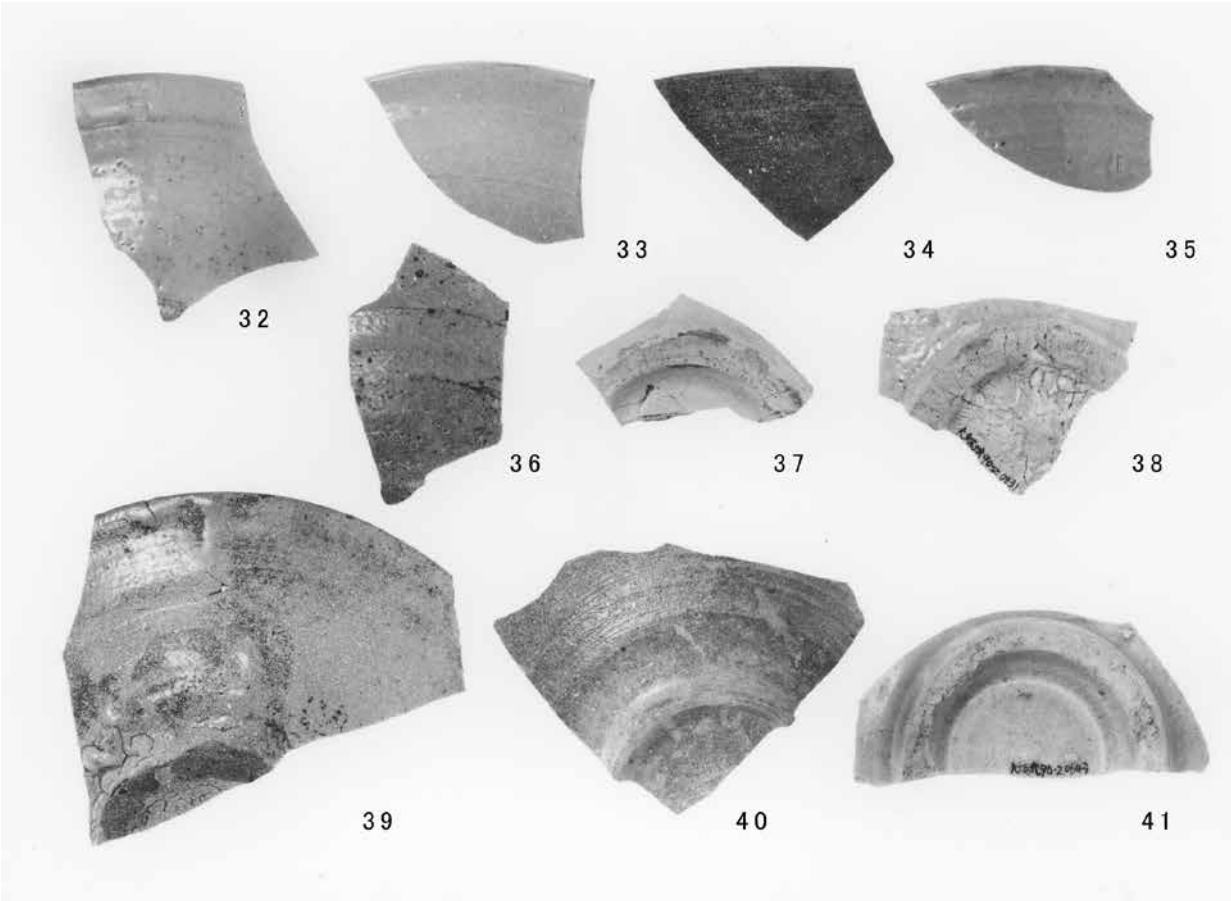
備前焼（20・21）織部焼（22）軟質施釉陶器（23）絵志野焼（24）絵唐津焼（25）

瓦敷 417（20）排水溝1（21）土坑 235（22）第 11 層（23）第7層（24・25）

写真 44　大坂本願寺期～豊臣前期　土器・陶磁器

瓦質土器（26・27）土師質土器（28）備前焼擂鉢（29 ～ 31）

埋甕 18（26）第 12 層上面（27）埋甕 292（28）Ⅵ - 1層（29・30）Ⅵ - 2層もしくは落込7（31）



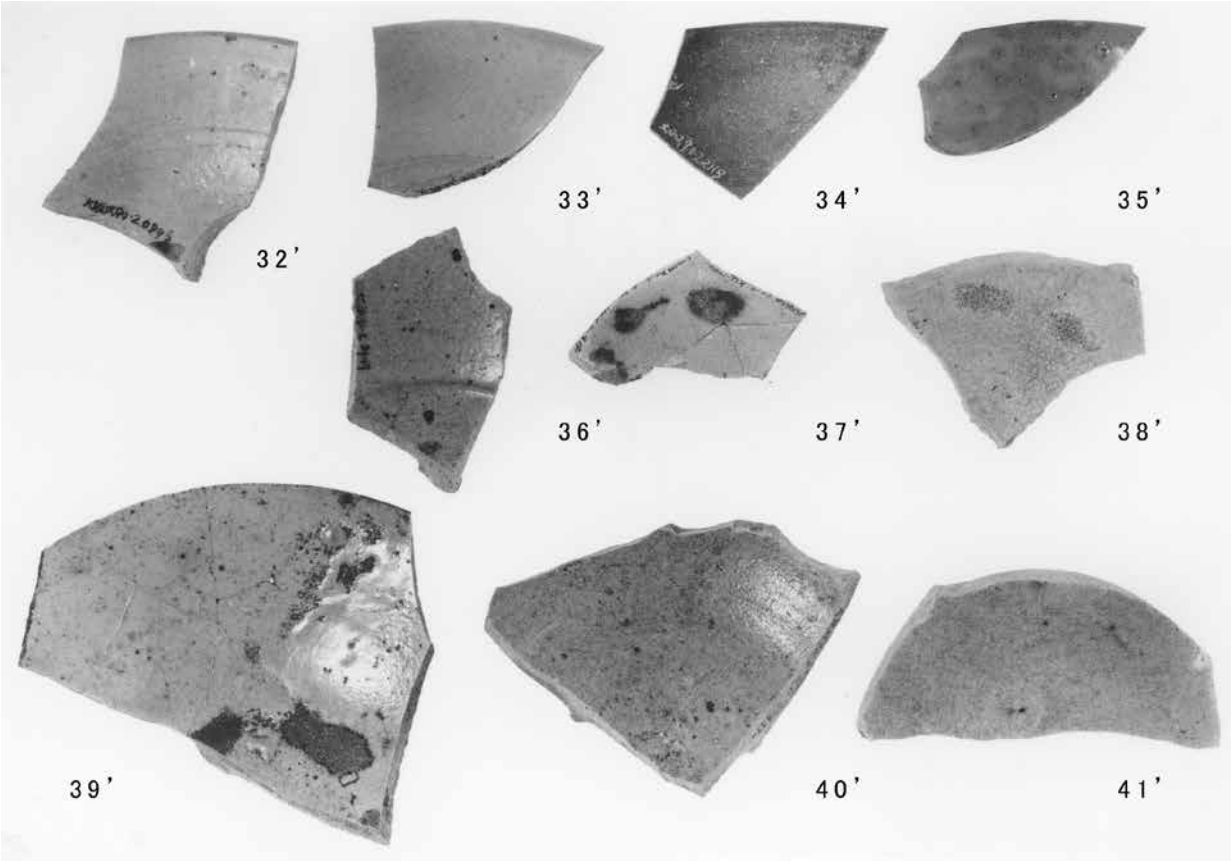


写真 45　豊臣前期・後期　李朝陶磁器

第6層（32・36・38）第9層（33 ～ 35・37）第 13 層（39・40）第5層（41）

写真46　豊臣前期　陶磁器
　　備前焼大甕　水甕288

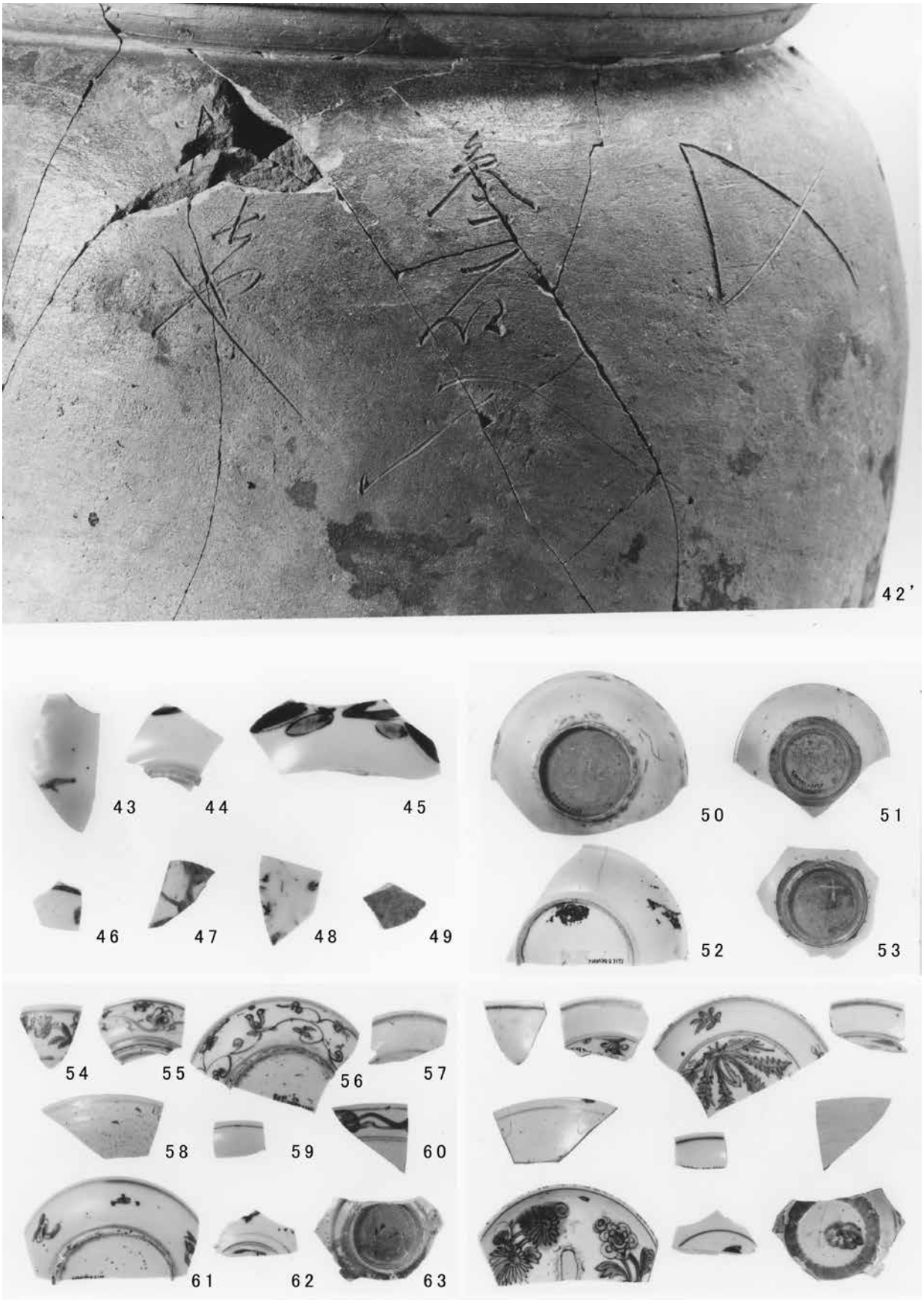


写真 47　豊臣前期・後期　陶磁器

上段　備前焼大甕（拡大）「参石入　捻土也」

下段　色絵（43 ～ 49）白磁（50 ～ 53）青花（54 ～ 63）

第9層（43・44・46・48・49）第 13 ～ 14 層（45・57）第 14 層（47・50 ～ 53）

第 13 層（54 ～ 56・58 ～ 63）

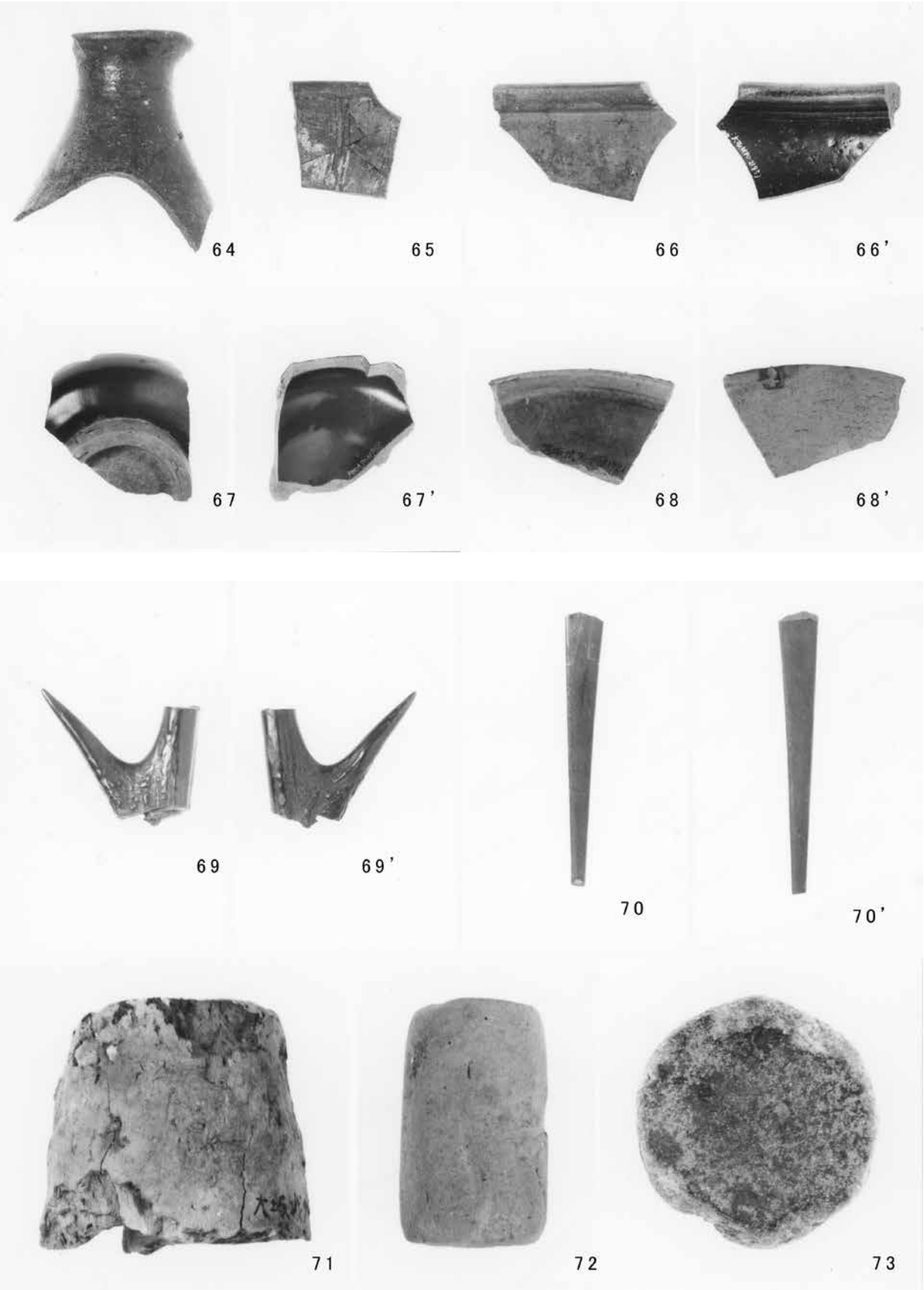


写真 48　豊臣前期・後期　陶磁器・骨角製品・土製品

上段　李朝（64）信楽焼（65）中国製陶器（66）瀬戸・美濃焼（67）華南三彩（68）

第 13 層（64）第 12 層（65）第9層（66・67）排水溝2（68）

下段　骨角製品（69・70）フイゴの羽口（71）土錘（72）土製円板（73）

溝状遺構 15（69）Ⅴ - 3層（70）第 12 層（71）第 13 層（72）第9層（73）

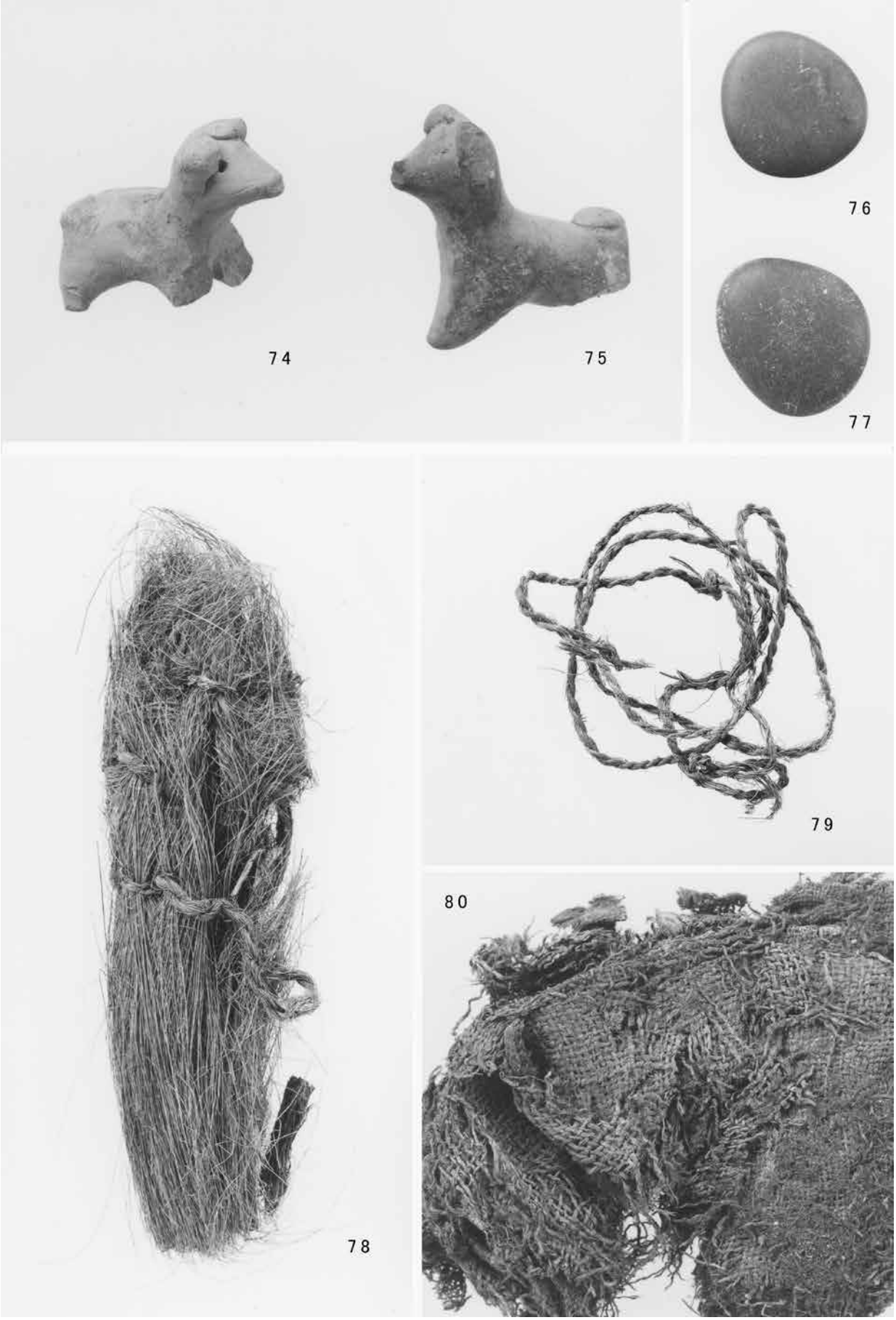


写真 49　大坂本願寺期～豊臣前期・後期　土製品・石製品・繊維質

犬形土製品（74・75）碁石（76・77）ほうき状植物繊維の束（78）縄（79）布（80）

Ⅵ-1層（76）Ⅳ-5層（75）第 11 層（77）第 12 ～ 13 層（78）溝状遺構 16（79）埋甕 18（80）

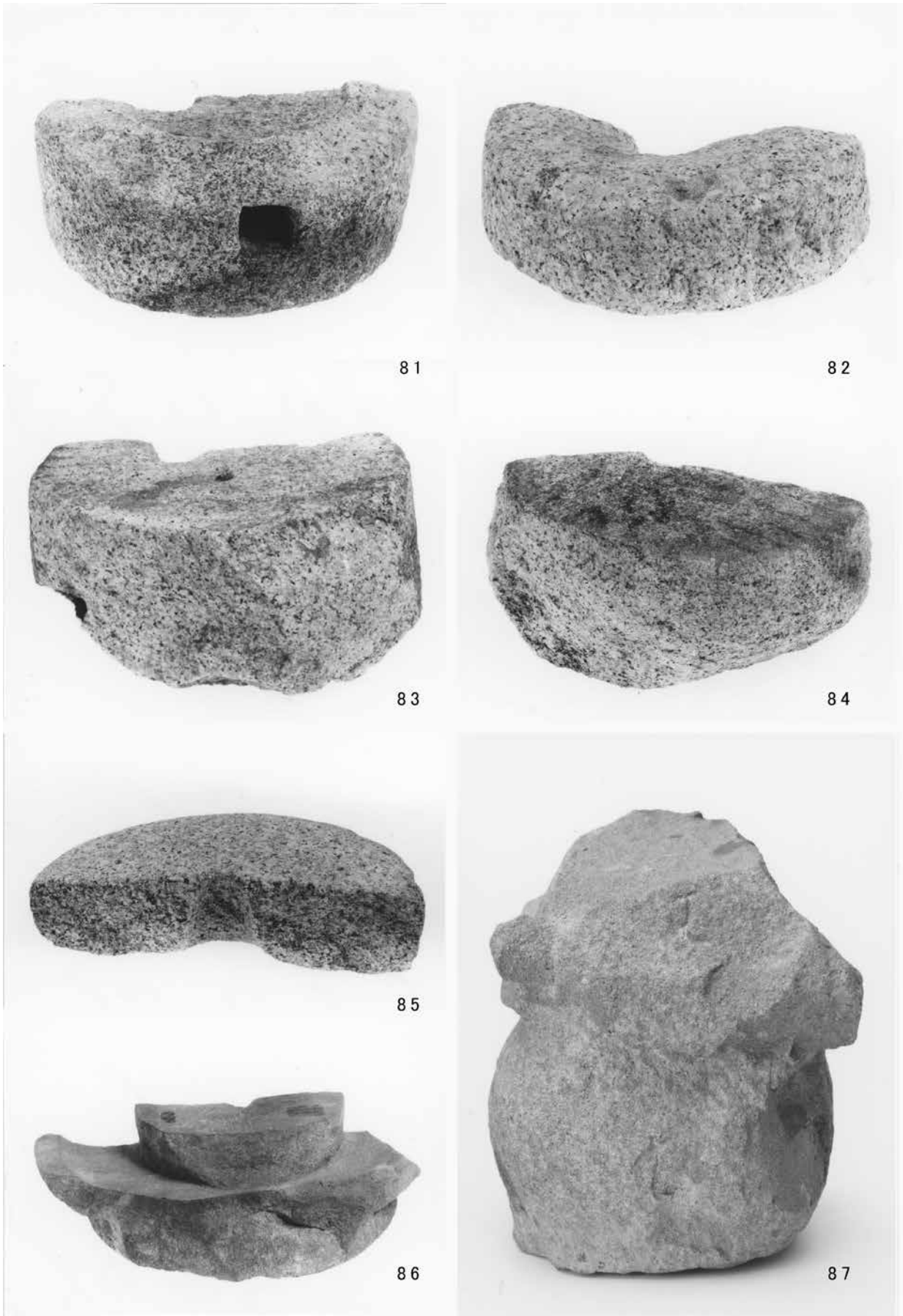


写真 50　大坂本願寺期～豊臣前期・後期　石製品

石臼（81 ～ 85）茶臼（86）五輪塔（87）

礎石6（81）第 10 層（82）第6層（83）礎石7（84）石垣状遺構 225（85･86）堀状遺構 261（87）

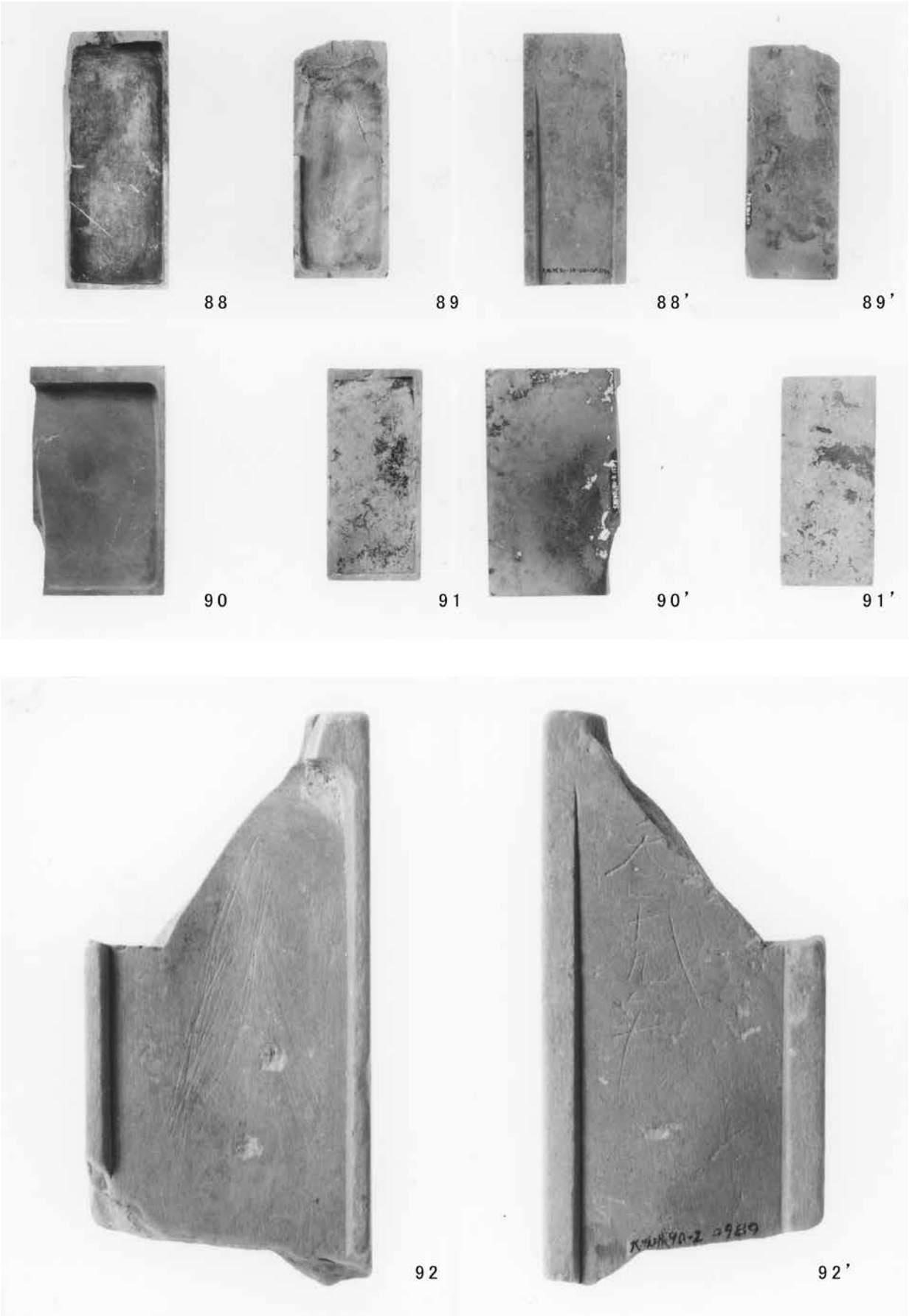


写真 51　大坂本願寺期～豊臣前期・後期　石硯
上段　Ⅵ - 1層（88）第7層（89・90）排水溝2（91）
下段「天正十九年」銘入り硯（92）第6層

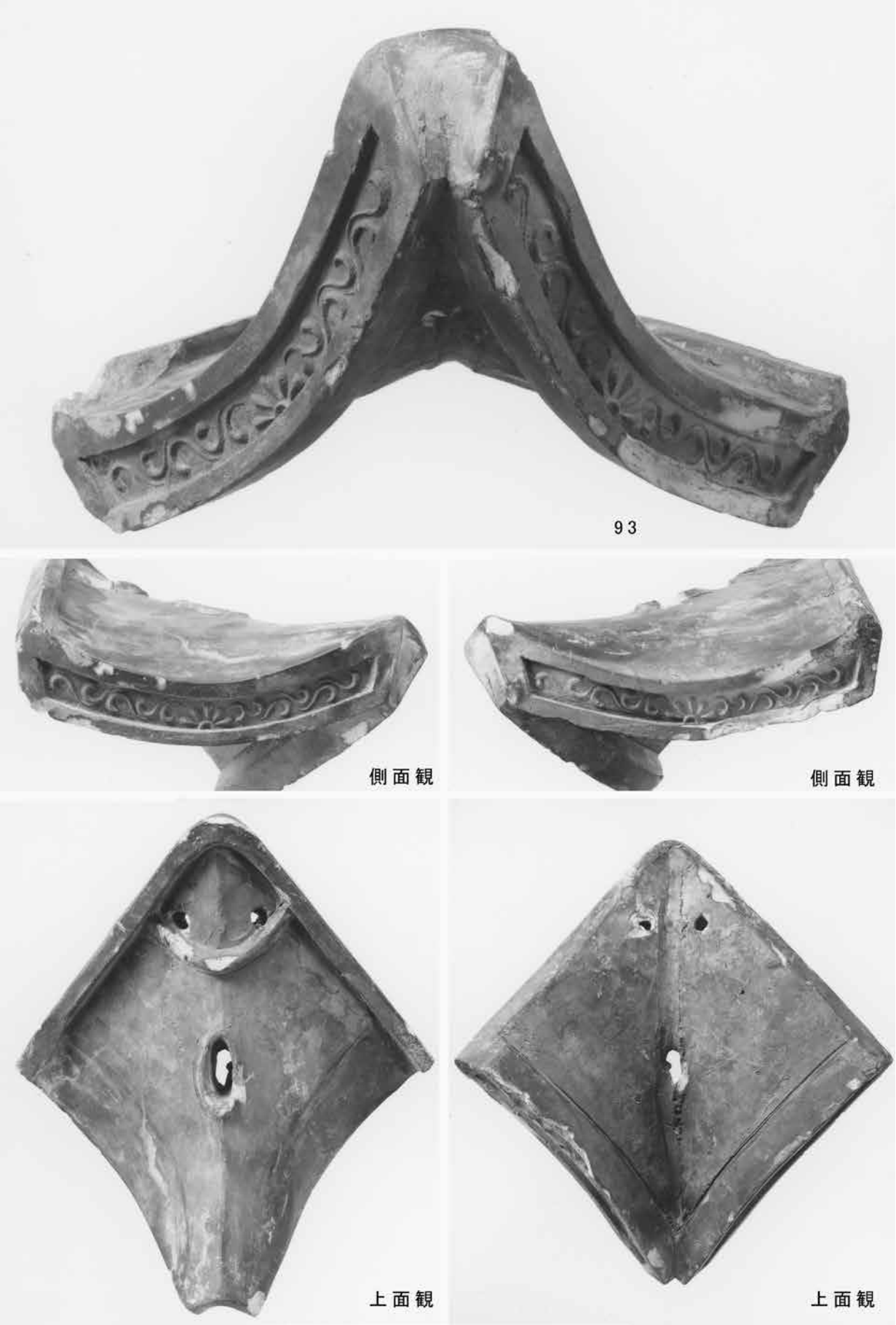


写真 52　大坂本願寺期　隅瓦
　　隅瓦（93）溝状遺構 15

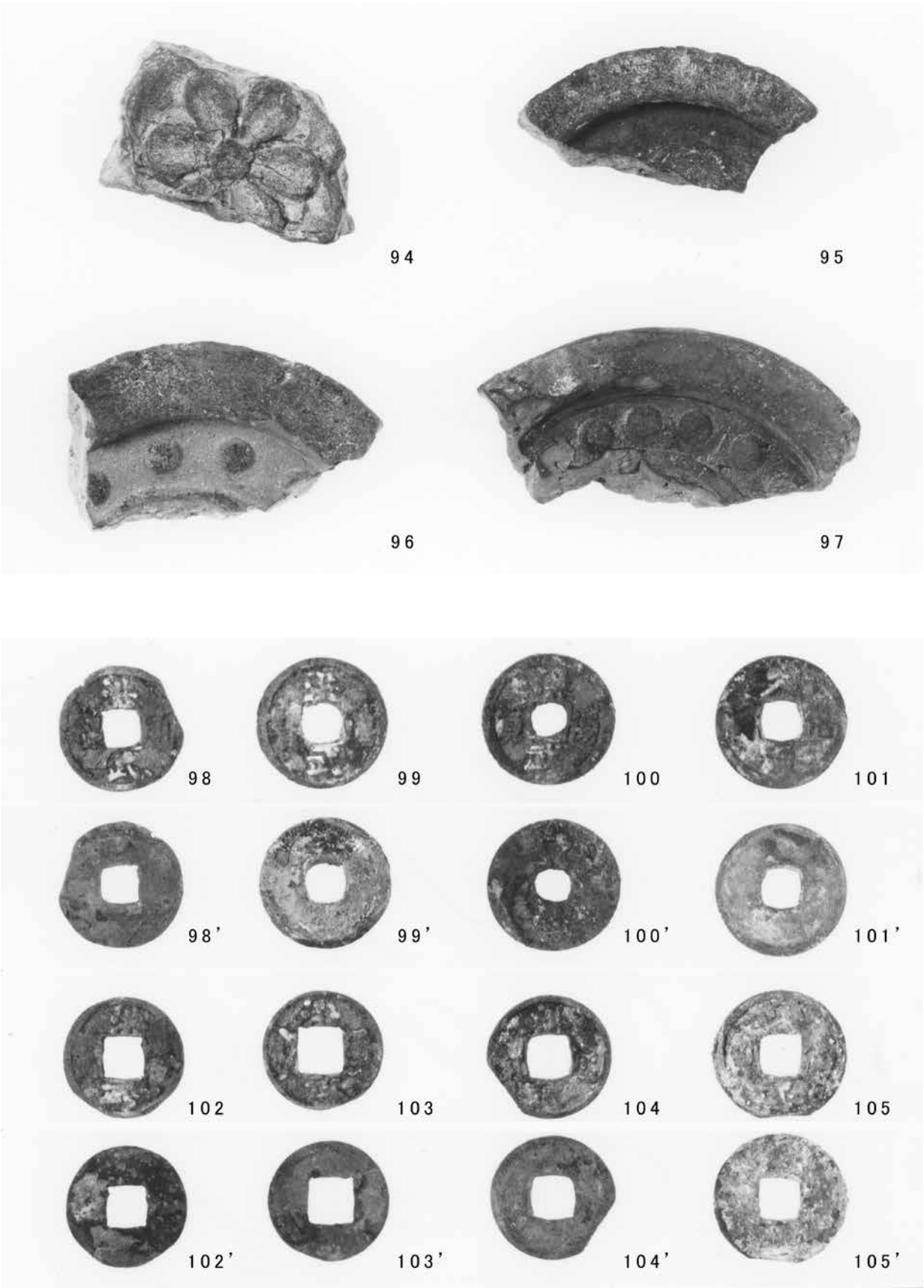


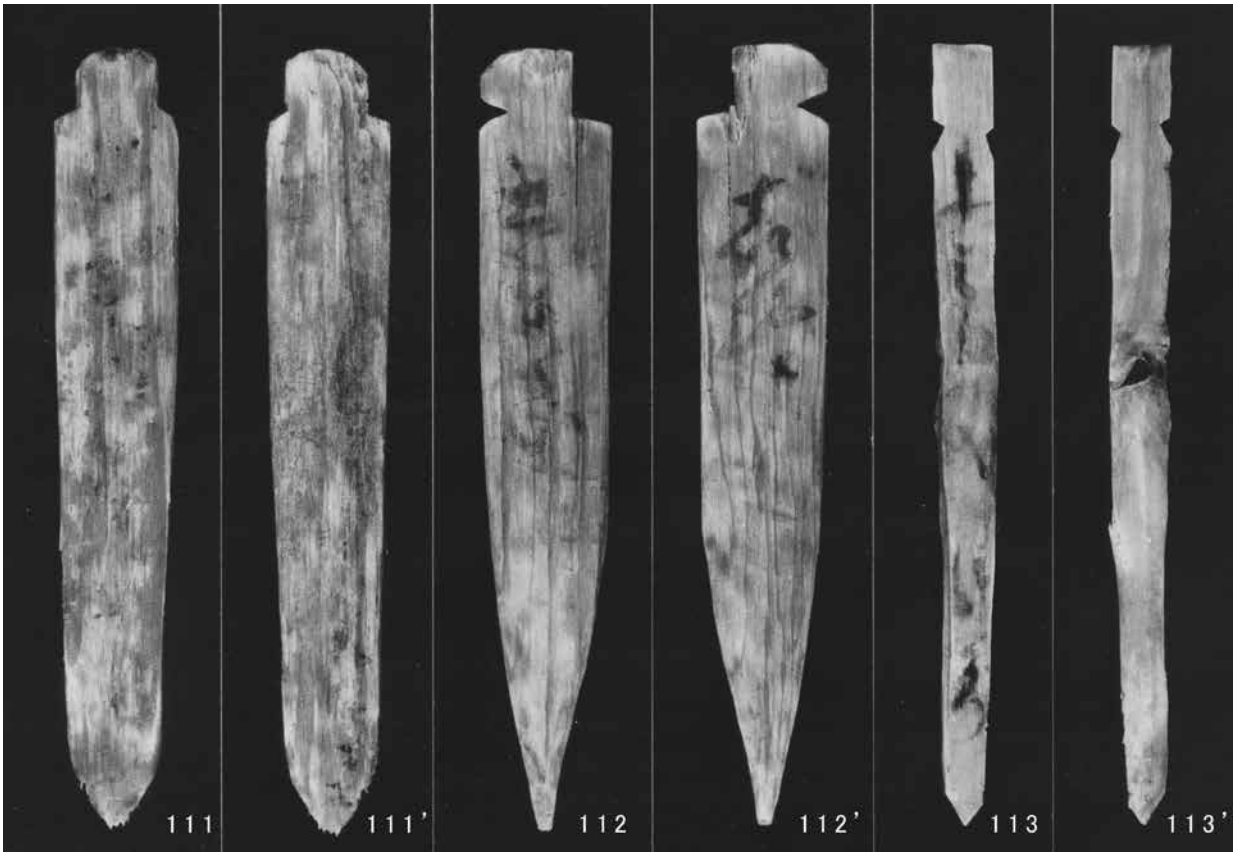
写真 53　大坂本願寺期～豊臣前期・後期　金箔瓦・銭貨

上段　金箔押軒丸瓦

排水溝1（94）Ⅳ - 5層（95）第6層（96）第7層（97）

下段　銭貨（98 ～ 105）　溝状遺構 15 内　銅銭群5

写真 54　大坂本願寺期～豊臣前期　金属製品
鉄製鋤先（106）鉄製鎌先（107 ～ 109）包丁（110）
第 14 層（106・109）Ⅵ - 1層（108・110）第 13 層（131）



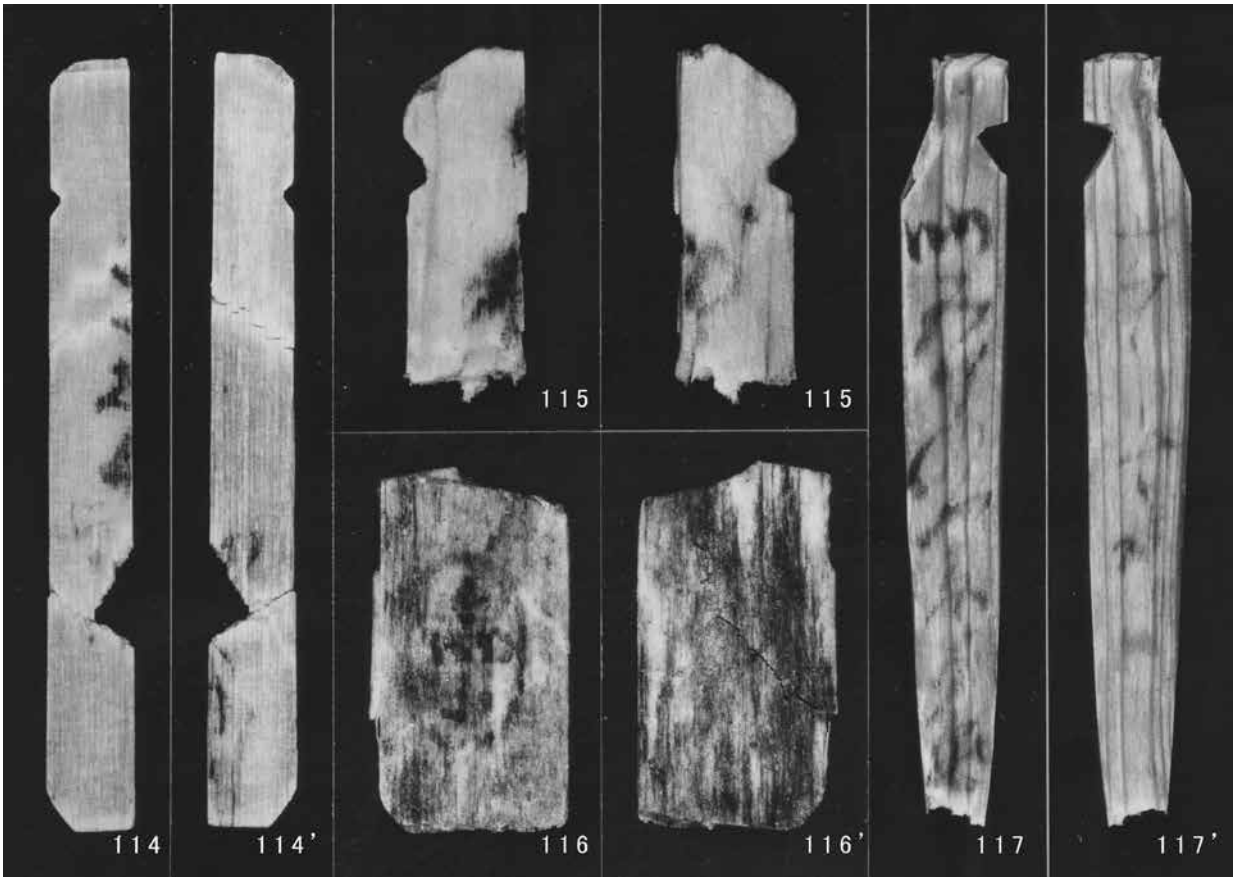
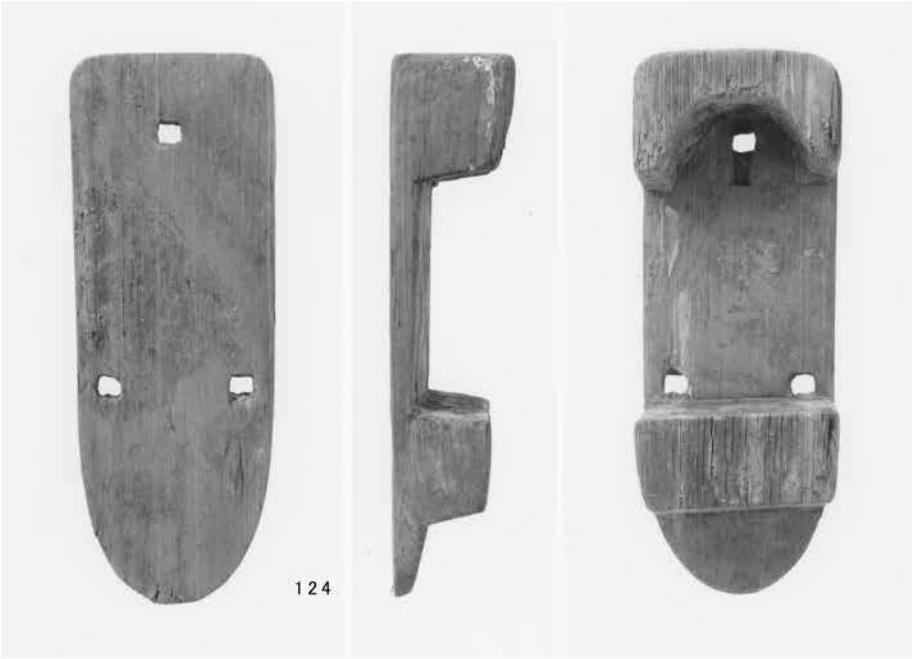


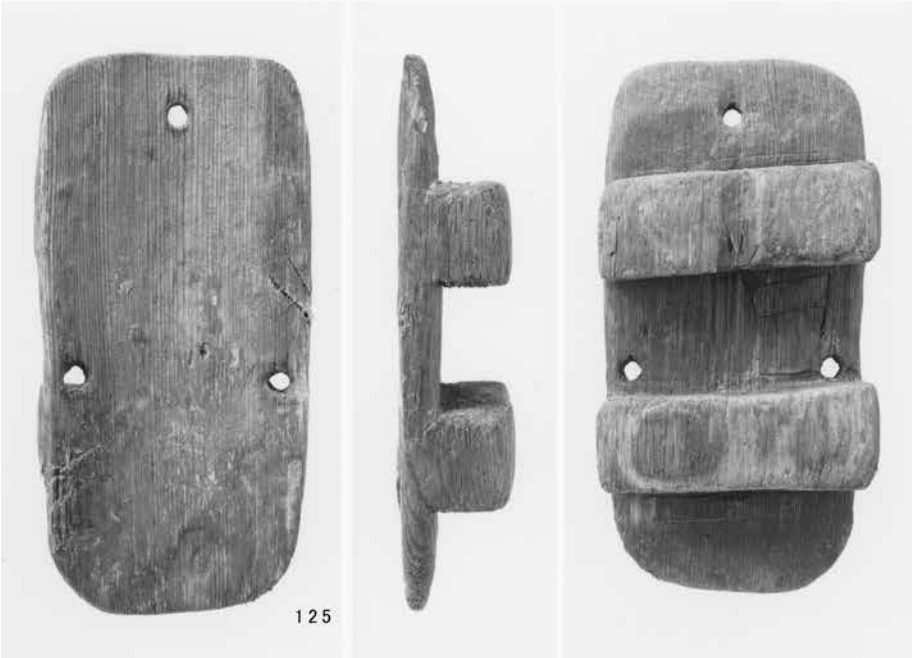
写真 55　豊臣前期・後期　木製品　木簡

第 13 層（111・112）Ⅴ - 1層（113）第7層（114）Ⅳ - 5層（115）土坑4（116・117）

写真 56　大坂本願寺期～豊臣前期・後期　木製品　漆器椀

第9層（118）排水溝1（119）第 14 層（120）第 13 層（121）第 12 層上面（122）Ⅵ - 2層（123）





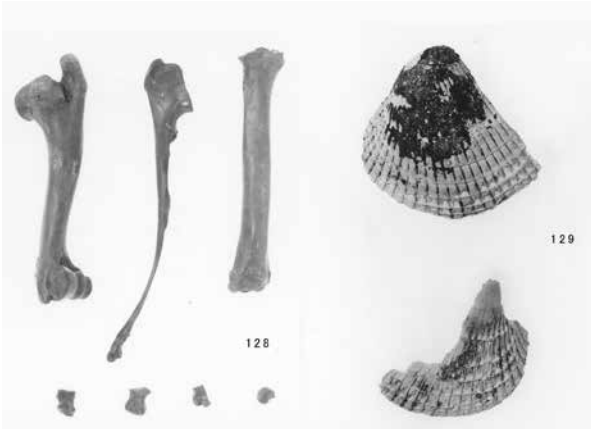


写真 57　豊臣前期・後期　木製品　動物遺存体

上段　下駄　土坑4（124）堀城遺構 261（125）

下段　アカニシ 第 14 層（126・127）ニホンジカ上肢骨 Ⅴ - 1層（128）アカガイ　集石 422（129）

【資料紹介】

牛石９号墳の発掘調査

はじめに

牛石古墳群は、大阪府の南部、行政区分では堺市を中心に広がる泉北丘陵に存在する古墳群である。地形的には、東を石津川、西を和田川に挟まれた南北に長い栂丘陵上に位置する。

古墳発見の経緯とその後の発掘調査については2022年２月刊行大阪府教育庁文化財調査事務所年報25（以下、年報25と略す）で説明した。その中でも記述したが、詳細が不明や、未報告のままになっている古墳も多い。未報告のままである３基分の古墳の調査図面は平成27年度に大阪府所蔵資料となった故堅田直氏調査資料に含まれている。この調査資料を資料紹介していくのは、図面等の資料を保管し、また泉北丘陵に所在する大阪府文化財調査事務所の果たすべき責任であると考える。

年報25では３基の古墳のうち横穴式木室をもつ牛石５号墳について資料紹介した。引き続き今年度は、横穴式石室を持つ牛石９号墳について、発掘調査図面、写真、出土遺物を合わせて調査の詳細をできる限り復元し、紹介していきたい。

1. 牛石9号墳の発掘調査

堅田調査資料に含まれている牛石９号墳の現場調査図面は、等高線を記入した縮尺1/100の地形測量図、墳丘に設定したＡ～Ｈの８か所のトレンチの断面図、横穴式石室検出状況図、横穴式石室の平面図・立面図、石室内の遺物出土状況図等（いずれも縮尺１/10）である。今回の資料紹介では主として墳丘の外形・規模、そして横穴式石室の詳細とその出土遺物について報告することとする。

昭和42年度の調査概報（大阪府教育委員会1968）では牛石９号墳について次のように記述されている。「主体部は横穴式石室であるが、天井部の多くはすでに抜き取られていた。玄室内もかなり荒れてはいたが、床に河原石の敷石があり、木棺の他に陶棺が入っていたことが明らかになった。副葬品には須恵器、鉄刀、

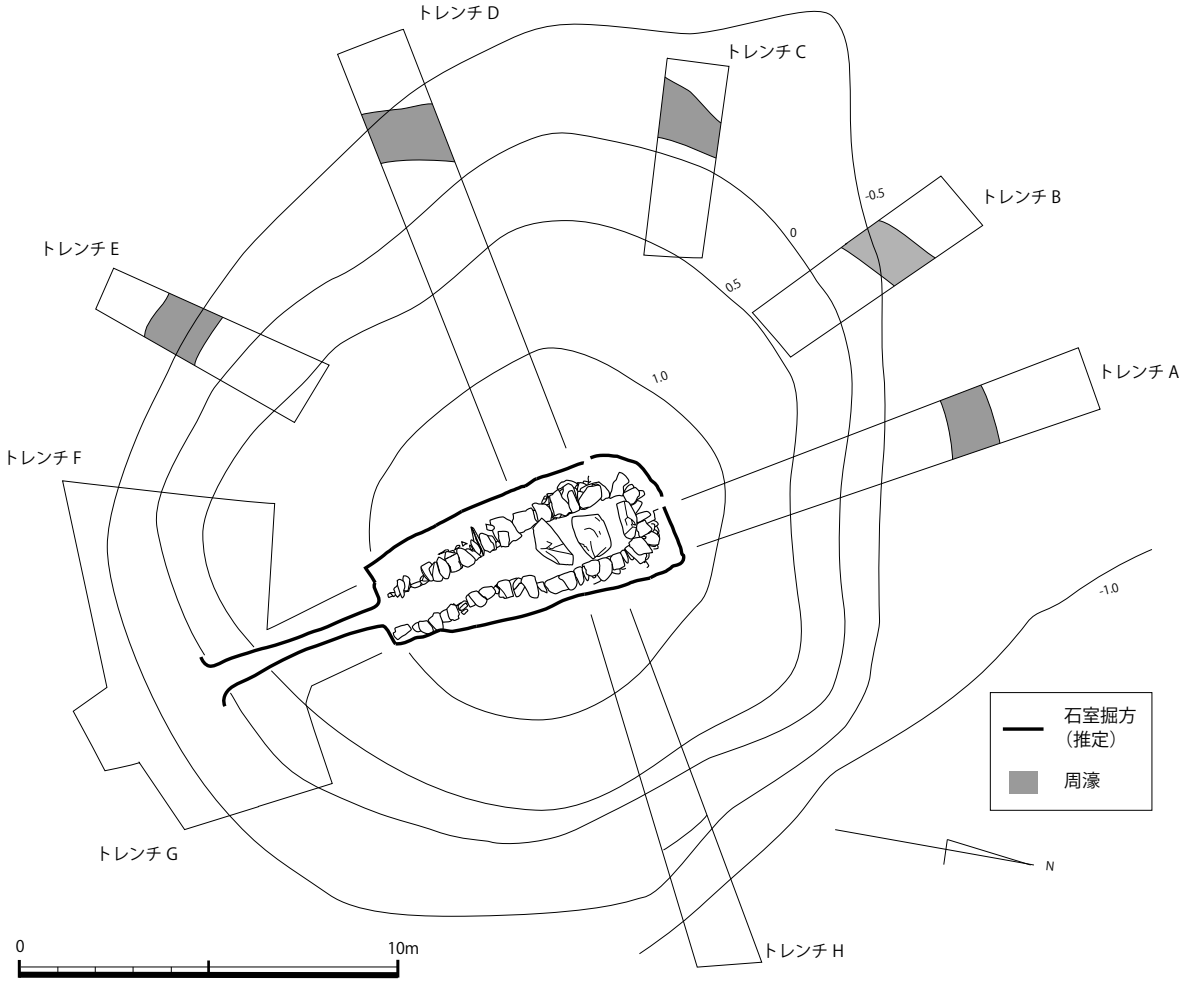


図1　牛石9号墳墳丘測量図及び石室検出状況

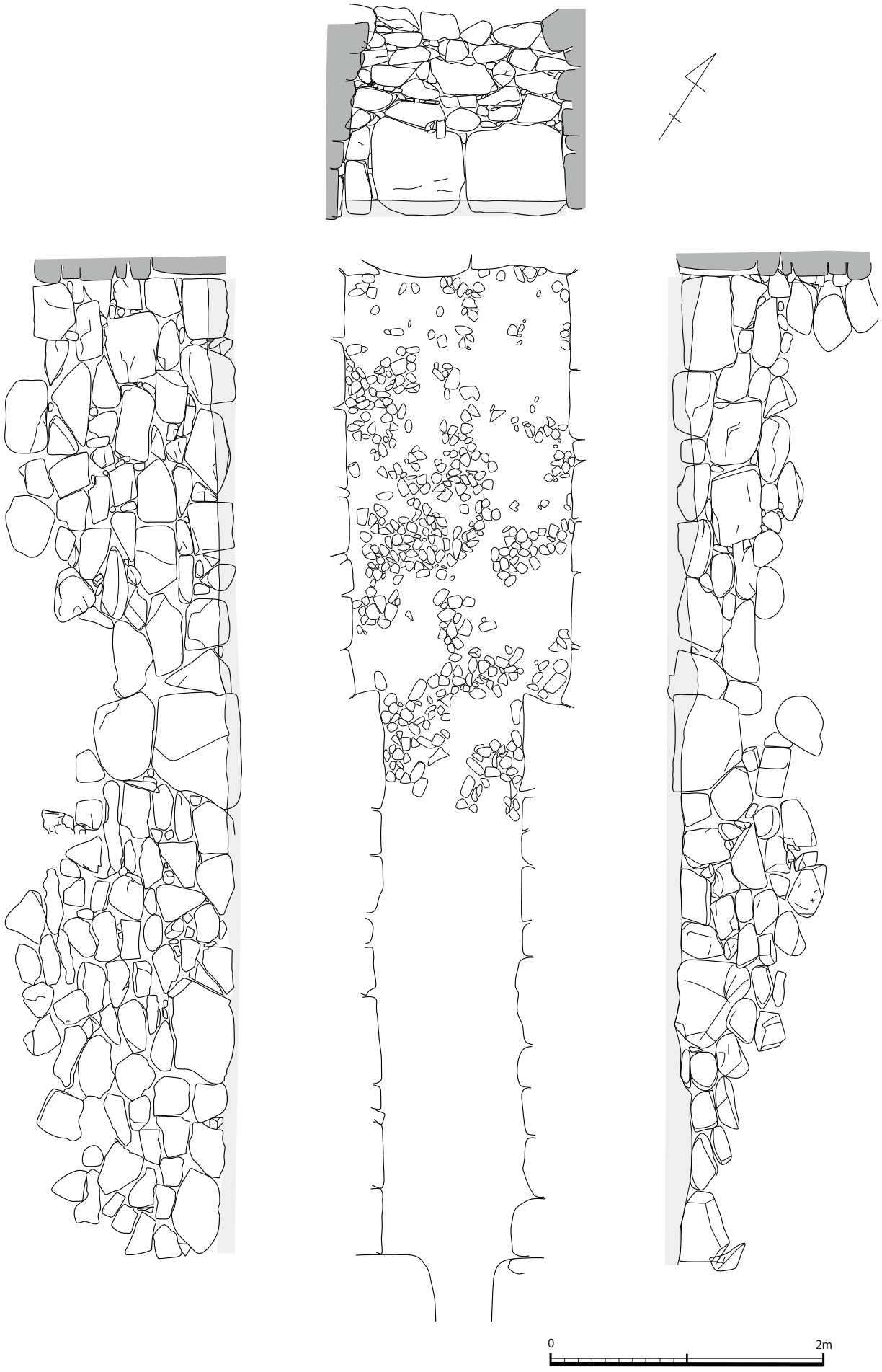


図2　牛石9号墳横穴式石室平面図・立面図

写真1　牛石9号墳石室検出状況

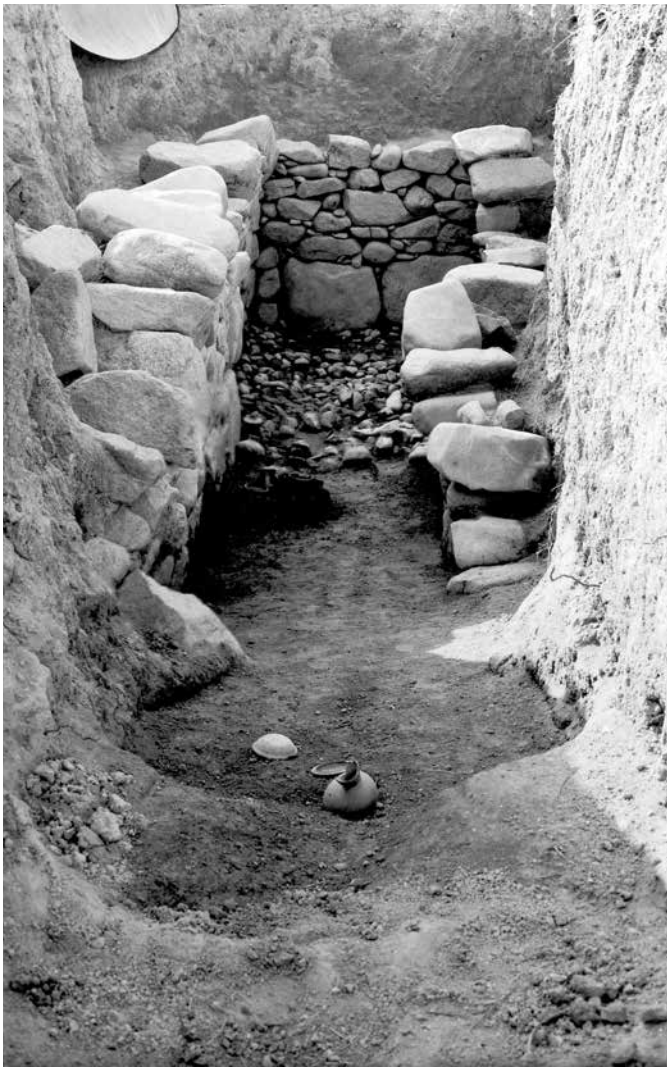


写真2　牛石9号墳石室（墓道から）

写真3　牛石9号墳石室内遺物出土状況

鉄鏃等がある。墳丘は直径約 20 mの円墳であるが、周囲に巾約２m、深さ１mの周濠の周ることが明らかとなった。石室は大きいとはいえないが、墳丘はこうした石室を有する古墳としては大きなものであり、明らかに周濠と言えるものを持っているのもまれな例と言える。」

図１は堅田調査資料の牛石９号墳墳丘測量図（0.5 m間隔の等高線が入るが、数字は相対値のみ）に横穴式石室の検出状況を加筆したものである。墳丘は昭和 42 年度の概要のとおり直径約 20 mを測るやや不整形な円墳である。墳丘に設定したＡ～Ｈのトレンチには、一部不明瞭な箇所はあるが、墳丘の外側に幅 1.2 から 1.5 mの周濠が描かれている。絶対高は不明であるが、同じ栂丘陵の牛石７号墳の墳頂部が標高 80 mであり、おそらくほぼ同等の高さを有したと思われる。

トレンチの断面図を検討すると調査当時の地表面から約 0.8 m掘削したところで天井石を検出している。図２は天井石を除去した後の横穴式石室の平面図・立面図で、立面図の網掛け部分は石室検出時に埋没していたと推定される箇所である。この図面にも絶対高は記入されていない。横穴式石室は両袖式で図面から復元した規模は玄室部分が幅約 1.6 m、長さ 3.0 m、羨道は幅約 1.0 m、長さ 4.1 mを測る。

石室に使用されている石材の大きさは、天井部分が最大で 1.0 × 0.6 m大の石を使用している。また玄室奥壁の一段目は平面が 0.7 × 0.8 m大の石を二つ並べて使用、両袖石も平面が 0.6 × 0.8 m大の比較的大きな石を使用している。この３か所以外は平面が 0.2 × 0.4 m前後の石が積まれている。石積みの残存高は、奥壁は 1.5m、側壁は最大で 1.7 mを測る。石室床面、玄室と羨道の一部にこぶし大の敷石が残存している。

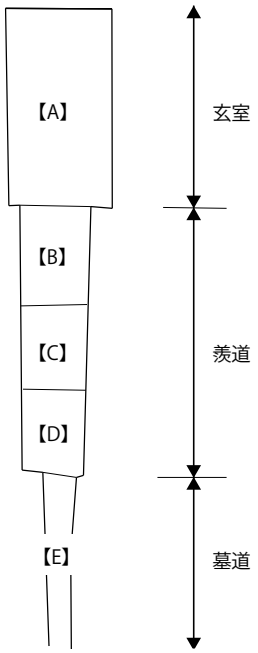


図3　遺物出土エリア模式図

写真１～３は昭和 42 年発掘調査当時に撮影されたガラス乾板の写真である。写真１は石室検出状況で、天井石が３個残存している様子がわかる。写真２は天井石を除去した後、墓道から奥壁方向を撮影した写真、写真３は石室内床面の遺物出土状況、玄室内袖石付近の状況である。

2. 出土遺物の検討

出土遺物は泉北考古資料館に保管されていたが、資料館閉館に伴い大阪府文化財調査事務所に移された。図４発掘調査時の遺物出土状況平面図には、取り上げ№が記入されていた。それによると図面上で取り上げ№により出土地点が判明している遺物は 154 点、そのうち須恵器（出土した土器は須恵器のみである）は 49 点、鉄製品が 76 点、玉・耳環など装飾品は 21 点である。

（1）遺物の出土状況

出土状況図検討・分析してみると、遺物の出土位置は大きく分けて【A】玄室内【B】～【D】羨道内【E】墓道の５か所のエリアに整理することができた(図３)。最初にエリア別に遺物の出土状況の特徴を記述する。

【A】のエリア、玄室内で出土したのは大部分が鉄製品で、それも破片がほとんどである。遺物は散乱したような状態で原位置を保っていない。

羨道内は、【B】＝玄室寄りのエリア、【C】＝羨道中央のエリア、【D】＝羨道入口付近のエリアの３か所に分けて整理した。

【B】のエリア、玄室寄りでは玉類や耳環等装飾品が集中して出土し、その周囲に須恵器が出土している。図４遺物出土状況平面図では装飾品が集中して出土した箇所に網掛けを施している。

【C】のエリア、羨道中央ではまとまった時期の須恵器が重なるようにおかれていた。

【D】のエリア、墓道入り口付近では左側壁寄りに須恵器がまとまって出土している。

【E】のエリア、墓道では所々に分散して須恵器が出土している。

次にそれぞれの種類別に出土遺物の内容を説明する。

（2）須恵器

取り上げ№で出土地点を、そして文化財調査事務所で実物の所在を確認した須恵器 41 点については実測図を作成し、図５に掲載した。図５掲載図番号は、【A】～【E】のエリア順に付けてある。また図４遺物出土状況図に実測図（縮尺 1/6）を加筆した。

図５の１～６は【A】のエリア、玄室内の両袖部付

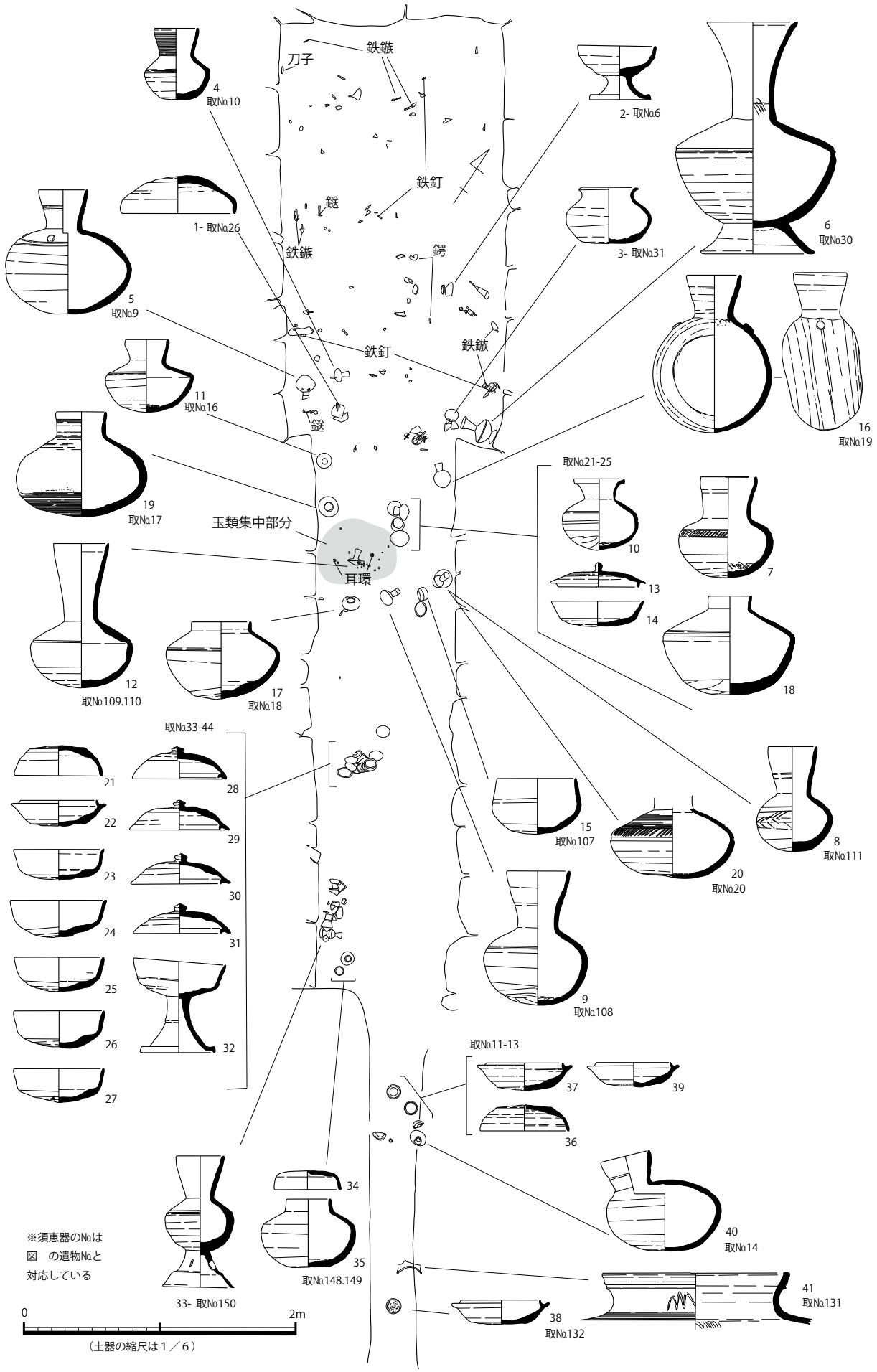


図4　牛石9号墳石室内遺物出土状況図

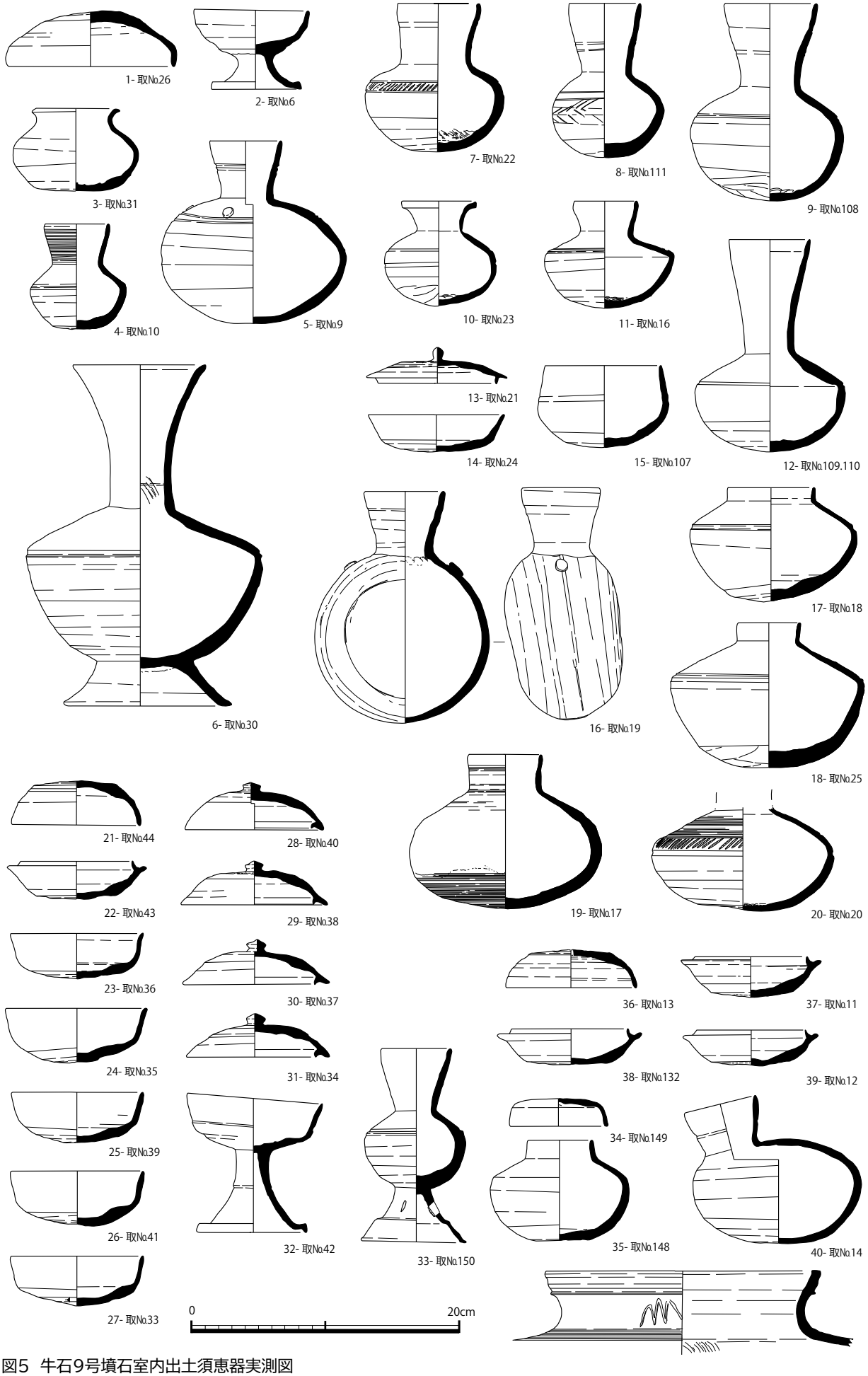


図5　牛石9号墳石室内出土須恵器実測図

近で出土したもので、器種は坏蓋、台付壺、高坏、ミニチュアの壺などがある。陶邑編年Ⅱ～Ⅲ形式(註２)に相当するものを含み、時期にややバラつきがある。

図５の７～20は【B】のエリアから出土したもので器種は長頸壺、短頸壺等壺類が多い。この箇所は玉類他装飾品や砥石等が集中して出土しており、須恵器は玉類の周囲をとりまくように出土している。13、14の蓋坏はつまみ部分や端部が洗練されたシャープな作りでⅢ型式１段階に相当すると思われる。

図５の21～32は【C】のエリア、羨道中央に重ねた状態で出土した蓋坏、高坏である。Ⅱ型式６段階～Ⅲ形式１段階のまとまった時期に相当し、ほぼ全てが完形品である。

図５の33～35は【D】のエリア、羨道の入り口付近左側で出土したものの一部、台付壺、短頸壺、壺蓋である。破損している個体が多く、片づけてまとめられた状況を示している。

図５の36～41は【E】のエリア、墓道に散在して出土したもので、器種は甕の口縁部、平瓶等がある。Ⅱ型式６段階に相当する時期の坏蓋がある。

（3）鉄製品

図４遺物出土状況図で出土地点が判明している鉄製品は76点､その中で実物が存在するのは65点である。ほぼすべてが【A】のエリア玄室内から散在した状況で出土している。鉄製品の場合は、複数の製品が一か所でまとめて取り上げられていたようである。発掘調査から50年以上経過し、いずれも腐食が激しく脆い状態である。製品名が判明した場合できる限りその名称を出土状況図に加筆、記入した。主な種類は、鉄鍔、鉄鏃、鉄鋌、鉄釘等である。以下種類別に説明する。

写真４の鉄鍔は、元々２片に割れており玄室内で50㎝の間隔をあけて出土している。昭和42年度の概要では副葬品として鉄刀が挙げられていたが、明らかに鉄刀と判定できるものは見あたらない。しかし鍔の存在から鉄刀が副葬されていたことは推定されるであろう。残存長6.5㎝、復元最大幅5.0㎝、中心孔の長さ2.5㎝、復元幅1.2㎝を測る。

鉄鏃はほとんどが破損しているが、少なくとも35点以上は存在していたと推定できる。写真５は鏃身部が残存しているもの４点を集め撮影掲載した。写真５の１は頸部に比して鏃身部長が6.5㎝と異様に大きく、儀礼用に使用されたものか。写真５の２～４は有頸平根式鉄鏃（註１）で、２は鏃身部残存長2.8㎝、３は鏃身部長3.7㎝、全長8.7㎝、４は鏃身部長4.0㎝を測る。他にも頸部、茎部が多数残存しており、複数個体の長頸鏃が存在していたと思われる。

鉄鋌は３点出土、写真６の１、２は渡り部分と爪部（註２）が両方残存しているものを撮影掲載した。写真６の１は渡り部の幅１㎝、厚さ0.8㎝、長さ8.3㎝、爪部片側は破損、残存部は3.1㎝を測る。写真６の２は、渡り部の幅0.9㎝、厚さ0.4㎝、残存長5.2㎝、爪部片側が破損、残存部分も先端が欠損しているが、残存長1.9㎝を測る。

鉄釘もほとんどが破損しているが、少なくとも９点以上は存在していたと推定できる。写真６の３～６はいずれも木質が付着している。３～５は横方向の木目が、６は縦方向の木目が観察できた。これらの鉄釘は、３は断面が0.6×1㎝、４は0.8×１㎝、５は１×1.2ｃｍの素材を使用して作られている。

鉄鏃や鉄釘の出土から木棺の存在が推定できる。

写真4　牛石9号墳出土鉄鍔

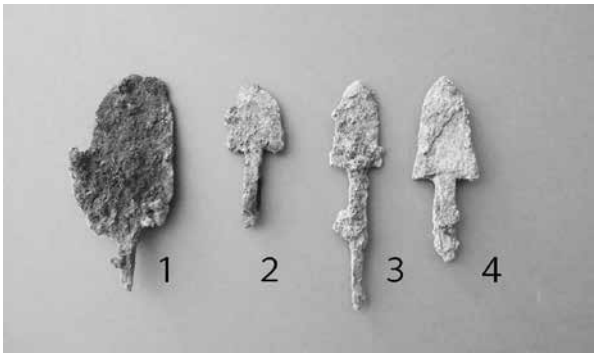


写真5　牛石9号墳出土鉄鏃

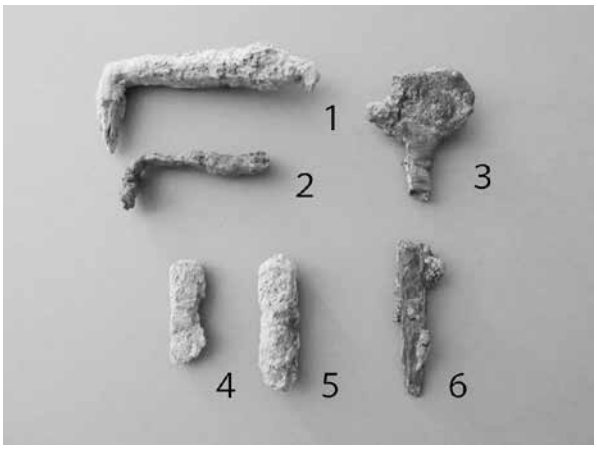


写真6　牛石9号墳出土鉄鋌・鉄釘

4）耳環・玉類

耳環・玉類はほとんどが【B】のエリア、羨道の玄室寄りで出土している。図４遺物出土状況図では耳環３点、砥石１点、玉類１９点に取り上げ№が付けられ出土地点が判明しているが、実物の所在は半数以上が不明である。そのうち実物が存在しているものについては法量等詳細の一覧表１を作成した。

耳環は３点中１点のみ実物が残存、不明のうち１点は取り上げ№によると墓道から出土している。残りの２点（１点は実物の所在不明）は【B】のエリア、羨道の玄室寄りで 30㎝の間隔をあけて出土している。この２点の耳環を中心とした約 40㎝四方の範囲から琥珀玉、ガラス玉等が出土している。耳環・玉類のこの出土状況は、これらの遺物がほぼ原位置を保っている可能性を示している。

写真図７の１は琥珀玉、２・３は埋木棗玉、４は水晶切子玉、５～７はガラス小玉、８は耳環である。

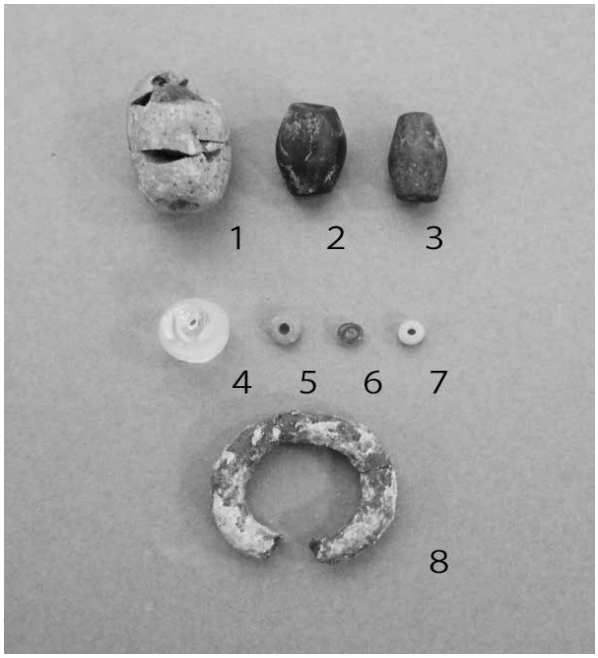


写真7　牛石9号墳出土玉類・耳環

おわりに

牛石９号墳について現場図面、写真、出土資料から発掘調査の詳細を復原、検討してみた。その結果、牛石９号墳の墳丘は直径 20 mの円墳で、その外側に幅 1.2 ～ 1.5 mの周濠が巡ることが判明した。埋葬施設は両袖式の横穴式石室で、玄室の幅約 1.6 m、長さ 3.0 m、羨道は幅約 1.0 m、長さ 4.1 mである。石室からは、須恵器の他、鉄鏃、鋏、釘などの鉄製品、耳環や玉類などの装身具も出土している。

遺物の出土状況から、玄室や羨道を使用して複数回、少なくとも３回以上の埋葬がおこなわれたと推定できる。石室から出土した須恵器の年代から、牛石９号墳は６世紀末に築造され、７世紀中頃まで埋葬施設として機能していたのではないかと思われる。

これまでの検討から、牛石９号墳は牛石古墳群の中で最終段階の横穴式石室を持つ古墳であり、またこれまで判明している泉北丘陵周辺の古墳群を含めてもやはり最終段階の古墳となることが判明した。

今後は未報告である 10 号墳の再整理・報告を行い、泉北丘陵の古墳群の詳細をより明らかにし、これらの資料がさらに活用されていくように努めたい。

（藤田道子）

註１　鉄鏃の形式分類は、川畑純氏『武具が語る古代史』2015 年３月 「矢鏃の型式学的研究」に従った。

註２　鉄鋏の部位は、岡林孝作氏『古墳時代木棺の展開過程における鋏の基礎的研究』2015 年３月（科学研究費助成事業基盤研究（C）、平成 24-26 年度、研究成果報告書）奈良県立橿原考古学研究所に従った。

参考文献

大阪府教育委員会　1968『昭和 42 年度泉北丘陵地区窯跡古墳発掘調査概要』

大阪府教育委員会　1990『陶邑Ⅶ』大阪府文化財調査報告書第 37 輯

表1　牛石9号墳出土玉類・耳環計測表

写真図№	取り上げ№	種類	直径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	備考
1	45	琥珀玉	1.4 × 1.3	2.1	0.3 × 0.25	
	136	琥珀玉				破片のみ
2	137	埋木棗玉	0.9	1.4	0.2	
3	133	埋木棗玉	0.8	1.3	0.2	
4	138	水晶切子玉	0.9 × 1.0	0.9	0.3 × 0.1	
5	124	青ガラス小玉	0.45 × 0.42	0.25 × 0.2	0.18	不透明ガラス
6	124	青ガラス小玉	0.38 × 0.35	0.2	0.1	透明ガラス
7	135	黄ガラス小玉	0.35	0.25	0.08	不透明ガラス
8	115	耳環	2.5 × 2.3			径 0.4㎝の素材を使用

【資料紹介】

令和３年度弥生プラザ展示『水差形土器の世界』展示資料について

展示場所　大阪府立弥生文化博物館２階常設展示室前
展示期間　令和３年 12 月７日（火曜日）から
令和４年６月 23 日（木曜日）
主催　大阪府教育委員会、公益財団法人大阪府文化財センター、大阪府立弥生文化博物館

はじめに

大阪府立弥生文化博物館にて令和３年度弥生プラザ展『水差形土器の世界』を開催し、大阪府内で出土した水差形土器に焦点を当てた展示を行った（写真１）。

水差形土器とはその多くに注ぎ口状の口縁を持つ、壺状の土器を指す。その形状から液体を注ぐための土器と考えられる。他にもこれまで釣瓶や薬缶等様々な用途が考えられているが、「液体を入れる」「液体を注ぐ」という点に関しては共通している。畿内を中心に弥生時代中期後半に盛行し、畿内Ｖ様式初頭には一部を除き見られなくなる、弥生土器のなかでは比較的地域も期間も限定的な器種である。

水差形土器には把手をもつ畿内型（佐原 1968）と把手をもたない摂津型（森田 1990）があるが、今回は短頸壺 No. 8（番号は表１に準拠）以外は畿内型の水差形土器を展示した。

ここでは今回展示した水差形土器を、報告書未掲載土器も含めて紹介する。

展示資料と水差形土器について

今回の展示では出土地点と形状に注目した。

1）水差形土器の出土状況

水差形土器は様々な場所から出土する。主に井戸や河川、流路など水に関係する場所や周溝墓付辺からの出土が多い。

No. １、２、４、７、11、12 の５点は周溝墓から出土している。ほとんどが周溝からの出土である。

No. １、７は和泉市府中遺跡の周溝墓の溝から出土している。No. １は周溝墓に挟まれた溝（SZ0304 南東溝、SZ05 北西溝）から壺や甕等 16 点が横倒しになって列状に並んだ状態で出土している。（写真２）No.4 は四條畷市雁屋遺跡の周溝墓西周溝から同様に状態で見つかっている。出土状況からみて溝に投棄されたものでも、墳丘面から落下したものでもない。溝に立ち並べて何らかの祭祀を行った後、埋没したと考えられている。

また、周溝墓から出土する土器にはしばしば穿孔が見られるが、水差形土器にも施されていることがあり、No. １、７がこれに当てはまる。両方とも胴下半部に施されている。水差形土器の場合、穿孔すると「液体を入れる」という機能が失われてしまうため、供献土器として祭祀で使用したとするならば、使用後に穿孔したのではないだろうか。

流路からの出土事例として、No.3 を展示した。No. ３は和泉市池上曽根遺跡の史跡指定地の北東部 55－１区で溝と護岸用杭列の隙間からほぼ完形で発見された（図１）。この溝は遺跡内の立地から水田への水路と考えられている。同様の事例として和泉市軽部池遺跡の事例がある（和泉市教育委員会 2008）。この事例では、河川と杭列に加え、河川から水田へと水を引く取水する堰が上・下流２つと導水施設が発見されている。その堰から壺の他に水差形土器が数点設置されるように出土した。河川や取水・導水施設から土器や祭祀遺物がまとまって出土する事例は弥生時代以降も多くみられる。以上の事例では安定的な水の供給を願った祭祀が行われ、そのなかで水差形土器が使用されたと考えられる。No. ６の出土地点付近ではそういった施設は確認されていないが河川から出土している。

井戸から出土した No.13 、14 は両方とも八尾市亀井遺跡から出土している（図２）。亀井遺跡ではこれまでに 70 基以上の井戸が発見されており、井戸から完形に近い水差形土器が出土する事例が見られる。

井戸から出土する遺物は実際に井戸で使用されたもの以外に井戸祭祀に使用された、または井戸廃棄後にごみ穴として廃棄されたものとして見ることができる。それは出土した層の違いや祭祀遺物が共伴する等状況によって判断できることもあるが、明確な区別は難しい。報告書では No.13、14 含めた水差形土器の一部は、釣瓶としての機能をもつと記載されている（財団法人大阪府文化財センター 1980、1984）。しかし、使用痕の判別が困難なため、釣瓶としての使用を断定することはできない。亀井遺跡では木製の釣瓶が弥生時代後期に出土しており、No.14 が出土した井戸からは植物性の縄が頸に巻かれた壺が出土しており、釣瓶として使用されたと考えられている（財団法人大阪府文化財センター 1980）。

以上の事例の他にも土坑から、No.15 、16 が完形に近い形で発見されている。

水差形土器の出土地点は主に井戸や流路等水に関係する場所や周溝墓付近に偏っている。出土状況から実用的な現代の「水差し」のような使い方の他に水のマツリや葬送儀礼等祭祀に関わる使い方が想定できる。

写真1　弥生プラザ展示「水差形土器の世界」展示状況

写真2　府中遺跡周溝墓溝（SZ03・04 南東溝、SZ05 北西）　遺物出土状況

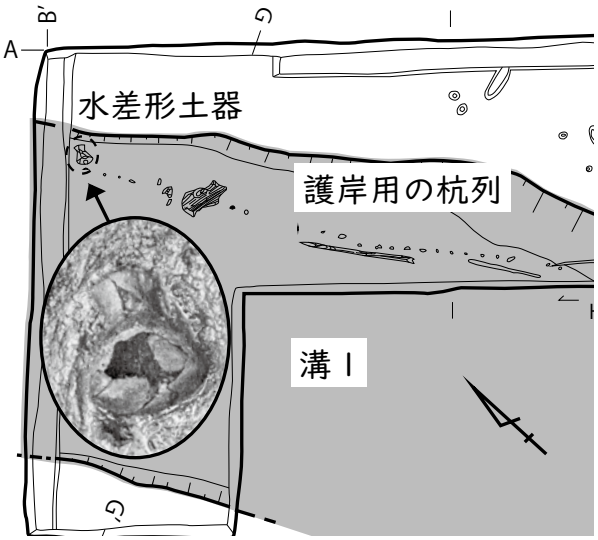


図 1　池上曽根遺跡　溝1 水差形土器出土状況図

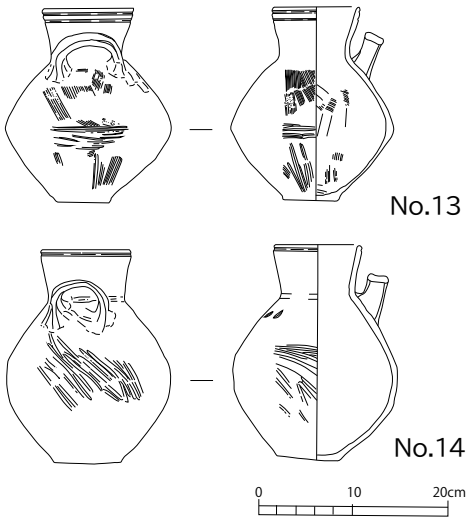


図2　水差形土器 No.13，14 実測図

写真3　水差形土器 No. 2

写真4　水差形土器 No.10

写真5　弥生プラザ「水差形土器の世界」展示資料（表1No.13 ～ 16 除く）

表1　展示資料一覧

※口径・底径・器高の単位は cm

No.	遺跡名	出土位置	掲載報告書	図	番号	口径（残存）	底径（残存）	器高（残存）	備考
1	府中遺跡	SZ0304 南東溝、SZ05 北西溝（周溝墓溝）	大阪府教育委員会『府中遺跡　大阪府埋蔵文化財調査報告 2010-5』2010 年２月	68	1056	7.8	7.6	18.2	台付 生駒西麓産
2	瓜生堂遺跡	周溝墓	報告書未掲載	—	—	5.4	3.1	10.4	ミニチュア 穿孔有 生駒西麓産
3	池上曽根遺跡	溝１（流路）杭列と溝肩の間	大阪府教育委員会『大阪府文化財調査概要 1981 池上発掘調査概要・ⅩⅢ』1981 年３月	7	1	6.7	4.0	15.5	
4	雁屋遺跡	１号墓西周溝（周溝墓溝）	大阪府教育委員会『府立四条畷高等学校校舎増築工事等に伴う雁屋遺跡発掘調査概要ー四条畷市雁屋北町所在ー』1987 年３月	11	7	7.4	4.8	21.9	穿孔有 生駒西麓産
5	山城廃寺	溝	大阪府教育委員会『山城廃寺発掘調査概要ー府営ため池等整備事業「山城新池地区」に伴う発掘調査ー』2010 年３月	46	229	8.7	6.1	21.6	
6	池上曽根遺跡	自然河川５ー１上層	大阪府教育委員会『池上曽根遺跡発掘調査概要ー池上下宮線に伴う調査ー』1997 年３月	18	15	7.2	ー	21.6	台付 ８割程度口縁部欠損（復元）
7	府中遺跡	SZ03 溝（周溝墓溝）	大阪府教育委員会『府中遺跡　大阪府埋蔵文化財調査報告 2010-5』2010 年２月	64	1061	ー	6.3	ー	口縁、把手欠損 穿孔有
8	府中遺跡	土器群２・３	大阪府教育委員会『和泉寺跡・府中遺跡 Ⅲ 大阪府埋蔵文化財調査報告 2014-5』2015 年２月	41	84	10.5	3.8	20.6	注ぎ口状の口縁をもつ短頸壺 この１点のみ弥生時代後期、他はすべて弥生時代中期
9	池上曽根遺跡	SD05 溝	大阪府教育委員会『史跡池上曽根遺跡発掘調査概要ー松ノ浜曽根線建設に伴う発掘調査ー』1990 年３月	16	114	8.5	5.4	22.8	
10	亀井遺跡	—	報告書未掲載	—	—	8.9	9.8	24.1	台付
11	弓削ノ庄遺跡	方形周溝墓１周溝	財団法人大阪府文化財センター『弓削ノ庄遺跡他 財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 133 集』2005 年８月	65	2	9.4	5.3	23.4	８割程度口縁部欠損
12	弓削ノ庄遺跡			65	1	10.0	6.5	29.6	生駒西麓産
13	亀井遺跡	SK-16 井戸	財団法人大阪文化財センター『亀井遺跡Ⅱ―本文編―』1984 年 10 月	80	1	8.8	5.7	20.5	財団法人大阪府文化財センターから出展、生駒西麓産
14	亀井遺跡	SK-25 井戸		154	17	11.5	7.2	22.8	財団法人大阪府文化財センターから出展
15	雁屋遺跡	土坑２	大阪府教育委員会『府立四条畷高等学校校舎増築工事等に伴う雁屋遺跡発掘調査概要ー四条畷市雁屋北町所在ー』1987 年３月	19	45	6.8	4.4	15.9	パネルのみ展示 大阪府立弥生文化博物館常設展示、生駒西麓産
16	東郷遺跡	SK305 土坑	大阪府教育委員会『東郷遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1989 年３月	35	259	—	—	—	展示パネルのみ （出土状況）

2）水差形土器の形状

今回の展示では出土地点とともに水差形土器の形状ついて比較し、パネル等を用いて説明した。主に台付水差形土器と口縁の形状の違いに触れた。

今回はNo. 1、6、10が台付水差形土器である。いずれも台が底にかけてハの字状に広がる形状である。展示できなかったが他にも円筒状の台が付く場合がある。台付きの水差形土器が登場するのは遅れて、Ⅳ様式以降と考えられている。

水差形土器の口縁部はNo. 1、3、12のように口縁に傾斜があり、注ぎ口側の方が反対側より器高が高くなる形状、No. 4、5、9のように口縁の高さがほぼ一定になる形状の二つに分かれる。後者は注ぎ口と反対側の口縁に抉りをもつ場合がある。抉りを作る理由は正確には判明していないが、田中清美は把手を持ち、抉りに指を掛けて支える持ち方を想定している（田中 1999）。この抉りはあらかじめ焼成前に作ることもあるが、後から打ち欠いて抉りを作っている水差形土器もみられる。また文様や調整が口縁にある場合、抉りに沿って施されていることも多い。そのため、使用に際して抉りに何らかの意味があったのではないだろうか。

また、水差形土器は一部地域を除き、Ⅴ様式初頭にはほとんど見られなくなる。しかし、畿内では入れ替わるように把手がある短頸壺や小型甕など類似した形状の土器が少数見られるようになる。類例として今回は口縁が注ぎ口状になっている短頸壺No. 8を展示した。

報告書未掲載土器について

今回展示した資料には報告書未掲載の資料２点が含まれていた。ここではその２点について紹介する。

No. 2（写真３）は東大阪市瓜生堂遺跡から出土した口径5.4cm、底径4.0cm、高さ10.4cmの小型の水差形土器である。把手側の口縁に抉りがあり、胴下半部に穿孔がある。一部胴下半部に漆とみられる黒色物質が付着している。外面は胴下半部に縦方向のミガキ、胴最大径付近と口縁に横方向ミガキ、内面はナデ、把手までミガキを施しており、比較的丁寧な調整がなされている。色調は薄い茶褐色で生駒西麓産土器である。

把手が小さく、把手と本体との間が狭いため、実用的な形状ではない。周溝墓から出土していることからも葬送儀礼で使用された土器ではないだろうか。

No.10（写真４）は八尾市亀井遺跡から出土した台付の水差形土器である。口径推定8.9cm、高さ24.1cmであり、台の底径は9.8cmである。胴は下方に向けて大きく張り出し、台はハの字状に広がる。把手は欠落しており、片方の根本のみ残っている。胎土が粗く、１～２mm程度の礫が多く含まれており、摩滅も激しく調整はほとんど残っていない。色調はにぶい黄橙色である。出土地点の詳細は不明である。

まとめ

今回は水差形土器の出土状況と形状に注目し、展示を行った。その結果、水差形土器は弥生土器のなかでも特異的な土器であることを改めて確認できた。

把手がある水差形土器は持つ部位が分かりやすく、口縁の形状から「液体を注ぐ」という使用状況がイメージしやすい。その反面、器種自体の研究はあまり進んでおらず、詳細な用途等不透明な部分もある。今後の研究の進展が望まれる。

（河原秋桜）

図出典

図１　財団法人大阪文化財センター 1984『亀井遺跡Ⅱ―本文編―』図 80- 1、図 154-17 再トレース

図２　大阪府教育委員会 1981『大阪府文化財調査概要 1981 池上発掘調査概要・XⅢ』
図版第５を一部改変、写真は図版第 12 中段

参考文献

和泉市教育委員会 2008『和泉市埋蔵文化財調査報告８ 軽部池遺跡発掘調査報告書』

大阪府立狭山池博物館 2006『平成 18 年特別展 水にうつる願い』大阪府立狭山池博物館図録８

佐原真 1968「畿内地方」『弥生土器集成』本編２

財団法人大阪文化財センター 1980『亀井・城山』

田中清美 1999「水差土器一考」『大阪市文化財協会研究紀要』第２号

寺沢薫、森井貞雄 1989「河内地域」『弥生土器の編年と様式』近畿編Ⅰ、木耳社

埋蔵文化財研究会　2008『井戸再考－弥生時代から古墳時代前期を対象として－』第 57 回埋蔵文化財研究集会 発表要旨集

森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の編年と様式』近畿編Ⅱ、木耳社

その他　表１掲載報告書に記載

【事業報告】

文化財調査事務所での普及・啓発・公開事業

はじめに

文化財保護課ではコロナウィルス感染拡大防止のため、令和元年度末から普及啓発活動の中止・延期措置を取っていた。令和３年度も人的交流を主とする事業を中心に普及啓発活動を中止もしくは延期せざるを得なかったことを前置きしておく。

研修事業

例年中学校の職場体験学習、高校生と大学生のインターンシップおよび国際協力機構（JICA）の海外研修生の受け入れを行っていたが、今年度は全ての事業が停止したため受け入れをすることはなかった。

発掘調査等の現地公開

一般府道大阪羽曳野線 (八尾藤井寺工区) 道路改良事業に伴い、津堂遺跡を調査し、古墳時代の建物跡が発見された現地公開を行う予定であったが、当日荒天により中止となった。現地公開資料は文化財保護課ホームページにて公開している。

文化財収蔵庫の特別公開

例年、和泉池上文化財収蔵庫の特別公開を年に４回程度実施している。しかし、展示の内容上、感染拡大予防を講じることが困難であり、また、多量の収蔵資料の移管予定があるため、収納場所の確保の必要性から今年度も実施しなかった。

出かける博物館事業（展示・関連講演等）

大阪府立狭山池博物館と河内長野市立ふるさと歴史学習館にて、本府教育委員会と河内長野市教育委員会、大阪狭山市教育委員会、府立狭山池博物館共催でミニ展示「歴史発見三題 2021」を開催した。本展示会では、近年の発掘調査で出土した堺市堺環濠都市遺跡出土陶磁器や岸和田市大町遺跡出土土師器等を展示した。

大阪府立弥生文化博物館では、弥生プラザとして２回展示を行った。前半タイトルは「ツボ三昧」で、弥生時代の壺形土器を中心に展示した。後半は「水差形土器の世界」として弥生時代の水差形土器を中心に展示した。

令和２年度に引き続き、大阪府立男女共同参画・青少年センター（ドーンセンター）４階では「大坂城跡出土の金箔瓦」をテーマに、豊臣期大坂城の三の丸の範囲で出土した金箔瓦を展示公開した

同じく大阪府教育センターでは「萱振１号墳出土の埴輪」をテーマに、府立八尾北高校建設時調査で出土した同古墳出土埴輪の展示を行った。

出かける博物館事業（講演等）

堺自由の泉大学から講師派遣依頼を受けて、職員を１名派遣した。37 名が受講し、「百舌鳥・古市古墳群出土の武器・武具」というテーマで講演した。

ホームページでの調査成果公開

発掘調査については、大町遺跡、府中遺跡、久宝寺遺跡、西野々古墳群の調査成果を公開した。

出土資料については、堺環濠都市遺跡から出土した青磁、牛石５号墳から出土した須恵器等について情報を公開している。

出前授業

大阪狭山市立第七小学校６年生３クラス（97 名）を対象とした出前授業を開催した。例年、遺物のハンズオンを含んだ対面授業形式で実施しており、今回も国府遺跡の縄文土器に触れてもらい、消毒等感染防止を十分に行った上で実施した。大阪狭山市西小学校も同様に実施する予定であったが感染拡大により中止した。

動画で学ぶ大阪府の文化財

昨今のコロナウィルス感染症拡大により、普及啓発事業の実施が困難になったため、小学生向けの文化財普及啓発動画の作成に着手した。

「人気者になりたい！！～仏並遺跡出土土面」と題し、令和２年度に大阪府指定文化財に指定された仏並遺跡出土土面を紹介する動画を作成した。録音ナレーションは大阪府立泉北高等学校の放送部・演劇部に依頼し、漫才風のコミカルで飽きない動画をめざした。

現在は大阪府教育庁 Youtube チャンネルで公開している（令和５年２月１日時点で 386 回再生）。ホームページで動画の振り返り学習ができるワークシートも公開している。

（河原秋桜）

写真1　ミニ展示「歴史発見三題 2021」展示状況1

写真2　ミニ展示「歴史発見三題 2021」展示状況2

写真3　弥生プラザ展示「ツボ三昧」展示状況

写真4　弥生プラザ展示「水差形土器の世界」展示状況

写真5　ミニ展示「歴史発見三題 2021」チラシ

写真6　大阪狭山市立第七小学校6年生の出前授業

写真7　動画で学ぶ大阪府の文化財「人気者になりたい!!
仏並遺跡出土土面」サムネイル

表1　令和3年度普及・啓発・公開事業一覧

事業	事業名	実施年月日	実施場所	内容	対象	備考
発掘調査の現地公開	津堂遺跡の成果報告	令和 3 年 3 月 26 日	津堂遺跡発掘調査現場	一般府道大阪羽曳野線（八尾藤井寺工区）道路改良事業に伴う調査内容の公開。荒天により現地公開は中止。	一般	現地公開資料を文化財保護課 HP で情報公開 https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/tsudo_gensetsu.html
出かける博物館事業（展覧会等）	長期展示「大坂城跡出土の金箔瓦」	令和 2 年度から継続	大阪府立男女共同参画・青少年センター	大坂城三の丸出土の金箔貼軒丸瓦等を展示。令和 2 年度から継続。	一般	文化財保護課 HP でも公開（現在は展示終了）
	長期展示「萱振 1 号墳出土の埴輪」	令和 2 年度から継続	大阪府教育センター	萱振 1 号墳から出土した円筒埴輪、形象埴輪を展示。令和 2 年度から継続。	一般	文化財保護課 HP でも公開（現在は展示終了）
	ミニ展示「歴史発見三題 2021」	令和 3 年 6 月 1 日～令和 3 年 6 月 27 日	大阪府立狭山池博物館	堺環濠都市遺跡の陶磁器や大町遺跡の土器等を展示。河内長野市、大阪狭山市、狭山池博物館との共催。	一般	文化財保護課 HP でも公開（現在は展示終了）
	ミニ展示「歴史発見三題 2021」	令和 3 年 6 月 29 日～令和 3 年 7 月 18 日	河内長野市ふるさと歴史学習館	上記資料に追加して狭山池博物館からは狭山池木製枠工の模型を展示	一般	文化財保護課 HP でも公開（現在は展示終了）
	弥生プラザ「ツボ三昧」	令和 3 年 6 月 2 日～令和 3 年 12 月 5 日	大阪府立弥生文化博物館	弥生土器の壺を展示	一般	文化財保護課 HP でも公開（現在は終了）
	弥生プラザ「水差形土器の世界」	令和 3 年 12 月 7 日～令和 4 年 6 月 25 日	大阪府立弥生文化博物館	弥生土器の水差形土器や関係する土器を展示	一般	文化財保護課 HP でも公開（現在は終了）本書 70 ～ 73 頁に詳細掲載
出かける博物館事業（講演等）	堺自由の泉大学	令和 3 年 7 月 15 日	堺自由の泉大学	テーマ「百舌鳥・古市古墳群出土の武器・武具」で講演	一般	37 名が受講
ホームページでの調査成果公開	「堺環濠都市遺跡から出土した青磁」	令和 3 年 9 月 6 日から公開	文化財保護課 HP にて公開	堺環濠都市遺跡から出土した中国産青磁について公開	一般	文化財保護課 HP https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/r3-1sakaikangou.html
	「牛石 5 号墳から出土した須恵器」	令和 4 年 2 月 28 日から公開	文化財保護課 HP にて公開	横穴式木室という特殊な埋葬施設をもつ牛石 5 号墳から出土した須恵器や馬具などの鉄製品について公開	一般	文化財保護課 HP https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/r3-2ushiishi.html
	大町遺跡	令和 4 年 2 月 21 日から公開	文化財保護課 HP にて公開	府営住宅の住宅内道路整備に伴う調査で、中世の耕作地を検出	一般	文化財保護課 HP https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/oomachi2021.html
	西野々古墳群	令和 4 年 3 月 2 日から公開	文化財保護課 HP にて公開	府営農村総合整備事業に伴う発掘調査 1,2,4 号墳の墳丘の裾や周溝の状況を確認	一般	文化財保護課 HP https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/nishinono2.html
	府中遺跡	令和 4 年 3 月 14 日から公開	文化財保護課 HP にて公開	大阪岸和田南海線に伴う発掘調査で、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴建物や古代の掘立柱建物等を検出	一般	文化財保護課 HP https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/r03_fucyu.html
	久宝寺遺跡	令和 4 年 3 月 22 日から公開	文化財保護課 HP にて公開	久宝寺緑地整備事業に伴う発掘調査で、古墳時代初頭の溝、土坑などを検出準構造船の船首・船尾を井戸枠にした 5 世紀後半の井戸が見つかった	一般	文化財保護課 HP https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/kyuhougi2.html
動画で学ぶ大阪府の文化財	「人気者になりたい!! ～仏並遺跡出土土面～」	令和 4 年 3 月 31 日から公開	大阪府教育庁 YouTube チャンネルにて公開	仏並遺跡で出土した縄文時代の土面を紹介。ナレーション、録音用機材の提供を高校生に依頼し、動画を作成した	一般	文化財保護課 HP にワークシート公開 https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/movie_domen.html 動画 QR コード

令和３年度収蔵資料

■埋蔵文化財（各収蔵庫）
(1) 北部収蔵庫（摂津市鳥飼中）
(2) 東大阪収蔵庫（東大阪市長田東）
(3) 泉北収蔵庫（高石市綾園）
(4) 文化財調査事務所（堺市南区竹城台）
(5) 泉佐野収蔵庫（泉佐野市日根野）
(6) 近つ飛鳥博物館（河南町大字東山）
(7) 和泉池上収蔵庫（和泉市池上町）
(8) 岸和田収蔵庫（岸和田市磯ノ上町）

■民俗文化財
(1) 谷口家資料 221 点
(2) 上辻家資料 132 点
(3) 守田コレクション 200 点
(4) 上平家資料 150 点
(5) 畑野家資料 68 点
(6) 三宅家資料 一括
(7) 大恩寺資料 一括
(8) 前西家資料 22 件

■美術工芸品
(1) 田中家文書一括 5 箱 4,100 点
(2)「府立大阪博物場」資料
・旧蔵美術工芸品（大阪府指定文化財）277 点
・古銭（大阪府指定文化財）4 箱 3,078 点
・その他博物場資料

■その他写真・図面・図書資料 一括

令和３年度調査・研究等の検討会

第１回　令和３年５月 12 日（水）
「陵東遺跡発掘調査成果」奈良拓弥
第２回　令和３年６月９日（水）
「西野々遺跡発掘調査報告」大澤嶺
第３回　令和３年７月 14 日（水）
「水差形土器について」河原秋桜
第４回　令和３年９月８日（水）
「宮園遺跡発掘調査成果」木村啓章、原田昌浩
第５回　令和３年 10 月 19 日（火）
「百舌鳥・古市古墳群世界遺産保存活用会議事務局の仕事について」飯塚信幸
第６回　令和３年 12 月９日（木）
「鍬形石の変遷と流通～畿内を中心に」中川恋歌
「川原寺裏山遺跡出土塑像片から見る飛鳥・川原寺の尊像構成について」北川咲子
第７回　令和４年１月 18 日（火）
「防災研修会」横田明
第８回　令和４年２月９日（水）
「岸和田市大町遺跡について／大町遺跡からの視点」三木弘
第９回　令和４年３月９日（水）
「文化財保護課 30 年／技術文化３地点比較」井西貴子

令和３年度大阪府教育庁文化財保護課刊行物一覧

大阪府埋蔵文化財調査報告
2021-1『大町遺跡Ⅴ』
2021-2『宮園遺跡Ⅲ』
2021-3『太井遺跡』
『西野々古墳群・外子遺跡・西野々遺跡発掘調査概要』

『摂津における中世城館の調査』

年報
『大阪府教育庁文化財調査事務所年報 25』

【事業報告】

令和３年度資料貸出・掲載・閲覧事業一覧

表1　実物資料・複製資料長期貸出

件数	申　請　者	遺　跡	資料内容／点数	点数	目　的
1	交野市教育委員会	大谷北窯	須恵器（杯身 14、杯蓋 9、甕 1、脚部 1、破片 21）、埴輪（破片 3）	49	交野市立教育文化会館内 歴史民俗資料展示室で常設展示
2	高槻市教育委員会	太田茶臼山古墳	円筒埴輪 3	3	高槻市立今城塚古代歴史館で常設展示
3	国立歴史民俗博物館	池上曽根遺跡	石包丁 3	3	国立歴史民俗博物館総合展示第 1 展示室「水田耕作の始まり」で展示
		陶邑窯跡群	須恵器（杯身 10、杯蓋 10）、焼け歪み須恵器 5	25	国立歴史民俗博物館総合展示第 1 展示室「倭の前方後円墳と東アジア」）で展示
		蔀屋北遺跡	土師器（高杯 1、甕 1）須恵器（杯身 1、杯蓋 1、有蓋高杯 1、有蓋高杯蓋 1、無蓋高杯 1、鼎 1）移動式カマド 1	9	
4	大阪府 府民文化部（ドーンセンター）	大坂城跡	金箔押三葉文軒平瓦 1、金箔押軒平瓦 2、金箔押桐文軒丸瓦 1、金箔押巴文軒丸瓦 1、金箔押棟込瓦 1、金箔押桐文飾瓦 3、金箔押鬼瓦 1	10	府立男女共同参画・青少年センター（ドーンセンター）4F ロビーで展示
5	泉佐野市立歴史館いずみさの	上町東遺跡	白磁椀 1	5	泉佐野市立歴史館いずみさので常設展示
		若宮遺跡	壇波羅密寺銘平瓦 4		
6	大阪府立八尾北高等学校	萱振遺跡	弥生中期（壺 1）、弥生後期（長頸壺 1、無頸壺 1、壺蓋 1）、土師器（壺 1）、須恵器（有蓋高杯 1、高杯蓋 1、杯身 1、杯蓋 1、鼎 1）、埴輪（円筒 1、蓋 6）、石製品（勾玉 4、紡錘車 2、臼玉 8）、その他（写真パネル一式）	31	生徒・保護者に対する普及啓発
7	大阪府立茨木高等学校	新庄遺跡	弥生土器（壺 2、甕 2、鉢 2、蓋 3）、磨製石斧 5	14	社会科教室内の展示コーナーで展示、活用
8	大阪府立茨田高等学校	茨田安田遺跡	弥生土器（壺 2）、須恵器（杯 5、高杯 3、椀 1、甕 4、その他 1、こね鉢 1）、韓式系土器 (甕 1)、土師器（甕 3、高杯 3、甕 2、椀 1、皿 4）、瓦器（椀 31、皿 1、火鉢 1、釜 1）、磁器（椀 2）、石製品（砥石 1）、木製品 (下駄 2、箸 2、人形首 1)、土製品（土錘 1）、金属製品（キセル 1）、その他（加工骨 1）、パネル 16	92	１号館３F「まむだ館（資料室）」で展示・活用
9	豊能町教育委員会	余野城跡	砥石 1、瓦器（椀 7、破片 12）、土師器（皿 4、破片 4）、中世陶器 4、備前擂り鉢 1、丹波焼甕 1、羽釜 1	35	豊能町立郷土資料館で展示
10	大阪府立三国丘高等学校	向泉寺跡	瓦（軒丸 10、軒平 8、鬼 3、雁振 1）、瓦器（椀 7）、土師器（皿 11）、備前 (擂鉢 1)、土師質羽釜 1、陶磁器 5、硯 1	48	校内にて展示し、日本史教育の資料および、地域府民への紹介するため
11	能勢町教育委員会	大里遺跡	弥生土器（壺 1、甕 3、無頸壺 1、鉢 1 、蓋 1、高杯 1）、土師器（壺 1、杯 2、甕 3、器台 1）、須恵器（杯 2、甕 3）、石庖丁 4、石斧 3、石錘 1、石鏃 7	46	能勢町住民サービスセンター内能勢町歴史資料室にて展示
		上椿遺跡	須恵器（甕 1）		
		尾道遺跡	須恵器（杯 1、蓋 2、円面硯 1）、土師器（高杯 1）		
		九ノ坪遺跡	黒色土器（椀 2）、土師器（小皿 3）		
12	和泉市教育委員会（和泉市いずみの国歴史館）	府中遺跡	弥生土器（高杯 1、壺 7、甕 2、蛸壺形 2）	141	和泉市いずみの国歴史館で常設展示
		坂本寺跡	軒瓦（丸 6、平 5）		
		大園遺跡	有舌尖頭器 2、子持勾玉 2、滑石製模造品（勾玉 1 、紡錘車 1）		
		池上曽根遺跡	弥生土器（甕 1、水差形 1、高杯 3、鉢 3、壺 7）、木製品（府指定：鋤 2、杓子 2、椀 2、高杯 1、合子 1、簪 3）、（斧の柄 1、布巻具 1、用途不明品 1、四脚付盤 1、臼 1、鋤 1、簪 2）、レプリカ（男根 1、広鍬 1、臼 1、杓子 1、鋤 1）、石器（錘 2、石庖丁 2、環状石斧 2、石斧 9、石槍 5、投弾 3、ヒスイ勾玉 1、管玉 5）、その他（ガラス片 3、イノシシ下顎骨 1、鹿角 1、骨製ヤス 2、骨器未製品 5、銅鏃 2、八稜鏡 1）		
		観音寺遺跡	文字瓦「信太寺」1 点		
		信太寺跡	瓦（人物画像 1、「信太寺（陰刻 1、陽刻 1)」、「主引」1、重弧文（軒丸 1、軒平 1）		
		池田寺跡	文字瓦（「池田」3、「首」1、「池田堂」1、中世文字瓦 1)、軒丸瓦（重弧文 1、単弁蓮華文 山田寺式 4、軽寺式 1、池田寺式 2)、軒平瓦（均整唐草文 1)、石製巡方 1		
		和泉寺跡	平瓦 2、軒平瓦 1、軒丸瓦（複弁蓮華文 3）		
13	大阪府立狭山池博物館	池尻城跡	冑金 1	2	大阪府立狭山池博物館で常設展示
		大和川今池遺跡	鋤 1		
14	宮崎県立西都原考古博物館	陶邑窯跡群	須恵器（杯身 16、杯蓋 21、杯身・杯蓋（溶着）3、高杯 16、高杯脚部 1、高杯蓋 4、無蓋高杯 2、甕 17、器台 5、把手付椀 2、鼎 5、長頸壺 2、短頸壺 4、平瓶 4、提瓶 4、横瓶 2、蛸壺 1）	109	宮崎県立西都原考古博物館での展示・研究、教育普及活動に使用
15	太子町教育委員会	伽山古墓	銀製帯金具（レプリカ）一式	7	太子町立竹内街道歴史資料館第２展示室で常設展示
		伽山遺跡	須恵器（杯身 1、器台 2、平瓶 1）、土師器（高杯 1、杯 1）		
16	堺市博物館	余部遺跡	瓦器（椀 27、皿 6）、瓦質羽釜 1、土師皿 1、鉄製刀子 1、鋳型 29、鉄塊 7、鞴羽口 18、砥石 7、青銅製品 2	99	堺市立みはら歴史博物館で常設展示
17	藤井寺市教育委員会	藤の森古墳	埴輪（円筒 6、朝顔 2、草摺 1、盾 1、衣蓋 1）、鉄鏃 4、鉄鎹 3、ガラス製勾玉 3、ガラス製丸玉 3、ガラス製丸玉一式	25	藤井寺市立生涯学習センターアイセルシュラホールでの展示、活用
18	泉大津市教育委員会	池上曽根遺跡	炭化米（286　M地点　B溝　黒色粘質土層）	1	泉大津市立池上曽根弥生学習館で常設展示
19	吹田市立博物館	吉志部瓦窯跡	軒丸瓦（単弁十六葉蓮華紋 1、複弁八葉蓮華紋 1)、軒平瓦（均整唐草紋 1)、平瓦 1、緑釉陶器片 2、緑釉瓦片 8、窯道具 8	22	吹田市立博物館で常設展示
20	大阪狭山市教育委員会	池尻城跡	瓦器（椀 13、椀片 6、皿 8)、瓦質釜 2、須恵器 11、青磁 4、瓦 5、土師器（釜 6、皿 10、壺 1)、陶器（東播 1、陶甕 2、備前 1、常滑 3、甕 2)、遺物袋 7	82	大阪狭山市立郷土資料館での常設展示
21	大阪府教育センター	銭塚古墳	円筒埴輪 2、蓋形埴輪 4	6	大阪府教育センター別館ロビーにて展示し、来館者に紹介することで文化財の活用を図るため
22	大阪府立四條畷高等学校	雁屋遺跡	弥生後期（鉢 3、鉢蓋 1、甕 7、壺 4、高杯 2、器台 3、台付鉢 2、長頸壺 1、台付甕 1、手焙り 2)、弥生中期（壺 3、無頸壺 1、無頸壺蓋 1、高杯 1)、須恵器（杯身 2、杯蓋 1、高杯 1、平瓶 1、壺 1、1、土師器（壺 2)、黒色土器椀 1、石器（砥石 4、石鏃 5）	78	教材として展示・活用
		更良岡山遺跡	円筒埴輪 3、須恵器（短頸壺 1、壺 1、提瓶 1）		
		その他	写真・解説パネル 21		
23	守口市教育委員会	大庭北遺跡	木簡 1、須恵器（杯（「美濃」刻印）1、大甕 1、横瓶 1、長頸壺 1)、土師器（丸底壺 1、小皿 1、三足鍋 1)、瓦器（椀 2、皿 1)、東播ねり鉢 1、瀬戸四耳壺 1	183	守口市立図書館内郷土資料展示室での常設展示
		八雲遺跡	弥生土器（大形壺 1、鉢 2、蓋 1)、玉造関係石器 164		
		梶遺跡	須恵器提瓶 1、紡錘車 1		
24	九州国立博物館	法蓮坂遺跡	銅印「當氏之印」（府指定）	1	九州国立博物館常設展示「海の道、アジアの路」
25	藤井寺市立図書館	三ツ塚古墳	小修羅	1	藤井寺市立図書館展示室
26	箕面市教育委員会	箕面経塚	和鏡 3、銅銭 4、青白磁合子（蓋 1、身 2)、青白磁小壷（蓋 1、身 2)、褐釉壷 1	14	箕面市立郷土資料館常設展示

表2　実物資料・複製資料短期貸出

件数	依頼者	遺跡	資料内容	点数	目的
1	大阪府立弥生文化博物館	池上曽根遺跡	台付鉢	1	令和３年度夏季企画展「繋栄の池上曽根遺跡－拠点集落としての姿－」おける展示・公開のため
2	大阪府立弥生文化博物館	池上曽根遺跡	ヒスイ製勾玉	1	令和３年度春夏季企画展「繋栄の池上曽根遺跡－拠点集落としての姿－」における展示・公開のため
3	大阪府立近つ飛鳥博物館	挟山遺跡 78-7 区	韓式系土器 12	21	令和３年度夏季企画展「（仮）古墳群に暮らした人たち－集落遺跡からみる古市古墳群－」における展示・公開のため
		はさみ山遺跡 82-16 区	土師器（高杯 4、二重口縁壺 1、複合口縁甕 1、布留形甕 1）、船形土製品 1		
		土師の里遺跡 79-17 区	土師器（小形壺 2、高杯 6、壺 1、甕 2、杯 3、鉢 2、把手付鉢 1）、須恵器蓋杯 5		
		土師の里遺跡 82-14 区	土師器（小形壺 1、高杯 3、甕 2）		
		土師の里遺跡 79-15 区	須恵器（把手付椀 1、杯身 1、鼓 1、高杯 3）、土師器（把手付鉢 1、壺 1）		
		応神陵古墳外堤 88-1 区	土師器布留形甕 1		
		林遺跡 18-2 区	須恵器（脚付長頸壺 1、無蓋高杯 1）円筒埴輪 1		
4	吹田市立博物館（貸出期間の延長）	上寺山古墳	須恵器（壺蓋 2、短頸壺 2、杯蓋 6、杯身 3、壺 2、子持ち壺 1、提瓶 3、平瓶 1、足付椀 1）土師器（杯 4、甕 1）轡 4、鐙 3、鉄鏃 3、刀子 3、鋏 1	40	令和３年度春季特別展「新芦屋古墳－被葬者の謎にせまる－」における展示・公開のため
5	堺市博物館	藤の森古墳	ガラス勾玉	3	令和３度夏季スポット展示「百舌鳥・古市古墳群のたからもの」における展示・公開のため
6	東大阪市	河内寺廃寺跡	軒丸瓦 5、軒平瓦 4	9	河内寺廃寺跡発掘調査報告書作成のための検討資料
7	太子町教育委員会	初田 1 号墳	埼	2	聖徳太子 1400 年遠忌記念企画展「聖徳太子墓－叡福寺北古墳－」における展示・公開のため
8	大阪府立弥生文化博物館	田井中遺跡	弥生土器（壺 4、甕 2、鉢 1、壺蓋 1、蓋 1、サヌカイト剥片 15、土錘 40、土偶 1、石棒 3、石包丁 3、石斧 5	103	令和３年度秋季特別展「近畿最初の弥生人」における展示・公開のため
		池島・福万寺遺跡	縄文土器 1、土偶 3、弥生土器（ミニチュア土器 1、壺 1、鉢 1、高杯 1）、石棒 3、土製人形 1		
		池内遺跡	縄文土器 1、弥生土器壺 1、サヌカイト（スクレーパー 1、石核 1）石包丁 3		
		弓削ノ庄遺跡	縄文土器（深鉢 4、壺 1、浅鉢 1）、石棒 2		
9	あいち朝日遺跡ミュージアム	池上曽根遺跡	ヒスイ製勾玉	1	特別企画展「弥生の巨大遺跡」における展示・公開のため
10	堺市博物館	陶器千塚 7 号墳	須恵器（杯蓋 1、坏身 1、壺 2）	21	令和３年度夏季企画展「（仮）古墳群に暮らした人たち－集落遺跡からみる古市古墳群－」における展示・公開のため
		陶器千塚 93 号墳	埼 3		
		牛石 5 号墳	須恵器（杯蓋 1、杯身 1、壺蓋 1、椀 1、脚付椀 1、長脚高杯 1、短頸壺 1、長頸壺 1、環状轡 1、鐙（兵庫鎖）1、鞍 1		
11	高槻市	弁天山 D2 号墳	家形埴輪 1、須恵器 1	3	春季企画展「王の丘－弁天山古墳群の系譜」における展示・公開のため
		弁天山 D3 号墳	甲冑形埴輪（草摺）1		
12	岸和田市教育委員会	大園遺跡	筒型器台 1、壺 2、甕 1、器台 1、土錘 4	9	企画展「岸和田市と高石市の文化財－広域連携をはじめるにあたって－」における展示・公開のため
13	大阪府立狭山池博物館	土師の里遺跡	土師器（杯 2、小型甕 1、鉢 1）、須恵器（杯 3、甕 1、壺 1）	16	令和４年度春季企画展　土木遺産展「舗装」道・路・道路　における展示・公開のため
		讃良郡条里遺跡	須恵器（杯身 1、杯蓋 1、有蓋高杯 1、有蓋高坏蓋 1，無蓋高杯 1、鼓 1）		

表3　資料撮影、写真・図面等貸出・掲載

件数	依頼者	貸出 撮影 掲載	種類	遺跡等	内容	点数	目的／掲載誌
1	大阪府立弥生文化博物館	貸出 掲載	写真	池浦遺跡	V 字溝検出状況	1	令和３年度夏季企画展「繋栄の池上曽根遺跡－拠点集落としての姿－」に伴う図録・展示パネル、ポスター、チラシ、ホームページ等の広報資料へ掲載するため
		転載		四ツ池遺跡	F 地区 G・E 溝全景	1	
2	大阪府立弥生文化博物館	撮影 掲載	写真	池上曽根遺跡	台付鉢	1	令和３年度夏季企画展「繋栄の池上曽根遺跡－拠点集落としての姿－」に伴う図録・展示パネル、ポスター、チラシ、ホームページ等の広報資料へ掲載するため
3	大阪府立近つ飛鳥博物館	貸出 掲載	写真	挟山遺跡 78-7 区	調査区全景	28	令和３年度夏季企画展「（仮）古墳群に暮らした人たち－集落遺跡からみる古市古墳群－」に伴う図録・展示パネル、ポスター、チラシ、ホームページ等の広報資料へ掲載するため
				はさみ山遺跡 82-16 区	Ⅰ区全景、土器溜、土師器高杯 3、土師器二重口縁壺、土師器複合口縁壺、船形土製品		
				はさみ山遺跡 80-1 区	竪穴住居跡		
				土師の里遺跡 82-14 区	SB01 遺物出土状況、全景、土師器小形壺、土師器高杯 3、土師器甕 2		
				土師の里遺跡 79-17 区	東区全景、西区全景、SB01、SD01 遺物出土状態		
				土師の里遺跡 79-15 区	D 区古墳時代溝		
				応神陵古墳外堤 88-1 区	土師器布留式甕		
				林遺跡 18-2 区	18-2 区墓 01、須恵器脚付長頸壺、須恵器無蓋高杯、円筒埴輪		
4	大阪府立近つ飛鳥博物館	公開	写真 パネル	寛弘寺 75 号墳	石室全景、羨道内遺物出土状況	2	令和３年度春季特別展「献ずる器－－須賀古墳群を中心に－」に伴う展示パネル
5	朝日カルチャーセンター川西教室	貸出 掲載	写真	西福井遺跡	土坑 010 全景	1	朝日カルチャーセンター川西教室の講座「縄文時代の死と埋葬」（2021 年 7 月 27 日、8 月 24 日、9 月 28 日開講予定）における PR として、朝日新聞、ホームページ、リーフレット、チラシ、ポスター等に掲載するため
6	朝日新聞社大阪本社社会部	貸出 掲載	写真	堂山 1 号墳	全景、出土甲冑、出土須恵器	3	朝日新聞デジタルにおいて、堂山古墳群史跡広場の紹介記事に掲載するため
7	堺市博物館	撮影 配信	動画	蔀屋北遺跡	陶質土器 3、馬頭蓋骨	6	特別展「海を越えたつながり－倭の五王と東アジア－」において、動画を撮影し YouTube で公開するため
				府中遺跡	陶質土器		
				三宅西遺跡	陶質土器		
8	藤井寺市教育委員会	貸出	写真 図面	国府遺跡	1970 年度調査　カラースライドファイル、ネガフォトアルバム、スクラップブック、調査図面	一式	史跡国府遺跡の今後の保存活用に向けて参考資料として使用するため
9	個人	掲載	図面	日下遺跡	冶金関連遺物実測図	6	論文に掲載するため
10	吹田市立博物館	掲載	写真	上寺山古墳	土器集合写真、須恵器平瓶 14 － 20、須恵器平瓶 14 － 20 口縁部、須恵器堤瓶 14 － 21 表、須恵器堤瓶 14 － 21 裏、鐙 23 － 3、轡 23 － 5、6、7、8、炭化した第 2 号木棺材、炭化した第 3 号木棺材	9	令和３年度春季特別展「新芦屋古墳－被葬者の謎にせまる－」における図録・ホームページ等の広報資料へ掲載するため
11	泉大津市教育委員会	貸出 展示	写真	七ノ坪遺跡	古墳時代前期初頭遺構面全景	1	泉大津市立図書館「シープラ」内歴史展示コーナーにおいて、パネル展示するため
12	株式会社スタジオタッククリエイティブ	貸出 掲載	写真	土師の里遺跡 79-15 調査	D 区古墳時代溝	2	児童書『マンガで楽しむ歴史図鑑「はにわ」』に掲載するため
				三ッ塚古墳	修羅出土状況		
13	京都市立考古資料館	貸出 展示	写真	吉志部瓦窯跡	H-1 号平窯調査状況	1	令和３年度前期特別展示「平安京をつくる・たもつ」に伴う展示パネル
14	個人	転載	写真	讃良郡条里遺跡	鞍	1	論文に掲載するため
15	株式会社ウェッジ	貸出 掲載	写真	蔀屋北遺跡	馬全身骨格出土状況	1	月刊誌『ひととき』「ニッポンの馬の話」に掲載するため
16	個人	掲載	図面	大坂城跡	朝鮮王朝陶磁器椀	1	論文に掲載するため
17	羽曳野市教育委員会	転載	写真	津堂城山古墳	津堂城山古墳後円部の石室と長持形石棺	1	『「世界遺産のまち」で学び、伝えよう！古市古墳群と羽曳野の歴史』に掲載するため
18	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	貸出 掲載	写真	蔀屋北遺跡	馬全身骨格出土状況	1	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 689 集『金井下新田遺跡《古墳時代以降編》分析・論考編』に掲載するため
19	太子町教育委員会	撮影 掲載	写真	初田 1 号墳	塼	2	聖徳太子 1400 年遠忌記念企画展「聖徳太子墓－叡福寺北古墳－」における図録に掲載するため

件数	依頼者	貸出撮影掲載	種類	遺跡等	内容	点数	目的／掲載誌
20	大阪府立弥生文化博物館	撮影掲載	写真	田井中遺跡	弥生土器（壺 4、甕 2、鉢 1、壺蓋 1、蓋 1、サヌカイト剥片 15、土錘 40、土偶 1、石棒 3、石包丁 3、石斧 5	103	令和 3 年度秋季特別展「近畿最初の弥生人」における図録･展示パネル、ポスター、チラシ、ホームページ等の広報資料へ掲載するため
				池島・福万寺遺跡	縄文土器 1、土偶 3、弥生土器（ミニチュア土器 1、壺 1、鉢 1、高杯 1）、石棒 3、土製人形 1		
				池内遺跡	縄文土器 1、弥生土器壺 1、サヌカイト（スクレーパー 1、石核 1）石包丁 3		
				弓削ノ庄遺跡	縄文土器（深鉢 4、壺 1、浅鉢 1）、石棒 2		
		掲載	写真	田井中遺跡	弥生土器、石斧・石包丁、土錘、サヌカイト剥片、石棒・土偶	5	
21	四條畷市教育委員会	貸出掲載公開	写真	高屋城跡	79-2 区西半全景、第 2 調査区埋貼塼の建物、第 15 調査区櫓台全景、第 15 調査区櫓台遺構面全景	9	三好長慶生誕 500 周年記念プレイベント　四條畷市立歴史民俗資料館第 36 回特別展『「天下の支配者」三好殿－考古学からみた天下人三好長慶の奇跡と飯盛城－』における展示パネル、図録掲載及び全国遺跡報告総覧に登録するため
				飯盛城跡	飯盛城跡古写真 5		
22	株式会社少年新聞社	貸出掲載	写真	蔀屋北遺跡	馬全身骨格出土状況	1	『人と動物の日本史図鑑②　古墳時代から安土桃山時代』（仮題）に掲載するため
23	道明寺天神通り商店街	貸出掲載	写真	三ツ塚古墳	修羅出土状況	1	道明寺天神通り商店街周辺の歴史・文化を紹介する小冊子に掲載するため
24	奈良県立橿原考古学研究所	貸出掲載	写真	蔀屋北遺跡	馬全身骨格出土状況	1	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館常設展示の展示パネルに使用するため
25	摂津市	転載	図面	太田茶臼山古墳	太田茶臼山古墳周辺古墳位置図	1	『新修摂津市史自然地理・先史古代・中世編』に掲載するため
26	株式会社八木書店出版部	貸出掲載	写真	蔀屋北遺跡	馬全身骨格出土状況	1	『古代日本対外交流史辞典』の本文参考図版として掲載するため
27	公益財団法人大阪府文化財センター	貸出掲載	写真	大坂城跡	ベネチアングラス	1	『公益財団法人大阪府文化財センター年報　令和 2 年度』に掲載するとともにホームページで公開するため
28	宝塚市教育委員会	掲載	写真	宮の前遺跡	方形周溝墓	1	『宝塚市史第 1 巻』をデジタル化し「宝塚市デジタルアーカイブ」で公開するため
29	大阪府立狭山池博物館	貸出掲載	写真	亀井遺跡	提と水田	1	令和 3 年度特別展・開館 20 周年記念展「狭山池のルーツ－古代東アジアのため池と土木技術－」に伴う図録・展示パネルに使用するため
30	あいち朝日遺跡ミュージアム	貸出掲載	写真	池上曽根遺跡	ヒスイ製勾玉	1	特別企画展「弥生の巨大遺跡」における印刷物・映像等に使用するため
31	富田林市教育委員会	貸出使用	写真	お亀石古墳	発掘調査状況	1	お亀石古墳の案内看板に使用するため
32	株式会社美交工業（都市公園久宝寺緑地指定管理共同体）	貸出掲載	写真	久宝寺遺跡	井戸検出状況、井戸枠転用の船の帆先、井戸出土の壺	3	『大阪府営久宝寺緑地開設 50 年記念誌』に掲載するため
33	泉大津市教育委員会	使用	写真パネル	池浦遺跡	環濠と考えられる溝	1	弥生学習館におけるミニ企画展「泉大津最初の弥生人」における展示パネルとして使用するため
34	岸和田市長	貸出使用	写真	岸和田城跡	岸和田城跡古写真	16	岸和田城天守閣耐震検討会議における資料調査及び会議資料として使用するため
35	関西大学総合情報学部	撮影使用	写真	藤の森古墳	出土遺物	16	百舌鳥古市古墳群出土品検索アプリに使用するため
36	株式会社童心社	転載	写真	黒姫山古墳	前方部石室、遺物出土状態	2	『遺跡から調べよう！③古墳時代』に掲載するため
37	摂津市	転載	写真	安威遺跡	出土遺物、住居 19 遺物出土状況	2	『新修摂津市史　自然地理・先史古代・中世編』に掲載するため
38	有限会社海鳥社	貸出掲載	写真	大庭北遺跡	木簡	1	『九州考古学論考』西谷　正著に掲載するため
39	藤井寺市教育委員会	貸出掲載	写真	青山 4 号墳	猪形埴輪	4	特別ミニ企画展「アイセルシュラホールのモデルって？」の展示パネルとして使用するため
				三ツ塚古墳	修羅検出状況		
				蕃上山古墳	人物埴輪 2		
		使用		三ツ塚古墳	修羅水洗い状況、修羅 PEG 含浸状況、保存風景	3	
40	堺市博物館	貸出掲載	写真	檜尾塚原古墳群	2 号墳全景、3 号墳横穴式石室 2、5 号墳主体部甕棺検出状況、6 号墳横穴式石室全景、8 号墳主体部全景、9 号墳第 3 主体玄室奥部	14	令和 4 年度企画展「古墳が変わる－百舌鳥古墳群の終わりと新たな 2 つの埋葬施設－」における図録・展示パネル、ポスター、チラシ、ホームページ等の広報資料へ掲載するため
				牛石古墳群	5 号墳墓室床面遺物出土状況、13 号墳主体部全景、14 号墳主体部全景		
				陶器千塚古墳群	7 号墳全景、93 号墳出土塼、93 号墳主体部全景		
				野々井 25 号墳	全景		
		転載	写真	檜尾塚原古墳群	甕棺、鞍、鐙鞍、環状轡、剣菱形杏葉	5	

件数	依頼者	貸出撮影掲載	種類	遺跡等	内容	点数	目的／掲載誌
41	高槻市	掲載	写真	弁天山 D2 号墳	家形埴輪 1、須恵器 1、円筒埴輪他 1	6	春季企画展「王家の丘ー弁天山古墳群の系譜ー」における図録・展示パネル、広報物等へ掲載するため
				弁天山 D3 号墳	甲冑形埴輪（草摺）1		
				太田茶臼山古墳	円筒埴輪 1		
				太田茶臼山古墳 C 号陪冢	円筒埴輪 1		
42	朝日カルチャーセンター川西教室	貸出掲載	写真	田井中遺跡	石棒	1	朝日カルチャーセンター川西教室講座「縄文時代の石製祭祀具を探る」における PR として朝日新聞、ホームページ、リーフレット、チラシ、ポスター等に掲載するため
43	堺市世界遺産課	転載	写真図面	二本木山古墳	二本木山古墳石棺展開状況写真 1、測量図 1、割竹形石棺実測図 1	9	百舌鳥古墳群魅力発掘講座「堺の古墳ー市内に残る古墳を訪ねてー」の講座資料及び堺市ホームページで録画配信するため
				檜尾塚原古墳群	配置図 1		
				檜尾塚原 3 号墳	横穴式石室写真 1、石室移築作業風景写真 1、測量図 1		
				檜尾塚原 8 号墳	主体部全景写真 1、主体部平面図 1		
44	文化庁	貸出掲載	写真	木の本遺跡	第 2 遺構面南半部	1	『水中遺跡ハンドブック』及び文化庁ホームページに掲載するため
45	近畿文化会	貸出掲載	写真	桜塚古墳群	昭和 10 年の区画整理事業前の状況	1	『近畿文化』第 868 号「ゴーランドが歩いた箕面街道の古墳時代」に掲載するため
46	株式会社 ABC アーク	転載	写真	大坂城跡	京枡	1	『歴史人』4 月増刊別冊に掲載するため
47	名古屋市教育委員会	貸出掲載	写真	三ツ塚古墳	修羅出土状況	1	「令和 3 年度はにわはこび体験」の説明資料に掲載するため
48	文化財石垣保存技術協議会	掲載	写真	シシヨツカ古墳	石室奥室	1	『文化財石垣保存技術協議会研究資料集』第 3 集に掲載するため
49	堺市博物館	貸出掲載	写真	牛石 5 号墳	墓室床面遺物出土状況	1	令和 4 年度企画展「古墳が変わるー百舌鳥古墳群の終わりと新たな 2 つの埋葬施設ー」における図録・展示パネル、ポスター、チラシ、ホームページ等の広報資料へ掲載するため
50	松原市教育委員会	貸出掲載	写真	大塚山古墳	全景	2	堺市主催の百舌鳥古墳群魅力発掘講座第 4 回「松原の古墳ー丹比野に残る古墳の痕跡ー」の講座資料及び堺市ホームページで録画配信するため
51	枚方市	貸出使用	写真	百済寺跡	講堂北辺瓦積み	1	百済寺跡説明版に使用するため
52	株式会社アド近鉄	貸出掲載	写真	三ツ塚古墳	修羅出土状況	1	近鉄藤井寺駅開業 100 周年記念デジタルサイネージに掲載するため
53	個人	貸出掲載	写真	大坂城跡	京枡、「豊」焼印、「きのとの、孫三郎、とり」陰刻	3	日本考古学協会第 88 回総会ポスターセッションタイトル「古代～中世における木地枡の分類と編年」発表資料に掲載するため
54	株式会社 NHK エンタープライズ	貸出放映	写真	田辺廃寺跡	西塔跡・基壇東縁、東塔跡・基壇全景、東塔跡・基壇外屋瓦出土状況	3	BS プレミアム「英雄たちの選択」＃ 253 不比等「日本」をつくる～国づくりの中枢にいた男の挑戦と謎～（仮題）で放映するため
55	個人	提供掲載	分析資料	大坂城跡	大坂城跡出土の金属製球体の全化学組成分析結果	1	論文に引用するため
56	北海道立埋蔵文化財センター指定管理者公益財団法人北海道埋蔵文化財センター	使用	図面	西浦銅鐸	袈裟襷文銅鐸実測図	1	令和 4 年度北海道立埋蔵文化財センター連続講座・講演会「縄文から弥生へ」のポスター・チラシに使用するため

表4　資料閲覧

件　数	申　請　者（所　属）	閲　覧　資　料	目　的	閲　覧　場　所
1	個人（京都大学）	日下貝塚出土鉄器・鍛冶関連遺物、蔀屋北遺跡出土鉄器・木器、鍛冶関連遺物	研究	調査事務所
2	藤井寺市教育委員会	国府遺跡調査写真、図面	史跡追加指定のための調査	調査事務所
3	堺市博物館	藤の森古墳出土ガラス製勾玉	展示	藤井寺市立生涯学習センター
4	堺市	大阪府文化財地名表他	業務	調査事務所
5	個人（奈良文化財研究所）	新堂廃寺出土鴟尾	研究	調査事務所
6	堺市博物館	陶器千塚７号墳出土須恵器、陶器千塚 93 号墳出土塼	展示	調査事務所
7	個人（奈良文化財研究所）	新堂廃寺出土鴟尾	研究	調査事務所
8	個人（交野市教育委員会）	日下貝塚出土鉄器・鍛冶関連遺物、蔀屋北遺跡出土鉄器・木器・鍛冶関連遺物	研究	調査事務所
9	個人（大阪府立狭山池博物館）	藤の森古墳出土ガラス玉・調査図面	研究	調査事務所
10	個人（公財）千葉県教育振興財団	誉田白鳥遺跡出土舟底形石器	研究	調査事務所
11	太子町教育委員会	初田１号墳出土塼	展示	池上収蔵庫
12	個人（京都大学）	府中遺跡出土水差形土器・短頸壺、雁屋遺跡出土水差形土器、山城廃寺跡出土水差形土器	研究	調査事務所
13	大阪府立弥生文化博物館	田井中遺跡出土遺物、池島・福万寺遺跡出土遺物、	展示	調査事務所、泉佐野収蔵庫
14	大阪府立弥生文化博物館	池内遺跡出土遺物、弓削ノ庄遺跡出土遺物、	展示	池上収蔵庫
15	個人（駒澤大学）	堺環濠都市遺跡出土遺物	研究	調査事務所
16	個人（京都府立大学）	讃良郡条里遺跡出土木製鞍	研究	調査事務所
17	個人（京都府立大学）	讃良郡条里遺跡出土木製鞍、蔀屋北遺跡出土木製輪鐙・木製鞍	研究	調査事務所
18	堺市文化財課	陶邑窯跡群確認調査図面	業務	調査事務所
19	岸和田市教育委員会	岸和田城ガラス乾板紙焼き写真	業務	調査事務所
20	個人（奈良大学）	招堤中町遺跡出土杯蓋、野端遺跡出土杯蓋、長峯丘陵遺跡出土杯蓋	研究	調査事務所
21	個人	はざみ山遺跡出土旧石器	研究	調査事務所
22	個人	国府遺跡第３地点出土旧石器、国府遺跡第６地点出土旧石器	研究	調査事務所
23	個人（関西大学）	藤の森古墳出土ガラス玉・勾玉	研究	調査事務所
24	個人（筑波大学、東京電機大学）	藤の森古墳出土ガラス玉・勾玉	研究	調査事務所
25	個人（筑波大学、東京電機大学）	藤の森古墳出土ガラス玉・勾玉	研究	調査事務所
26	個人（筑波大学、東京電機大学）	藤の森古墳出土ガラス玉・勾玉	研究	調査事務所
27	個人	西大井遺跡出土旧石器	研究	調査事務所
28	堺市博物館	牛石５号墳出土須恵器・轡・鐙	展示	調査事務所
29	個人	八尾南遺跡第６地点出土旧石器	研究	調査事務所
30	鈴鹿市考古博物館	河内国分寺跡出土軒丸瓦・軒平瓦	展示	調査事務所
31	今城塚古代歴史館	弁天山古墳群出土家形埴輪・草摺形埴輪・須恵器	展示	調査事務所
32	個人	八尾南遺跡第３地点出土旧石器	研究	調査事務所
33	岸和田市教育委員会	大園遺跡出土遺物	展示	調査事務所
34	個人（橿原考古学研究所、立命館大学）	蔀屋北遺跡出土土師器	研究	調査事務所
35	和歌山県立紀伊風土記の丘	古市大溝出土遺物	展示	調査事務所
36	個人	青山遺跡出土旧石器	研究	調査事務所
37	個人（関西大学）	藤の森古墳出土鉄鏃	研究	調査事務所
38	個人	古室遺跡、応神陵古墳外堤、誉田白鳥遺跡、高屋城跡、北岡遺跡出土旧石器	研究	調査事務所
39	個人（大阪大学）	蔀屋北遺跡出土製塩土器	研究	調査事務所
40	個人（大阪大学）	蔀屋北遺跡出土石製紡錘車・石製管玉・臼玉	研究	調査事務所
41	大阪府立狭山池博物館	土師の里遺跡出土土師器・須恵器、讃良郡条里遺跡出土須恵器	展示	調査事務所
42	個人	南花田遺跡出土旧石器	研究	調査事務所
43	個人	蔀屋北遺跡出土須恵器杯身	研究	調査事務所
44	阪南市教育委員会	塚谷古墳群発掘調査図面	業務	調査事務所

【文化財保護課】

課長
- 保存管理グループ
- 文化財企画グループ
- 調査管理グループ
  グループ長　主査
  中西裕見子

主査	横田　明	福島県派遣・収蔵庫維持管理等
主査	原田昌浩	文化財公開活用事業等
副主査	杉本清美	事務所維持管理等
副主査	森英二郎	積算および竣工検査、収蔵庫の管理等
技師	河原秋桜	収蔵庫資料等の運搬・管理等
専門員	竹原伸次	資料貸出・閲覧等
専門員	藤田道子	報告書作成関連の遺物・資料整理

- 調査事業グループ　調整総括
  調査事業補佐　補佐　小浜　成
  関　真一

主任専門員	山上　弘	調整・指導・発掘調査等
副主査	井上知花	調整・発掘調査・遺物整理等
技師	大澤　嶺	調整・発掘調査・遺物整理等
技師	新尺雅弘	調整・発掘調査・遺物整理等
技師	阿部大誠	調整・発掘調査・遺物整理等
技師	白河巳桜子	調整・発掘調査・遺物整理等

【文化財調査事務所】

令和4年度文化財保護課・文化財調査事務所組織図

大阪府教育庁文化財調査事務所年報 26
発行日　令和５年３月 31 日
発　行　大阪府教育委員会
〒 540-8571
大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06-6941-0351（代表）
編　集　大阪府教育庁文化財調査事務所
〒 590-0105
堺市南区竹城台３丁 21- 4
℡ 072-291-7401
印　刷　株式会社　近畿印刷センター
〒 582-0001
柏原市本郷５丁目６番 25 号
℡ 072-972-5918